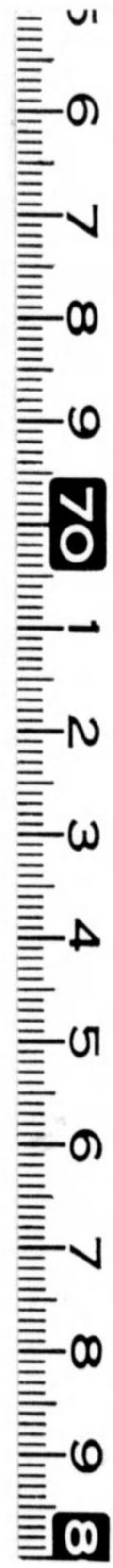


255. 2-29



255.2  
29



始





25.11.3<sup>v</sup>



14772  
7



三浦藤著作

參考  
西洋教育史



東京太陽堂發行



## 序

本書は、初めて西洋教育史を學ぶ者特に受験者の爲めに、最も適當な参考書を提供したいと云ふ目的をもつて起稿したものである。

予は、教育史を専攻したものでなければ、今後に於ても特にこれを研究しようとする者でもない。併し、予は、歴史と云ふものに深い興味をもつて居る。これまでも多くの史籍を亂讀した。此の性癖は、今後に於ても永く續くことであらう。此の性癖と趣味とが本書の著作を促したのである。

西洋教育史の既に刊行せられて居るものは二三に止まらない。中には専門の學者の手によつて成れるものもあり、受験者を標準として編纂したものもある。専門の學者の著書は、内容の上に於て比較的信用し得るものであらうが、何れも文辭生硬、叙述晦澁、到底、初學者の参考書に適しない。中には著者が餘り博學を衒ひ過ぎたものもある。かくの如き書物は、讀者の爲めに甚だ不親切と云はなければならぬ。受験者を標準とした著書は、割合によくまとまつて居て、讀者に便利を與へ



るやうに出来て居る。併し、其の半面には、無責任に書きなぐつたもの、あまり簡單に過ぎて内容を把握するに困難を感ずるものも多い。兩者の中間を行く最もよき参考書にしたいと云ふのが著作の動機であつた。なるべく内容を正確に、なるべく文辭を明瞭に、なるべく叙述を體系的にしたいと云ふのが終始一貫した著作中の苦心であつた。

予が教育史に關する書物を精讀したのは、十數年の昔であつた。予は、其の頃、諸書から抄録してまとめた詳細な備忘録を所有して居た。最近出版の類書を参考として、其の備忘録を加除訂正し、全部書き改めたものが本書である。今日かゝる著書を出さうと思ふ意志もなかつたが、書肆の懇切な勧めと、此の書が獨學者に多少なりとも参考となるならばと云ふ二つの理由により、遂に刊行を決したものである。

前述の如き目的の下に起稿したものであるから、教育史の全般に互る事柄を、最大漏らさず親切に説き盡すことを力めた。普通に教育史と云へば、たゞ教育の理論と實際のみを述べるのが至當であるが、本書に於ては、一般の歴史の概要、思想史の概略をも併せて叙述した。故に、他の教育史の如く、西洋史やまたは西洋哲學史を座右に置いて併讀せざるも、本書のみによつて容易に其の目的を達し得るであらう。此の點は、現に出て居る多くの教育史中にも例のなきものと思へる。また總べての事柄を遺漏なく記載すると云ふ態度を以てかゝつたので、本書一卷によつて受験等には必ず事足るものと思ふ。本文中にも記してある通り、最後の一章のみは、他の章と比較して、稍、簡單に失して居るから、此の點は、輒近の教育學説を詳述した他の書物を参照することが必要であらう。本書は、決して著者の獨斷私見を加へない。各學説の批判の如きも、概ね諸書に定説として記されたもののみを採つたのである。此の點も亦受験者が安心して讀めるものと思ふ。

本書の著作に當り、既刊の西洋史・西洋哲學史・西洋教育史等を多く参考とした。就中、箕作博士の「西洋史講話」吉田博士の「西洋教育史概説」大瀬博士の「歐米教育史」等からは、最も多くの恩恵を受けた。其の他の教育史は、殆ど残らず参照した。一々其の書名を挙げないが、本書の刊行に際し、茲に篤く謝意を表する次第である。

昭和三年十二月

著者識



考參 西洋教育史

次



第一篇

古代教育史

第一章

自然民族の教育

人類の發生と發達——自然民族の社會組織と生活——自然民族の教育

(二)

第二章

希臘の教育

第一節

概

說

希臘の國情——希臘人の性質——希臘思想の特色——希臘教育の特質

(七)



第二節 スバルタの教育……………(10)

スバルタの興起と其の國情——スバルタの教育理想——スバルタの教育方法——スバルタの女子教育——スバルタ教育の批判……………(一四)

第三節 アテネの教育……………(一三)

アテネの興起と其の國情——スバルタとアテネ——アテネの教育理想——アテネの教育方法——アテネの女子教育——アテネ教育の批判……………(一三)

第三章 希臘の教育思想……………(一三)

第一節 希臘の文化と教育思想……………(一三)

希臘の文化——希臘の教育思想……………(一三)

第二節 ピタゴラスの教育說……………(一四)

ピタゴラスの根本思想——教育說……………(一四)

第三節 ソフィストの教育說……………(一五)

ソフィストの根本思想——教育說——ソフィストの功罪……………(一五)

第四節 ソクラテスの教育說……………(一六)

ソクラテスの根本思想——教育說——ソクラテスの功績……………(一六)

第五節 プラトーンの教育說……………(一七)

第六節 アリストテレスの教育說……………(一八)

プラトーンの根本思想——教育說——プラトーンの教育說に對する批判……………(一八)

アリストテレスの根本思想——教育說——アリストテレスの教育說に對する批判……………(一八)

第四章 希臘晩年の教育……………(一七)

第一節 希臘教育の變遷……………(一七)

希臘に於ける國情の變遷——希臘晩年の教育……………(一七)

第二節 希臘晩年の諸學派と教育……………(一八)

エフェーエの變遷——修辭學校及び哲學學校——アレキサンドリアの文化と教育……………(一八)

第三節 希臘晩年の諸學派と教育說……………(一九)

ストア學派と教育——エピクロス學派と教育——懷疑學派と教育……………(一九)

第五章 羅馬の教育……………(一九)

第一節 概 說……………(一九)

羅馬の建國と其の盛衰——羅馬人の特質——羅馬の社會狀態——羅馬教育の特色……………(一九)

第二節 羅馬の教育……………(二〇)



第六章 羅馬の教育思想

前期の教育——後期の教育——羅馬の女子教育——羅馬の教育に對する批判

第一節 羅馬の文化と教育思想

羅馬の文化——羅馬の教育思想

第二節 シセロの教育説

シセロの學風と思想——教育説

第三節 セネカの教育説

セネカの根本思想——教育説

第四節 クインチリアヌスの教育説

クインチリアヌスの根本思想——教育説(教育の目的——教育の時期——教育の方法——教師論——教育の場所)——クインチリアヌスの教育説に對する批判

(六六)

(六七)

(六八)

(六九)

(七〇)

第二篇 中世教育史

第一章 中世期の國情と文化

(七一)

第一節 中世期に於ける諸國の盛衰

ゲルマニヤ種族の移動——サラセンの興起——フランクの活動——ノルマンの活動——トルコの勃興

(七二)

第二節 基督教の起原と其の發達

基督教の起原——基督教の普及——羅馬法王の起原と其の勢力

(七三)

第三節 基督教の教義

基督教の教義——基督教神學の成立

(七四)

第二章 中世期の教育

(七五)

第一節 中世期の社會と教育

中世期の社會——中世期教育の特質

(七六)

第二節 僧庵學校

僧庵學校の起原——僧庵學校の制度——僧庵學校の實際教育——カール大帝と僧庵學校

(七七)

第三節 騎士の教育

騎士道——騎士の教育——騎士の女子教育

(七八)

第四節 市民の教育

都市の發達と市民教育の實際——騎士の教育と市民の教育

(七九)



第五節 大學教育……………(九七)

大學の起原——著名なる大學(サレルノ大學——ボロニア大學——巴里大學——其他の大學)——大學の組織——大學教育の實際

第三章 中世期の教育思想……………(一〇一)

第一節 中世期の思想界と教育思想……………(一〇二)

希臘・羅馬思想と基督教——中世期末の思想界

第二節 基督教と教育思想……………(一〇四)

基督教の教義と教育——基督教の教育上に及ぼせし利害

第三節 アルクインの教育思想……………(一〇六)

アルクインの功績——アルクインの教育思想

第四節 ラバヌス・マウルスの教育思想……………(一〇七)

ラバヌスの功績——ラバヌスの教育思想

第五節 スコラ哲學と教育思想……………(一〇八)

スコラ哲學の盛衰——スコラ哲學と教育思想

### 第三篇 近世教育史

第一章 近世期の國情と文化……………(一一一)

第一節 近世期に於ける各國の興亡……………(一一一)

近世初頭の世界的革命——地理上の發見——封建制度の崩壞——宗教上の争亂——佛國の盛衰——英國の發展

第二節 近世期に於ける文化の發展……………(一一三)

近世文化の曙光——近世期に於ける思想の發展

第三節 近世の文化と教育……………(一一七)

文化と教育——近世の文化と教育

第二章 第十六世紀の教育及び教育思想……………(一二九)

第一節 文藝復興と教育……………(一二九)

文藝復興の起原と其の影響——文藝復興と教育思想——文藝復興と實際教育(文藝復興と初等教育——文藝復興と中等教育——文藝復興と大學教育)

第二節 新人文主義の教育思想……………(一三三)

伊太利に於ける人文主義の教育——ヴェルゼリオの教育説——グエジオの教育説——北米に於ける人文主義と教育思想——アグリコラの教育説——エラスムスの教育説——ウインヘリングの教育説——ドイツの教育説——アスカムの教育説



第三節 宗教改革と教育……………(一四)

宗教改革の由來と其の影響(宗教改革の内的原因—宗教改革の外的原因—宗教改革の功績者)—宗教改革と教育思想—宗教改革と實際教育(宗教改革と初等教育—宗教改革と中等教育—宗教改革と大學教育)

第四節 宗教改革時代の教育思想……………(一五)

概況—ルーテルの教育説(教育の根本思想—初等教育論—中等教育論—大學教育論—教師論—ルーテルの事業と思想に對する批判)—メランヒトンの教育説(其の人物と思想—大學教育論—中等教育論)—トロツツェンドルフの教育説—スツルムの教育説—ネアンデルの教育説

第五節 實學主義教育説の先驅……………(一六)

ラブレの教育説(教育論—教育主義)—モンテイニユの教育説(教育の目的—家庭教育論—教材選擇論—教授及び訓練論)—マルカスターの教育説

第三章 第十七世紀の教育……………(一六)

第一節 實學主義の勃興……………(一六)

實學主義の意義—實學主義の由來—(思想上の原因—社會上の原因)—實學主義の先驅者—實學主義の特質

第二節 宗教界の新傾向……………(一七)

ジャンセン主義の起原—ジャンセン主義の教育に及ぼせる影響—ゴール・ロワヤールの教育—敬虔主義

起原—敬虔主義の教育に及ぼせる影響

第三節 第十七世紀の實際教育……………(一七)

獨逸の實際教育—教育上の新傾向—宮廷教育—庶民教育—佛國の實際教育(王族教育—庶民教育—女子教育)

第四章 第十七世紀の教育思想……………(一七)

第一節 第十七世紀の思想界と教育思想……………(一七)

第十七世紀の思想界—ベーコンの哲學の教育思想に及ぼせる影響—第十七世紀の教育思想

第二節 ミルトンの教育説……………(一八)

教育目的論—教育論—中等教育論

第三節 ラトケの教育説……………(一八)

新教授法の要旨—教師論

第四節 コメニウスの教育説……………(一八)

根本思想—教育の目的—教授の原則(客觀的自然主義)—教授の方法—訓練論—學校系統論—コメニウスの教育説に對する批判

第五節 ロツクの教育説……………(一九)

根本思想—教育の目的—體育論—德育論—知育論—ロツクの功績—ロツクの教育説に對する



批判

第六節 フェネロンの教育説……………(100)

根本思想——女子教育の目的——教授及び訓練論——フェネロンの功績

第七節 フランケの教育説……………(102)

根本思想——教育の目的——實際教育論——フランケの功績

第八節 エスイット派の教育説……………(104)

エスイット派の起原と變遷——エスイット派の教育説——エスイット派の教育説に對する批判

第五章 第十八世紀の教育……………(111)

第一節 啓蒙思潮と理性主義……………(111)

啓蒙思潮とは何ぞや——啓蒙思潮と理性主義——理性主義と教育

第二節 第十八世紀の實際教育……………(114)

獨逸の實際教育(プロシヤの學校教育——獨逸の實際教育家)——佛國の實際教育(エスイット教育の排斥——佛國の大革命と教育)——オーストリアの實際教育——特殊教育の發達

第六章 第十八世紀の教育思想……………(111)

第一節 第十八世紀の思想界と教育思想……………(111)

啓蒙時代の思想界と思想家——第十八世紀の教育思想

第二節 ルソーの教育説……………(116)

根本思想——教育の目的——教育の方法——エミールの要旨——ルソーの自然主義とコメニウスの自然主義——ルソーの教育説の影響——ルソーの教育説に對する批判

第三節 汎愛派の教育説……………(118)

汎愛派とは何ぞや——パセドゥの教育説(教育の目的——教育の方法——パセドゥの功績)——ザルツマンの教育説(教育の目的——教育の方法——教師論)——其の他の汎愛派(カンパ——トラップ——ロヒョウ)——汎愛派の教育説に對する批判

第四節 カントの教育説……………(120)

根本思想(認識論——道徳論——藝術論)——教育の目的——教育の必要と可能——教育の方法(訓育論——知育論——養護論)——カントの教育説の影響(教育思想に及ぼせる影響——實際教育に及ぼせる影響)——カントの教育説に對する批判

第七章 第十九世紀の教育……………(127)

第一節 第十九世紀の社會事情と教育……………(127)

第十九世紀の社會事情——第十九世紀に於ける教育の新傾向

第二節 第十九世紀の實際教育……………(130)



第八章 第十九世紀の教育思想……………(二七八)

第一節 第十九世紀に於ける教育思想の發達……………(二七八)

學術の進歩と教育思想——文藝美術の發達と教育思想——第十九世紀の教育思想

第二節 新人文主義の教育說……………(二八二)

新人文主義の由來——ヘルデルの教育說(教育の目的——教育の方法)——シルレルの教育說(根本思想——教育の目的)——ラスキンの教育說——フンホルトの教育說——人文主義と實踐主義

第三節 ベスタロツチの教育說……………(二九〇)

ベスタロツチの事業——根本思想——教育の根本原理——教育の目的——教育の方法(自然主義——直觀主義)——ベスタロツチの教育說に對する批判——ベスタロツチの影響(各國に於けるベスタロツチ運動——思想上に及ぼせる影響——實際教育上に及ぼせる影響)

第四節 ヌファイヒテの教育說……………(二九七)

根本思想——教育の目的——教育の方法——ファイヒテの教育說に對する批判

第五節 ニイマイエルの教育說……………(三〇〇)

教育の必要及び意義——教育學の概念——教育の目的——教育の方法(知育論——訓育論——體育論)——學校論及び教師論——ニイマイエルの教育說に對する批判

第六節 ヘーゲルの教育說……………(三〇〇)

根本思想——教育の意義及び目的——教育の方法(教授論——訓育論——ヘーゲルの教育說に對する批判)

第七節 シュライエルの教育說……………(三〇五)

根本思想——教育の意義——教育學の性質及び其の基礎科學——教育の目的——教育の方法(教授論——訓育論——養護論——シュライエルの教育說に對する批判)

第八節 フレーベルの教育說……………(三一五)

フレーベルの事業——根本思想——教育の目的——幼兒教育の原理——幼兒教育の方法——フレーベルの影響——フレーベルの教育說に對する批判

第九節 ヘルバルトの教育說……………(三二〇)

根本思想(形而上學說——倫理學說——心理學說)——教育學の組織——教育の目的——教授論(教育的教授——興味說——教授段階說)——訓練論——管理論——ヘルバルトの教育說に對する批判

第十節 ヘルバルト學派の教育說……………(三二五)

チラーの教育說(中心統合法——開化史的段階說——形式的段階說)——ラインの教育說(教育學の體系——教科の分類——教材の排列及び統合——教授の段階)——アルプフェルドの教育說(教育の目的——教授の方法)——ヘルバルト學派に屬する其の他の教育學者(ストイ——ロイツ——其他)

第十一節 ベネケの教育說……………(三六二)



根本思想——教育學の性質——教育の意義及び目的——教育の方法（教授論——德育論——體育論）——  
ベネケの教育説に對する批判——ベネケ派の教育學者（ドレスラー——ザツテス等）

第十二節 **ゲーステルウエツヒの教育説**……………(三七〇)

教育の目的——教育の原理——教授の法則——ゲーステルウエツヒの功績

第十三節 **ローゼンクランツの教育説**……………(三七五)

教育學の性質及び體系——教育の概念——教育の方法——教育の史的研究——ローゼンクランツの教育説  
に對する批判

第十四節 **スベンサーの教育説**……………(三七九)

根本思想——知育論——德育論——體育論——スベンサーの教育説に對する批判

第十五節 **其の他の教育説**……………(三八四)

アノルド——ベル——ランカスター——レークス——メイン——ジャコト——ホレスマン——米國  
に於ける其の他の教育家（バーナード——ペーシ——シエルドン——パーカー——ジョホノット）

第九章 **輓近の教育及び教育思想**……………(三九五)

第一節 **概 説**……………(九五)

教育制度の整備（獨逸の學制——佛國の學制——英國の學制——米國の學制）——教育事實の進歩——教  
育學研究の發達——教育新學説の勃興

第二節 **社會的教育説**……………(四〇一)

社會的教育學の由來——ナトルプの教育説（根本思想——教育の概念——教育の目的——教育の方法）——  
ベルゲマンの教育説（教育の概念——教育の目的——教育の方法）——ヂューウイの教育説（根本思想  
——教育の意義及び目的——教育の方法）——ワイルマンの教育説

第三節 **實驗的教育説**……………(四一一)

實驗教育學の由來——モイマンの教育説——ライの教育説

第四節 **人格的教育説**……………(四一四)

人格的教育學の由來——人格的教育學の根本思想（オイツケンの哲學）——ブツアの教育説——ケストナ  
ーの教育説——リンデの教育説

第五節 **藝術的教育説**……………(四一八)

藝術的教育説の由來——ツエーベルの教育説

第六節 **作業的教育説**……………(四二〇)

作業主義教育説の由來——ケルシエンシユタイナーの教育説——ガウテイツヒの教育説

——〔西洋教育史〕目次終——



第一圖	公立體操場……………	二七
第二圖	音樂稽古場……………	二七
第三圖	アテネの教僕……………	二八
第四圖	オリンピヤ大祭狀況……………	二九
第五圖	希臘兒童の服裝……………	三〇
第六圖	ソクラテス……………	三〇
第七圖	プラトーン……………	三一
第八圖	アリストテレス……………	三二
第九圖	羅馬の家庭……………	三三
第二〇圖	羅馬の小學校……………	三三
第二一圖	シセロ……………	三六
第二二圖	キリスト……………	三八
第二三圖	僧庵の教育……………	三九
第二四圖	騎士兒童の遊戯(一)……………	三九

挿畫目録

第二五圖	騎士兒童の遊戯(二)……………	三九
第二六圖	徒弟の學校……………	三九
第二七圖	中世期の大學に於ける講義の模様……………	三九
第二八圖	文藝復興時代の宮廷學校……………	三三
第二九圖	罪障贖宥の圖……………	三六
第三〇圖	カルザイン……………	三六
第三一圖	ルーテル……………	三六
第三二圖	教師としてのルーテル……………	三五
第三三圖	コメニウス……………	三六
第三四圖	世界圖繪の挿畫……………	三六
第三五圖	世界圖繪の一頁……………	三八
第三六圖	ロツク當年に於ける教授の狀態……………	三九
第三七圖	フエネロン……………	三九

第一圖 公立體操場……………  
 第二圖 音樂稽古場……………  
 第三圖 アテネの教僕……………  
 第四圖 オリンピヤ大祭狀況……………  
 第五圖 希臘兒童の服裝……………  
 第六圖 ソクラテス……………  
 第七圖 プラトーン……………  
 第八圖 アリストテレス……………  
 第九圖 羅馬の家庭……………  
 第二〇圖 羅馬の小學校……………  
 第二一圖 シセロ……………  
 第二二圖 キリスト……………  
 第二三圖 僧庵の教育……………  
 第二四圖 騎士兒童の遊戯(一)……………  
 第二五圖 騎士兒童の遊戯(二)……………  
 第二六圖 徒弟の學校……………  
 第二七圖 中世期の大學に於ける講義の模様……………  
 第二八圖 文藝復興時代の宮廷學校……………  
 第二九圖 罪障贖宥の圖……………  
 第三〇圖 カルザイン……………  
 第三一圖 ルーテル……………  
 第三二圖 教師としてのルーテル……………  
 第三三圖 コメニウス……………  
 第三四圖 世界圖繪の挿畫……………  
 第三五圖 世界圖繪の一頁……………  
 第三六圖 ロツク當年に於ける教授の狀態……………  
 第三七圖 フエネロン……………



第五圖	フランケ	.....	二〇五
第六圖	フランケ學院	.....	二〇六
第七圖	エスイット派のコレヂ	.....	二一〇
第八圖	エスイット派の教室	.....	二一一
第九圖	第十八世紀末に於ける教育の有様	.....	二一六
第十圖	ルソ	.....	二二七
第十一圖	パセドウ	.....	二四〇
第十二圖	パセドウ初等讀本の挿畫	.....	二四一
第十三圖	カン	.....	二五一
第十四圖	ケンブリッヂの全景	.....	二七一
第十五圖	ダーウイン	.....	二七九
第十六圖	ラン	.....	二八〇
第十七圖	ハスタロツチ	.....	二九二
第十八圖	ハスタロツチの孤兒院	.....	二九四
第十九圖	ハスタロツチ教化圖	.....	二九五
第二十圖	シユライエルマツヘル	.....	三〇六
第二十一圖	フレール	.....	三〇三
第二十二圖	フレールベルの幼稚園	.....	三〇四
第二十三圖	フレールベルの恩物	.....	三〇七

第二十四圖	ヘルバルト	.....	三〇八
第二十五圖	ゲイステルウエツヒ	.....	三一〇
第二十六圖	スメンサー	.....	三一〇
第二十七圖	ベ	.....	三二六
第二十八圖	ランカスター教育法の實際(一)	.....	三三八
第二十九圖	ランカスター教育法の實際(二)	.....	三八八
第三十圖	ランカスター教育法の實際(三)	.....	三八八

# 参 考 西 洋 教 育 史

三 浦 藤 作 著

こゝに西洋教育史と稱するは、古代より現代に至るまでの歐米諸國に於ける教育の歴史である。教育史といふものは、哲學や倫理學の歴史即ち哲學史及び倫理學史と其の性質を異にして居る。教育史といへば、教育學及び教育思想の歴史の外に、教育制度及び教育施設並に實際教育の歴史を含んで居るからである。通常、教育史の内容としては、(一)教育學及び教育思想の變遷、(二)教育の事實及び實際教育の發達、(三)教育家の事蹟等が擧げられる。教育史に關する一般的事柄は、こゝにこれを述べることを略し、直ちに西洋に於ける教育の變遷を叙述しようと思ふ。但し本書は、もと西洋教育史の概要を極めて簡明に理解せしめる教科書乃至参考書の性質を有して居るものであるから、此の目的に従つて、從來刊行せられた諸書を参照し、最も穩健正確な定説を採り、これを忠實に講述して行きたいと思ふ。教育史に關する著者の私見等は、全くこれを出さないことにする。

西洋の教育史を述べるにも亦これを便宜上(一)古代、(二)中世、(三)近世の三期に分つことにしたい。



## 第一篇 古代教育史

古代とは、人類發祥の昔から、希臘時代及び羅馬全盛時代を経て、西羅馬の滅亡に至れる頃までを云ふ。主として叙説すべきものは、希臘及び羅馬の教育である。

### 第一章 自然民族の教育

**人類の發生と發達** 人類が如何にして發生し、人類の文化が如何にして發達したか。これは、今日でも未だはつきりして居ない問題である。文献といふものの殆ど残つて居ない原始時代に於ける人類の生活や文化の状態に就いては、今日に於ても、種々の方法によつて研究せられ、また種々の意見が現はれて居る。併し、それ等の研究の結果といふものは、非常に曖昧模糊である。學者の意見の中にも、何程まで信を措くに足るか、頗る疑問に思はれるものが多い。

人類が今から何年前に發生したか、それは明かに斷言し得られない問題である。或る學者は、百萬年前と云ひ、或る學者は、五十萬年前と云ひ、或る學者は、二十五萬年前と云ひ、また十萬年前と云つて居る者もある。とに角、人類の發生が頗る悠遠なものであることは明かである。人類の發生は、かくの如く古い。而して、歴史的の記録の存するは、僅々數千年に止まつて居る。有史以前の社會状態や、そこに行はれた教育が如何なるものであつたか、此の興

味ある問題は、東西の教育史が先づ其の冒頭に於て考察しなければならぬものである。併し、此の問題に就いては、僅かに今日の學問特に考古學や人類學や生物學や社會學等の教へるところに基づいて、種々の斷案を下すのみに過ぎない。

人類が五十萬年の昔に發生したか、或は百萬年の昔に發生したか、それはよくわからない。最初に發生した人間は、如何なるものであつたであらう。基督教は、人類を以て神の創造し給へるものとし、進化論者は、生物進化の原則に基づいて人類の發生を説明した。人類が如何なるものとして此の世に現はれて來たか、それは全く斷定を下し難い未解決の問題である。併し、今日の世の中に生れた理知の發達した者には、人間が今日の如き完全な身體を備へ、且つ發達した精神を有する者として最初から生じて來たものと考へられない。勿論、人間は、最初から今日のやうに發達する可能性をもつた生物として出現したものであらう。併し、今日よりも極めて幼稚な状態から、今日のやうに發達して來たものであることは、容易に信じ得られる。

人類が極めて幼稚な状態から、今日、吾人が人間と稱して居るやうな形態を具備し、人間の生活をするやうになつたのは、有史以前の何年位に遡つた頃からのことであらうか。これも亦容易に推斷し難い問題である。

**自然民族の社會組織と生活** 社會學者は、自然民族の時代を、原始時代とトミズムの時代とに分けて居る。而して、原始時代からトミズムの時代のへの推移には、非常に悠久な歲月を経たものと認めて居る。

自然民族の時代に於ては、血族の觀念が社會組織の根柢をなして居た。即ち、原始的な人類の間には、血族關係以外に社會的關係と云ふものはなかつたのである。換言すれば、家族とか氏族とか種族とか云ふもの外に、社會組織



はなかつたのである。これ等の未開な人類は、自然の事物を使用することを知つて居た。併しながら、未だ自然の勢力を使用することを知らなかつた。従つて、彼等の武器は、石や木や粘土や、又は動物の骨や角のやうなもので作つたもののみであつた。彼等は、まだ一定の土地に定住することなく、食物を追ふて次から次へと漂浪の生活を續けた。所謂遊牧の民であつた。彼等の住所は、天然の洞窟や、獸皮等を天幕とせる粗末な小屋に過ぎなかつた。彼等の食物は、鳥獸の肉や果實草根のみであつた。

かくの如き生活をして居る自然民族の間にも信仰といふものがあつた。最初の民族の間に存在した信仰は、アニミズムと稱する世界觀から來たものであつた。未開人は、天地間の事物に悉く人格の存在を認め、あらゆる自然現象を人と同じやうな意志から起れるものと考へた。即ち、未だ生物と無生物との間に、明かな區別がなかつたのである。未開人の間には、不思議な感を與へることが多かつた。例へば、夢を見るとか、打撃のために人事不省に陥るとか、今日の人々には、尋常茶飯事のやうに思はれて居るものが、一々奇妙不思議に思はれたのである。さうして、これ等の事柄は、彼等をして、目に見える肉體の外に、目に見えない他のものの存在することを信するに至らしめた。今日の人間が考へて居るやうに、人間のみが靈的存在ではなかつた。人間以外の動物も植物も礦物もみな靈を有するものであつた。かゝる世界觀に基づいて、彼等は、あらゆる事物に對する崇拜の信仰を有して居たのである。

此のアニミズムから更に進んだものは、トーテムズムであつた。トーテムズムといふのは、動物の崇拜である。自然人は、其の形態も生活も動物に近いものであつた。従つて、自然人は、或る種の動物を以て、自己よりも優れたものと考へた。而して、或る種の動物を迷信的に崇拜し、自分は、其の動物の子孫であると信じ、動物の名を自分の名に

つけてこれを誇つた。トーテムとは、かくの如く考へられた動物をいふのである。

トーテムズムから更に進んで、こゝにはじめて祖先崇拜を生じて來る。トーテムズムに於ては、他の動物を自己の祖先と認めてこれを崇拜するが、此の時期に入れば、人類としての祖先を崇拜するやうになる。此の時期に於て、人類の精神生活は、一段の進歩を遂げたものである。併しながら、此の時期の人間には、まだ經驗を分析總合して新しい法則を構成する思索力の發達等、全くこれを認めることが出來ない。

**自然民族の教育** 有史以前の自然民族は、前述の如き社會組織の下に、前述の如き生活をなし、前述の如き信仰を有して居たものと思はれる。かくの如き民族の間に於ける教育の狀態が如何なるものであつたかといふことも粗ぼこれを察するに難くない。

自然民族の間にも、教育の事實が存在して居たことは明かである。併し、其の教育なるものは、組織も方法も内容も極めて單純なものであつた。彼等には、未だ教育の目的に對する自覺がなかつた。何のために子どもを教へ育てるか。それをはつきりと意識して居なかつた。或る學者は未開人の教育にも目的があつたやうに言つて居る。例へば、未開人は團體の永續的發展を教育の目的とした明言した學者がある。併しながら、未開人に團體の永續的發展といふが如き理想の存在は、甚だ疑はしいのである。

自然民族の教育機關は、専ら家庭に限られて居た。學校といふやうな設備は、勿論、まだなかつた。家庭の組織も甚だ不完全なものであつた。併し、血族の者が集まつて生活して行くところに、一つの團體の組織が成り立つて居たことは明かである。教育は、此の血族の團體である家庭の中に於て行はれたのであつた。家庭の中心となつて居るも



のは、子どもの父である。父は、其の子どもに對して絶対權を有して居た。所謂生殺與奪の權利を有して居たのである。彼等は、子どもを非常に愛した。子どもに對しては、寧ろ頗る寛大であつた。子どもに過失があつても、たゞこれを嘲笑するとか、罵倒するとか、又は軽く毆打する位で、妄りに苛酷な體罰を加へるやうなことはなかつた。彼等は、體罰を加へると、子どもが弱くなつたり墮落したりするものと信じて居たのである。自然民族は、かくの如く、一面に於て子どもを愛したが、他面に於て残忍なこともした。生活上の苦痛から嬰兒を殺すことなどは、何とも思つて居なかつた。

自然民族の家庭に於て行はれた教育の内容は、専ら實際生活に必要な事柄にのみ限られて居た。兒童は、幼少の頃から、生活上に必要なことを、其の父母や其の他の長者に學ぶのである。生活上に必要なことといふのは、例へば、狩獵の方法や、それに必要な器具の製作法等のことである。未開人の間に於ける知育の大部分は、かくの如き事柄の爲めに費やされて居たことと思ふ。其の父から聽く勇敢な猛獸狩の話などは、大に幼兒の元氣を鼓舞したものであらう。またやゝ長じては、トートムの動物に對する關係や素朴的な宗教上の儀式等も教へられたことと思ふ。

以上述べたやうな自然民族に關する種々の知識は、何れもみな今日の學問を基礎とした類推に過ぎない。文献といふものの存在して居ない有史以前の人類の生活や教育の狀況を確實に知ることは全く不可能の問題である。

## 第二章 希臘の教育

### 第一節 希臘の國情と教育の特質

歐洲の文化は、希臘に於て目覺ましい發達を遂げた。希臘に發祥した古代の文化は、數千年に亘る歐洲文化に多大の影響を及ぼした。希臘の文化は、歐洲文化の源泉である。現代の歐洲文化も、其の源を希臘の古に發して居るものが少なくない。西洋の文化史は、先づ希臘の文化史からはじめなければならない。教育史も亦然り。こゝに希臘の教育を叙述するに當つて、希臘の國情及び希臘人の生活に就いて一言を費やすことの必要を認める。教育は、社會の組織や國民生活の實際と最も密接な關係を有して居るからである。

**希臘の國情** 希臘は、地中海上の小半島である。海岸が屈曲に富み、良好な港灣を多く有して居る。さうして、風光明媚、氣候溫和、土地豊饒、自然の恩恵を蒙ることの多い地上の理想郷であつた。希臘の内地には山が多く、山脈に遮ぎられて、國內が幾つかに區分されて居た。こゝには早くから種々の民族が移住して生活を営んだ。最初に土着したのは、エオリヤ族及びイオニヤ族であつた。これ等の種族によつて數箇の小王國が建てられて居た。然るに、紀元前約一一〇〇年の頃、北方のドリヤ族が南下して、土着の種族を屈服せしめ、其の王國を侵略して政權を奪取した。ドリヤ族によつて支配された小國の中、最も武威を輝やかし、勢力を振つたものは、ペロポネソス半島に據れるスパルタである。アツチカの首府アテネも亦ドリヤ族の侵略を蒙つたが、よくこれに抵抗して國土を保全し、王政を改革して國力の充實をはかつた。古代の希臘は、スパルタとアテネによつて代表せられて居る。就中、アテネに於ては、希臘の文化が其の發展の極に達し、偉大なる哲學者や偉大なる藝術家が相次いで輩出したのである。



**希臘人の性質** 前述の如く、希臘は、幾つかの民族によつて成れる幾つかの小國である。其の國の成立事情や國民生活の状態に、それぞれいづらかの相違があるので、希臘人の性質といふやうなものを一概に斷言することは出来ない。殊に、ドリヤ族を中心とするスパルタと、イオニヤ族を中心とするアテネとは、其の國民性に著るしい相違があつた。併しながら、希臘人は、其の言語や風俗や傳説や宗教を同じくして居たので、自ら共通した性質をも有して居た。希臘人に通じた特質を擧げて見れば、第一には、自主獨立心の強いことである。これは、國情に由來するものかと思はれる。前にも述べたやうに、希臘は幾つかの小國に分れ、互に競争して居たのであるから、自ら自主獨立心が強くなるわけである。第二には、審美的傾向を有することを擧げなければならない。これは、風土の影響によるものであらう。希臘が自然の恩恵厚い國であることは前に述べた。希臘の國土は、氣候が溫和で人間の生活に適して居る。さうして風光が明媚である。山容水態、美的快感を與へざるものはない。かうした土地に生れて、幼少の頃から美しい自然に接觸して居る者には、自ら美を愛する性質が養はれるのである。希臘に文藝や美術が非常に發達したのは、此の審美的民族性によるものと思はれる。

**希臘思想の特色** 希臘人は、氣候の温和な半島に生れ、自然に恵まれた生活をして居た。従つて、希臘人は、現世を楽しみ、自然を愛し、樂天的な生活をして居た。かくの如き生活は、彼等の思想に反映した。蓋し、思想といふものは、生活と極めて密接な關係を有して居て、生活は、常に其の思想の上に反映するものである。希臘思想の特色として、第一に現世主義、第二に自然主義、第三に樂天主義を擧げなければならない。此の三つは互に結合して居る。現世主義は、必ず自然主義であり、樂天主義であるのを常とする。希臘思想は、ヘブライ思想と全く反對して居る。ヘブライ思想は、未來主義・超自然主義・厭世主義である。希臘思想は、我が國固有の國民思想に一致して居る。儒教も佛教も未だ渡來せざる古代の我が國民は、希臘人と同じく、現世を楽しみ、自然を愛し、樂天的な生活をして居たのである。古代に發祥したヘブライ思想と希臘思想とは、古今東西の思想界に對立して流れる思想の二大系統であつて、歴史上に現はれて居る思想の争ひといふものは、殆どみな此の二大思想の葛藤に外ならぬ。希臘思想の特色たる現世主義・自然主義・樂天主義は、あらゆる希臘の文化に影響して居る。希臘の教育の如きも亦此の思想上の特色を理解しなければ解することを得ない。

**希臘教育の特質** 希臘人は、現世に於て最も有爲な人間をつくることを教育の理想とした。こゝに希臘思想の特色たる現世主義がよく反映して居る。現世に於ける最も有爲な人間といふのは、國家社會の一員として十分に活動し得る資格のある者である。換言すれば、完全な公民である。完全なる公民を養成するには如何にすればよいか。希臘人は、各個人の本有する性能を調和的に發達せしめることを以て、其の目的を達し得るものとした。希臘の教育と云つても、スパルタとアテネとは、頗る其の趣を異にして居た。加之、其の年代によつても、教育の理想や方法に若干の相違を生じた。併しながら、大體から云へば、希臘教育の特質は、完全なる公民の養成と個人天賦の性能の調和的發達の二つに約言することが出来る。前者は、其の實質的方面であり、後者は、其の形式的方面である。

ウイルマン (Otto Willmann) は、希臘の教育の特質として、第一 教育的陶冶と職業の準備としての教育とを區別し、後者を以て自由民の受くべき教育と認めなかつたこと、第二 教育を一種の裝飾となし、利益を産出する手段と見なかつたこと、第三 品性の陶冶を以て教育の本義と解したこと、即ち、教育を人格の裝飾と考へたこと、第四



教育上に於ける強制を排し、自由教育を主唱したこと、即ち、教育は、強制的に授けるものでなく、自由に學ばしめなければならぬものとしたこと、第五、人格の調和的發達を以て教育の要旨とし、一方の陶冶に偏しなかつたこと等を擧げた。参考とすべき説である。

## 第二節 スバルタの教育

### スバルタの興起と其の國情

スバルタは、スバルタ市を中心として、ドリヤ種族の建設した一小國である。スバルタには、二人の王があつて、これが表面上國家の主權者になつて居た。併し、實質上に於ては、スバルタの市民權を有する貴族から選任せられた五人の監督が政權を掌握して居た。これを輔佐するものには、元老院及び公民會等の機關があつた。

スバルタの國民は、非常に武勇を尙んだ。彼等は、リコルゴス (Lyongus) の定めた憲法によつて、極端な軍國主義を國是とし、青少年に對しても嚴格な武士的教育を施し、勇猛無比な國民となつて、次第に隣國を征服し、遂にペロポネソス半島の覇權を握るやうになつたのである。

アツチカから起つたアテネがベルシャと戰つて勝利を博してから、急に其の勢威を高めたので、スバルタは、これを嫉視し、植民地コルキラの問題からスバルタと争ひ、二十七年に亘るペロポネソス大戦役を惹起した。此の戦役に捷つてから、スバルタは、希臘全土の覇者となつた。ペロポネソス戦役後の三十年間がスバルタの全盛時代であつた。併しながら、スバルタは、勢に乗じて横暴を極め、列國の内政に干渉したので、列國の憎惡を受け、國力衰亡の端緒

を開くに至つたのである。

### スバルタの教育理想

スバルタでは、其の建國の事情が、軍國主義の國是の上に、極端な軍事的教育を國民の子弟に施さなければならぬやうになつて居た。スバルタの國家は、前にも述べた通り、ドリヤ人が土着の種族を征服して建てたものである。征服者の數よりも被征服者の數の方が非常に多かつた。それがために、スバルタでは、軍隊の力によつて國家を維持する必要があつた。スバルタでは、國家全體が一つの組織立つた兵營であると云はれる程、極端な軍事的訓練が行はれた。スバルタの教育は、全然軍隊式のものであつた。

少數の征服者と多數の被征服者とを以て成れるスバルタの施政方針と教育の目的及び方法を最も明瞭に定めたものは、リコルゴスの憲法である。リコルゴスの憲法によれば、子どもは、男女の別なく、何れもみな國家に屬するものであつた。國家は、これを教育して完全な國民たらしめる責任を有して居る。國家がかくの如く責任をもつて國民の子弟を教育する目的は如何なる點にあるか。それは、國家其のものの自衛にある。個人の幸福や利益のためではない。國家が其の地位を保つて行かうとするには、自由民に完全な教育を施し、これによつて多數の被征服者即ち平民や奴隸を支配せしめなければならない。これがリコルゴスの定めた憲法の教育理想である。リコルゴスの憲法に於ける教育の理想は、國家主義の語を以て蔽ふことが出来る。

### スバルタの教育方法

リコルゴスの憲法によれば、男兒が生れると、國家は、先づ其の健康診斷をする。薄弱な兒童や不具者は、これを平民に編入するか、或は、山中に投棄してしまふ。強壯な者は、七歳に至るまで家庭に於て父母の養育を受けしめる。七歳になると、これを政府の教育所に入れ、多くの兒童と共に、國家が任命した教育監



督者の手で教育せしめる。教育所に收容せられた兒童は、全く父母の手から離れ、一定の寄宿舎に於て共同生活をす。共に起臥し、共に食し、共に獵するのである。其の訓練は、極めて嚴格、専ら質素と克己とを重んじ、粗衣粗食に慣れ、飢渴を忍び、規律を守ることを強要せられる。十二歳からは、特に此の訓練が嚴格になる。教科目は、體操と音楽とであつた。體操は、身體を鍛練し、音楽は、精神を陶冶するために課せられる。其の中でも特に體操が重んぜられた。それは、戰士を養成する必要上に基づくものである。體操の種類には、走術・飛術・投術・相撲術・擊劍・騎馬・水泳・狩獵・舞踏等があつた。體育の過重に反し、知育は、全く輕視せられた。かくして十八歳に至れば、青年組に入りて軍事教育を受け、三十歳に至つて始めて家庭の人となるのであつた。

スバルタの男子は、六十歳まで兵役の義務を有して居た。六十歳に至つて、兵役免除となり、安樂に自由な餘生を送ることが出来たのである。

**スバルタの女子教育** スバルタの女子教育は、男子の教育と其の精神を等しくした。併し、女子には男子の如き特別の教育所といふものを設けず、たゞ家庭に於て嚴格な尙武的の訓練を受けることにしてあつた。スバルタの女子は國家のために健全な小兒を生むことを女子の最大義務とした。家庭の雜事を處理するが如きことは、寧ろ末梢的な仕事とした。女子は、二十歳になると結婚して、良妻賢母となり、よくスバルタの精神を家庭の中に發揮した。スバルタの女子は、其の氣象が頗る勇敢で、愛國の精神の旺盛な點に於て、毫も男子に譲らなかつた。「盾を携へて歸れ。然らざれば盾に乗つて歸れ。」これは、スバルタの婦人が其の子の出陣に際し、士氣を鼓舞した名言として、今日までも知られて居るものである。

**スバルタ教育の批判** スバルタの教育は、如何なる點を以て長所とし、如何なる點を以て短所とするか。これは、教育に對する立脚地の相違により、其の答も亦區々に分れる問題である。併し、今日多くの人々によつて列擧せられて居る長所と短所とを指摘すれば、先づ長所としては、次のやうなものを擧げることが出来る。第一に、國家主義を以て教育の目的を定める根柢としたことである。國家主義を否定する者から見れば、かくの如き教育觀は、全然排斥せられる。併し今日の世の中に於ても、國家は、社會の最高形式をなして居る。國家といふものを除外して教育の目的を考へることは出来ないのである。第二に、教育を以て國家の事業としたことを擧げなければならない。今日の文明諸國は、何れもみな國民の教育を以て國家の事業と考へて居る。希臘の古代に於て、スバルタが教育を以て國家の事業と認め、徹底的に此の主義を實行したのは興味ある問題である。第三に、意志の教育を重んじたことを數へたい。スバルタの教育は、一種の主意主義に屬して居る。教育は、偏知主義に流れ易いものである。然るに、スバルタの教育は、知識といふものから全く離れ、専ら意志の鍛練を重んじた。これは今日の教育上に於ても少なからぬ參考となることである。第四に、體育を重んじたことを長所の一に加へたい。體育が教育上に重要な地位を占めることは、こゝに喋々するまでもない。然るに、古來、やゝもすれば、此の體育が輕視せられる傾向があつた。體育の輕視は、國民體質の低下を來す由々しい結果を招く。スバルタの國家が體育を重んじたのは、甚だよいことである。第五に、スバルタの教育は、何事にも頗る徹底的であつた。これも亦其の長所の一つと認めてよからう。教育は、須らく徹底的に行はなければならない。徹底的に行はれない教育は、眞實味を缺いて居る。眞劍でない。スバルタの教育は、背後に國家の存亡といふ大問題が横はつて居た。従つて、事毎に其の態度が徹底して居た。其の動機の如何は別



問題であるが、態度の徹底といふことは、教育の性質上から考へても非常によいと思ふ。

長所といふものは、多くの場合に、必ず短所を伴つて居る。長所のあるところには、短所のあるのが通常の例である。スパルタの教育にも多くの短所があつた。短所の第一は、軍國主義が教育理想の基礎をなせることである。軍國主義の非は、其の理由を擧げるまでもあるまい。短所の第二は、個人の價値を餘りに輕視し過ぎたことである。人間には國家の公民としての生活の外に、人間としての生活がある。公民生活の尊重はよいが、個人生活を全然無視してはならない。短所の第三は、極端な階級主義の弊害である。スパルタでは、たゞドリヤ種族の自由民のみが教育を受け、其の得、其の他の者は、平民若しくは奴隸として教育の機會を均等に與へられなかつた。かくの如きは、甚だ非人道的な教育方針と云はなければならぬ。短所の第四は、知識の陶冶を全く等閑に附したることである。情意の陶冶を重んずるのはよいが、知識の陶冶を輕んずるのはよくない。知・情・意の三方面を調和的に發達せしめることは、正しい教育の職能である。

### 第三節 アテネの教育

**アテネの興起と其の國情** アテネは、イオニヤ種族がアテネを中心として建設した國である。此の國には、初め専制君主政治が行はれて居たが、後に貴族政治となり、更に民主政治となつた。民主政治となつてからは、國民が一致協力して國家の發展をはかつたので、國運伸長し、遂に中部希臘の覇權を握るやうになつた。希臘列國の盟主となり、前後五十餘年の間、當時の強國と戦ひ、終局の勝利を得てから、アテネの隆盛は、其の頂點に達した。諸般

の制度は大に整ひ、民權は頗る擴張され、文華は燦然として内外に輝やいた。此の時代が希臘の黄金時代であつた。其の後、スパルタと葛藤を生じ、ペロポネソスに戦つて大敗してから、スパルタの干渉を受けるやうになり、アテネの國力は次第に衰弱してしまつた。

希臘の列國が互に其の覇を争つて、衰運の兆を萌して居た時に、北方に興つたマケドニヤ國の侵略を受けて、希臘は漸次其の國土を蠶食せられた。マケドニヤ王フィリップの子、アレキサンダー大王は、父の遺志を繼ぎて希臘の叛亂を平定してから、世界統一の大業を企てた。ペルシャ、フェニキヤ、パレスチナ、エヂプト等を征服し、印度の北方を侵し、一大帝國の建設を試みたが、大王の歿後、間もなく其の帝國は分裂して、マケドニヤ、シリヤ、エヂプトの三大王國となり、互に争つて居る中に、新らしく興れる羅馬の爲めに併吞せられたのである。

**スパルタとアテネ** 同じく希臘の一小國でありながら、スパルタとアテネとは、頗る其の民情を異にして居た。スパルタの市民が常に保守主義に囚はれて居たのに反し、アテネの市民は、大に保守退嬰を排した。スパルタ人は、武力を偏重し、質朴を愛し、粗衣粗食に甘んじた。これに反し、アテネ人は、力めて文化の進歩をはからうとし、文化的に生活を裝飾することを欲した。スパルタ人は、外國人との交際を厭ひ、種々の禁令を設けて、國外との交通を制限した。外國と交際すれば、其の惡風に感染して自國の良風美俗を失ふと考へたのである。またスパルタでは、大に貨殖を賤しんだ。鐵を以て貨幣を鑄造し、其の重たさと不便のために自らこれを使はないやうにさせた。アテネ人は、全くことに反する思想をもつて居た。盛んに海外の諸國と交通して商業を發達せしめ、以て國家の富強をはかり國民の生活を安定せしめることの必要を認めた。アテネ人は、スパルタ人の如く金錢を賤視しなかつた。適當な方法



によつて富を得、國家に税を納めるのは、國民たるものの當然の義務と考へた。スパルタの人々は、辯論を嫌ひ、なるべく簡潔な言葉で思想を發表しようとした。これに反して、アテネの市民は、雄辯を貴んだ。雄辯術を以て最も大切な市民の教養の一つと認めた。

スパルタとアテネとは、其の政體を異にして居た。スパルタの政體は、極端な貴族專制主義であつた。貴族階級以外の者は、全然政權を有して居なかつた。また其の貴族は、すべてみな國家に隸屬する奴隸であつて、毫も個人の自由意志を認められなかつた。嚴密な一種の國家社會主義である。これに反して、アテネは、民主主義の政治を行つた。此の國では、個人の自由が非常に重んぜられた。後には貧民の權利が向上し過ぎて、富豪は、國費の負擔に苦しむやうになり、貧民跋扈のために、著るしく國家の進歩が妨げられるに至つた。

**アテネの教育理想** アテネの教育理想もスパルタと大體に於ては其の精神を等しふしたものであつた。アテネの教育をスパルタと全く異なつたやうに思ふのは間違つてゐる。アテネに於ても、國家のために活動することの出来る有爲な公民を養成するのが教育の理想であつた。併し、アテネに於ては、スパルタの如く、嚴重な國家主義を採らなかつた。スパルタでは、國民を國家に從屬するものとし、毫も個人の自由を認めなかつた。これに反して、**アテネ**では、個人の自由を認め、個人の身體と精神とを調和的に發達せしめる實質的方面的陶冶を重んじた。アテネの教育理想や教育方法を成文によつて示したものは、西曆紀元前第六世紀の初めに制定せられたソロン (Solon, 640—563 B.C.) の憲法である。

**アテネの教育方法**

アテネは、希臘の各小國の中に於ても最も文化の發達した國である。故に、其の教育方法

圖一第



場操體立公

圖二第



場古稽樂音

も、スパルタの如き武斷主義に流れず、文化主義によつて個人の性能を發展せしめようと力めた。スパルタでは、國立の教育所に收容して強制的に教育することを教育の原則とした。これに反して、アテネでは、家庭に於て自由に教育せしめることを教育の原則とした。スパルタでは、教育の責任が徹頭徹尾國家にあるものとした。これに反して、**アテネ**では、子女の教育上に於ける家庭の地位を認め、教育の責任を家庭に負はせたのである。

ソロンの制定せる憲法に依れば兒童が七歳に至るまでは、専ら家庭に於て教育を受け、其の後、私立の學校に通學することになつて

居た。七歳までの家庭教育は、身體の養護といふことを主とした。七歳以後に至つて通學する學校には、體操學校 (Palaestra) と音樂學校 (Didaskaleion) とあつた。體操學校は午前、音樂學校は午後に授業するを例とした。體操學校に於ては、専ら體操遊戲を課し、音樂學校に於ては、音樂の外に讀書・作文・天文・算術等をも併せて課した。



體操と音楽とを非常に重んじた點は、スパルタの教育と其の精神を等しくして居る。併し、スパルタの教育所では、たゞ體操と音楽のみを課したが、アテネの學校では、これに前述の如き種々の教科を加味して居る。こゝにスパルタの教育とアテネの教育の相違が認められる。兒童は、ペタゴグ (Palaogoge) と稱する教僕の監督を受けて、これ等の教育所に入ることになつて居た。此の教僕は、多く家庭に使はれて居た奴隸が其の任に當つた。



圖三第

僕教のネテア

十六歳になると、教僕の手を離れて國立の體操場に入る。アテネには、エフエーベ (Ephēbe) と稱する學校と軍隊とを兼ねた組合が出来て居たが、これは、其のエフエーベの豫科に該當するものであつた。こゝには、國家から任命せられた官吏や體操教師や遊戯の教師が居た。アテネの少年は、これ等の官吏や教師の指導を受けて種々の體操や遊戯を練習し、且つこゝで多くの友人や先輩と交はつて直接に間接に社交的の訓練を受けた。國立體操場で練習した遊戯は、當時、アテネをはじめ、希臘各國の市民が最も興味をもつて居た五種の競技を中心とした。五種の競技とは (一)幅跳及び高跳、(二)競走、(三)相撲、(四)槍投、(五)圓盤投である。希臘の人々は、此の五種の競技を非常に好み、これを國民的遊戯として常に練習した。さうして、オリンピヤの大祭には、各國の參加者が集まつて、盛大な競技會を開催し、其の優勝者に橄欖の冠を與へた。オリンピヤの大祭といふのは、ペロポネソス半島のオリンピヤにあるゼウス神を祀る大殿堂の大祭である。此の大祭は、四年毎に行はれ、各

起居し、時々アテネ市の附近に野營生活などをして、其の間に嚴重な軍隊的訓練を受け、且つ武器を用ふる事や重大事變に遭遇した時の心得等の實地教授を受けた。十九歳から二十歳にかけては、更に遠方の兵營に於て、軍隊生活を學んだ。かくして、こゝにアテネの國民として必要な教育を終ることになる。エフエーベの組合を終つた後にも、ア



圖四第

況狀祭大ヤピンリオ

國の人々が參拜して、あらゆる技藝を演ずることになつて居た。大祭中は、戦時に於ても戦をやめ、參拜の敵人を保護する習慣になつて居た。今日のオリンピク・ゲームは、其の起原をこゝに發するものである。アテネに於ては、特にこれ等の競技を重んじ、ベルシヤ戰役其の他に於ける大捷の原因をも、これ等の競技練習の結果に歸し、少年時代より盛んにこれを練習せしめた。國立體操場に於ては、これ等の競技の外にも體操やまた軍隊教育の初歩たる交戦術・弓術・騎馬等をも課したのである。十八歳になると、はじめて自由民としてエフエーベの組合に入る。此の組合に入る時には、市民の集まれる公開の席上で、國家に忠勤を盡す事、神を尊敬する事、國民の道德的傳説を守る事、神聖なる武器を辱しめざる事、自己の戦列にある隣人を見棄てざる事等に就いて誓ふのであつた。此のエフエーベに於ては、二十歳まで軍隊的教育を受けることになつて居た。最初の年は兵營内に



テネの國民は、終生學校に居るやうな覺悟で修養を續けて行かなければならぬものとして居た。

### アテネの女子教育

アテネに於ても亦女子は専ら家庭の中で教育せられた。女子には男子の如き國立の公共教育施設もなく、特殊の教育所もなかつた。スパルタの女子は、家政上の雜務よりも、將來國家のために活動し得る有爲な嬰兒を生むことを女子の第一義務とした。これに反して、アテネの女子は、家政に關する一般的知能を最も重んじた。十分に家政を整理し得るもの、これ即ち最もよき婦人と認められた。故に、女子として學ばなければならぬこ



第五圖

希臘兒童の服裝

とは、衣服の製作、食物の調理、婢僕の使役、子女の養育等であつた。これ等の家政的知識を有し、一家を圓滿に治めて行く賢母良妻を養ふことを、アテネに於ては、女子教育の理想としたのである。かくの如き賢母良妻となるには、たゞ家庭の内部に在つて、實地にこれを體得すればよい。女子に學問の必要はない。學問は、却つて

女子の淑徳を害するものである。かくの如き考から、アテネの人々は、幼時より女子を専ら家庭に閉ぢ込め、深窓の中に於て養育したので、身體が概して虚弱であつた。體格の優劣といふ點に於ては、到底スパルタの女子に敵し得なかつた。

### アテネ教育の批判

アテネの教育もスパルタの教育と同じ精神の下に行はれた。アテネの教育を一貫せるものは、軍隊的の陶冶である。國民に軍隊的訓練を與へて、國家のために有爲な公民を養ふこと、これ即ちアテネの教育

の理想であつた。アテネの教育がスパルタと異なるところは、文化的の教育を加味したことである。スパルタの如き徹底的の武斷主義を採らず、文學や藝術に關する教養を與へることの必要を認め、體操學校に於ても國立體操場に於ても、體操の外に種々の教科を併せ課した。これ等の點を考へて見れば、アテネの教育の長所と短所とは殊更にこれを列擧するまでもないが、参考のために概括して見れば、先づ其の長所と認むべきものは、第一、兒童の個性を重んじたこと、第二、自由主義を採り、國家が極端な干渉をしなかつたこと、第三、家庭に子女教養の責任を負はしめたこと、第四、心身の調和的發達を教育の理想としたこと、第五、知的陶冶を輕視しなかつたこと等である。また其の短所としては、第一、國家主義と個人主義、干渉主義と自由主義との不調和、第二、教育理想の動搖、即ち初期に於ては、國家主義を其の根本思想として教育の理想を定めて居たが、後期に至り、これに反抗する思想が現はれて教育理想が動搖したこと、第三、女子教育の輕視、殊に女子の知育及び體育の必要を認めなかつたこと等が數へられる。

## 第三章 希臘の教育思想

前章に於て、古代希臘を代表するスパルタ及びアテネの教育事情を概説した。これによつて、古代希臘に於ける各國の教育が、如何なる方針に基づき、如何なる方法によつて行はれたかといふことは、略ぼ明かになつたであらう。併し、こゝにまだ残つて居る問題は、古代希臘に於て、如何なる教育思想が唱へられたかといふことである。換言すれば、如何なる學者が如何なる教育説を述べて居るかといふことである。



## 第一節 希臘の文化と教育思想

### 希臘の文化

希臘人は、歐洲文化の先導者である。學術・文藝・美術等、あらゆる方面に亘り、燦然たる光輝を人類の歴史に添へた。希臘人は、自然の美に恵まれた環境の影響を受けて、著るしく美感が発達して居た。而して、彼等は、奴隸を使役して勞働に従事せしめたので、自ら思索に耽る時間を有して居た。且つまた交通の便利な地位にあつて、近傍諸國の文化を自由自在に吸収することが出来た。希臘に於て、學術や文藝や美術の如き諸般の文化が驚ろく程の進歩發達を遂げたのは、以上のやうな事情によるものである。

希臘に於ては、偉大なる學者や藝術家が雲の如く輩出した。先づ學者の方面に就いて言へば、哲學者にソクラテス、プラトーン、アリストテレス、史學者にヘロドツス、ツキヂデス、科學者にピボクラテス、アルキメデス等の人々が數へられる。藝術家の方面を見れば、詩人にホーマー、ヘーシオドス、喜劇にアリストファネス、悲劇にエスキルス、ソフォクレス、建築家にイクチヌス、彫刻家にフィヂアス、ブラクシテレス等の巨匠があつた。

### 希臘の教育思想

教育の思想といふものは、必ず其の時代の實際教育に影響を及ぼすものと限らない。教育思想が實際教育を動かすこともあるが、また何等の關係もなく、思想は思想のみで發達して行くこともある。

希臘の教育は、國家主義を其の思想上の背景として居た。かくの如き思想に基づく教育の目的や方法を最も具體的に示したのは、リコルゴスの憲法やソロンの憲法である。即ちスパルタに於ては、リコルゴスの憲法により、アテネに於ては、ソロンの憲法により、實際の教育が行はれたのである。

アテネの市府が次第に發展して、海外との交通が頻繁になり、文化が長足の進歩をなすにつれ、民心に種々の動搖を萌して來た。其の結果、從來の思想に反抗する新らしい思想を唱へる者が出た。其の傾向を最もよく代表する者は、ソフィスト即ち詭辯學派である。ソフィストは、「物知り」といふことを意味して居る。アテネの市中や其の附近を遍歴して、種々の知識や技能を教授して歩いた職業的學者の一團である。當時、希臘の思想は、全く行きつまつた形になつて居た。そこで、彼等は、從來の諸説に對して懷疑的態度を取つた。自然現象のみならず、風俗・習慣・道德・宗教等の如き精神的現象及び社會的現象をも疑つた。さうして、遂には詭辯を弄して破壊的の説を唱へる者が多くなつた。詭辯學派といふ名も、さうしたところから出たのである。ソフィストの中で、最も有名な學者は、プロタゴラス (Protagoras) コルギッス (Gorgias) プロデューロス (Prodikos) ヒッピアス (Hippias) 等である。これ等の諸學者は、自然及び人事に對して、懷疑思想を唱へた。吾人の知識といふものは、たゞ對象が感官に觸れて生ずる主觀的作用に止まるから事物の真相などはわかるものでないと云つて、普遍不易の真理を否定した。こゝに於て、主觀主義・個人主義の思想が著るしく高まつた。加ふるに、當時、社會的事情が一變して海外諸國との交通が盛んになつたので、思想上の影響と實社會の状態とは、相互に索引して從來の國家主義を漸次頽廢せしめるやうになつたのである。併しながら、ソフィストの人世觀や世界觀は、長く希臘の思想界を支配することが出来なかつた。ソクラテスは、先づ彼等の思想に反對して、普遍不易の真理の存在を認めた。ソクラテスの思想は、プラトーンに傳はつて、理想主義の大哲學となり、更にアリストテレスによつて、堂々たる組織的の學說となつたのである。ソフィストの懷疑論は、思想界のあらゆる方面に影響を及ぼした。教育思想も亦同じく多大の影響を蒙つた。ソフ



イストは、アテネに於ける従来の教育を一變せしめた。西曆紀元前第四世紀の頃から、從來行はれて居た國家主義・團體主義の教育が廢れて、個人主義・利己主義の教育が盛んになった。また從來は、専ら主意主義に基づいて、實行と習慣を重んじて居たのが、主知主義となつて、講義や演説を重んずるやうになつた。かくの如き教育思想の變化は、希臘の教育思想史上に注目すべき現象であつた。

次に、希臘に於ける代表的な學者や思想家の教育説を略説したいと思ふ。

### 第二節 ピタゴラスの教育説

ピタゴラス (Pythagoras) は、紀元前五七〇年乃至八〇〇年の頃に、アイガイア海のサモス島に生れた大哲學者にして且つ大數學者である。生前より博識を以て世人の尊敬を受けて居たが、死後に於ては、其の學徒から神の如く崇拜せられた。

**ピタゴラスの根本思想** ピタゴラスは、數を以て萬有の本質とした。萬物はみな數より成れるものであると云ふのが、其の哲學上の根本思想であつた。彼は、また輪廻轉生説を唱へた。輪廻轉生説は彼の宗教説である。輪廻轉生説によれば、人間は靈魂と肉體より成り、肉體に在る間、靈魂は、たゞ知覺の具に過ぎない。併しながら、肉體を脱すれば、上界に赴きて幸福な生活を送ることが出来る。されど、現世に於て悪行を爲せば、再び世上の生活に繋がるか、若しくは陰府に墜ちて罰を受けなければならない。かくの如き輪廻轉生説は、古來、希臘に傳へられて居たものである。ピタゴラスの創見ではない。ピタゴラスは、たゞそれを探つて、其の宗教説の根本思想としたのみである。

ある。

**教育説** ピタゴラスの教育説は、其の根本思想たる哲學説及び宗教説と密接な關係を有して居る。彼は、輪廻轉生説を信じた。現世に於て惡事をなせば、人間は、永遠に救はれない。故に、彼は、善良なる人間即ち道德的人物の養成を教育の目的とした。善良なる人間とは、神を信じ、兩親を敬ひ、法律を重んじ、朋友に對して信義を守り、社會の人々に對して正義と溫和とを旨とし、且つ個人としての修養を怠らざる者である。

ピタゴラスは、總べての學科の中で、數學を最も重要な學科と認めた。ピタゴラスの説によれば、數は、萬物の本質であつた。數學を最も重んじた理由は、これを説明するまでもない。ピタゴラスは、クロトンに學校を開いて、子弟を教育した。此の學校には、十二歳から十七歳までの者を入學せしめた。入學者は、最初の三年間、たゞ幕を隔てて教師の講義を聴くのみであつた。質問其他聲を發することは、全然これを許されなかつた。かくして、三年間に克己の力を考查し、はじめて直接ピタゴラスに接することが出来た。學校に於ては、頗る嚴重な規則の下に、實素節制を旨とし、道德的・宗教的の訓練を受けた。學科は、數學の外に、音楽や宗教に關する文章の諧記等であつた。體操は、これを餘り重んじなかつた。これに反して、音楽は、情慾を制し、情操を純潔ならしめ、且つ調和的精神を養ふ學科として重要な地位を與へられて居た。音楽のみを重んじ、體操を輕視した點は、希臘固有の思想と其の趣を異にして居る。併し、彼の思想全體から考へて見れば、明かに彼は希臘民族の傳統的思想を繼げるものである。

### 第三節 ソフィストの教育説



前にも述べた通り、ソフィストといふのは、アテネを中心として、其の附近の人々に對し、月謝を取つて、知識・技能の教授をした職業的教師の總稱である。アテネにかくの如き學徒を生じたのは、時勢の要求に基づくものと云つてよい。アテネは、ベルシヤ戰爭に大捷を得てから、國勢が急に伸張し、諸外國との交通が著るしく盛んになつた。それに伴つて、次第に國民文化が發達して來て、精神的の教養が重んぜられるに至つた。社會に出て活動するにも、種々の知識技能を必要とするやうになつた。精神的の教養に乏しい者は、多くの人々から尊敬せられない。社會に出て活動することも出来ない。こゝに於て、アテネの市民は、知識・技能の修得の必要を感じた。適宜な人に就いて、これを修得しなければならぬことになつた。知識の卓越した者を要求するに至つた。此の要求に應じて現はれたのがソフィストである。

**ソフィストの根本思想** ソフィストの根本思想は、認識論上の懷疑説である。吾人の認識は一種の主觀作用に過ぎない。吾人の主觀は、時々刻々に變はつて行く。永却に流轉して止まざるもの、それが人間の實相である。故に、世の中に普遍不易の眞理といふやうなものはない。知識は、主觀的に成立して居るものであるから、主觀の變化によつて、知識も亦自ら變化する。標準となるものは、人間の主觀である。ソフィストの代表的學者プロタゴラスの名言に「有る事にせよ、無き事にせよ、人こそ萬事の尺度なれ。」といふのがある。ソフィストの主觀主義・懷疑説を最も簡明に言ひ盡して居る。プロタゴラスは、認識上の懷疑説を唱へたのであるが、後のソフィストに至つては、其の懷疑説が道德の方面にも擴大された。知識と同じやうに道德にも普遍妥當性といふものはない。換言すれば、道德は、人間が勝手に都合よく作つたものであるといふことになつた。かくして、道德の權威は、著るしく失墜してしまつたのである。

である。

**教育説** ソフィストの教育思想が如何なるものであつたかを詳細に知ることは出来ない。併しながら、彼等が從來の國家主義・團體主義の根據とする干渉主義の教育を排斥して、個人主義に基づく自由教育を主張したことは明かである。彼等の根本思想たる主觀主義や懷疑説は、當然、教育上の個人主義・自由主義に結びつくものであつた。希臘の教育思想が次第に個人主義・自由主義に傾いて來たことは、社會的の事情にもよるものであるが、彼等の思想の影響も認めざるを得ない。アテネの市民が悉くソフィストの思想に同意したとは云はれないが、其の感化の及ぶ所、蓋し少なからぬものであつたかと思ふ。

ソフィストは、月謝によつて人に教へた職業的の教師である。故に、彼等は、一面に於て學者であり、一面に於て實際教育者であつた。彼等がアテネの市民に教へた學科は、廣い範圍に亘つて居たものと考へられる。實社會の變動により、大に新知識を要求するアテネの市民に對して、其の要求を満足せしめる爲めに現はれた學徒であるから、其の中には、種々の方面に卓越した學者が含まれて居た。哲學者もあつた。物理學や天文學に精通した者もあつた。雄辯術に長じた者もあつた。アテネの市民は、それ等の碩學から、それぞれ必要な知識や技能の教授を受けたのである。學科が多方面に亘つて居たことは、容易に想像される。從來の如く、たゞ體操や音樂のみに重きを置くといふやうな教育方針は、こゝに一變してしまつたのである。

ソフィストが其の新知識や新思想を世人に傳へた方法即ちソフィストの教授方法は、専ら問答的對話法や講話の方法によつたものであつた。彼等は、教育を受ける青年子弟と問答を試み、其の知的開發に力めたのである。



**ソフィストの功罪** 尙ほ茲にソフィストの功績に就いて一言を附することにしたい。ソフィストは、希臘の思想を新らしき方面に發展せしめて、文化史上に不朽の功績を遺したものである。ソフィスト以前の希臘思想界は、自然哲學に獨占せられて居た。自然哲學とは、自然現象の形而上學的考察である。例へば、宇宙の本體は、火であるか水であるかといふやうなことが、其の中心問題となつて居た。然るに、ソフィストが現はれて、アテネの市民に必要な實際生活に關する知識を教授するやうになつてから、自然哲學の研究を離れて、人事現象の考覈に志す者が多くなつた。ソフィストは、學問の研究に新しい領域を示したのである。又これを教育上から觀ると、極端な國家主義・干渉主義の非を教へて、自由教育の必要を世人に自覺せしめたことなどは、慥かにソフィストの功績と云はなければならぬ。併しながら、ソフィストは、希臘の思想界に種々の害毒を流した。其の最も顯著なるものは、主觀主義を唱へて、認識及び道德の普遍妥當性を否定したことである。それが爲めに、知識や道德は、全く權威を失ひ、人間は、自分の都合さへよければ何をしてよいと云ふやうなことになつてしまつたのである。さうした思想が世の中に瀰蔓して行けば、人間の徳義心などは、必ず頽廢して行つて、社會の墮落は、遂に救ふべき道がないやうになる。これは、學問の上から考へても、道德上から考へても、教育上から考へても、非難排斥しなければならぬことである。ソフィストの中でも、プロタゴラスやゴルギアスの如き代表的な學者は、其の人物にも優れた點があり、其の學說にも根據があつた。これ等の學者は、たゞ理論的に眞理の普遍妥當性を否定したのみであつた。然るに、末派のソフィストに至つては、淺薄な知識を以て、主觀主義の思想を惡用し、徒らに、文物制度の破壊を試みて、これを喜ぶといふ傾向を生じた。其の素行の放縱無頼な者も尠なくなつた。故に、當時の市民からもこれを嫌忌せられた。今日でもソフィ

ストと云へば、直に詭辯學派の文字を聯想し、其の學說の缺點や、思想界に及ぼした害毒のみを思ひ起す者が多い。ソフィストは、月謝を取つて、自由自在に必要な新知識を教授した。彼等是一種の公民教育者であり、社會教育者である。彼等がアテネの市民や、其の殖民地の人々に知識を普及せしめた功績は、これを認めなければならない。併しながら、月謝を取つて知識の切賣りをなし、教育者の品位を墮したとしても輕視し難いものである。

#### 第四節 ソクラテスの教育說

ソクラテス(Socrates, 469—399 B. C.)は希臘の大哲學者である。アテネに生れた。父は彫刻師、母は産婆であつた。はじめは父の業に従事したが、長じてソフィストに接し、其の教授を受けた。然るに、彼は、ソフィストが徒らに詭辯を弄して、破壊のみを事とするに慊らず、新らしき道德説を唱へ、アテネの青年を教導した。彼は、十年一日の如く、アテネの市中を徘徊して、何人を問はず、己れの說に耳を傾ける者と問答し、得意の辯舌によつてこれを説破した。彼は、頭腦極めて明晰、論法頗る犀利奇警、如何なる者も、彼の議論に敵することが出来なかつた。彼は、これが爲めに、多くの反對者を作つた。其の反對者の嫉妬と誤解との爲めに讒訴せられて、刑場に非業の最後を遂げた。

**根本思想** ソクラテスには、著書といふものが遺つて居ない。彼の人物及び思想は、プラトーンやクセノフオン等の如き、弟子の著書を通じて知り得るのみである。

ソクラテスは、専ら倫理道德問題を論じた。此の點に於て、彼は、慥かにソフィストの傳統を受けて居る。ソフィストによつて開始せられた人事現象の研究は、ソクラテスに至つて更に一段の進歩を遂げたのである。彼は、希臘古



代に於ける道德哲學の開祖と稱せられて居る。

ソクラテスは、ソフィストの主觀主義を極力排斥して、知識及び道德の不遍不易性を認めた。彼は、ソフィストから出て、ソフィストの思想を斥けたのである。ソクラテスの説によれば、認識とは、事物の本質を看取することをいふ。事物の本質は、個々の物に通じ、其の物をして其の物たらしめるものである。此の本質は、不遍不易の性質を有して居る。さうして、それは、概念によつて言ひ表はされるものである。故に、眞の知識は、概念の確定に外ならぬ。



第六圖

ソクラテス

事物の本質が不變不易性を有するものとすれば、此の事物の本質を看取する眞の知識が普遍妥當性を有することは自ら明かである。然らば、かくの如き眞の知識に達する方法は如何。ソクラテスは、次のやうに考へたのである。眞の知識に達するには、先づ偽の知識を棄てなければならぬ。偽の知識即ち偽知を棄てるには、先づ我が無知を承認することを必要とする。知らざるを知らずとする。これ即ち知ることである。眞に

知るの始めは、先づ自らを知るにある。「汝自らを知れ。」の一語は、千古の金言である。自己の無知を悟つたならば、多くの人々は協力して眞知を探索しなければならない。多くの人々が協力して探索すれば、必ず同一の結果に達する。其の結果こそ一切に通ずる眞理である。

ソクラテスは、知識も道德も不變不易の性質を有するものと認めた。さうして、ソフィストの主觀主義を排斥した。而して、彼は、また知識と道德との間に、密接な關係のあることを認めた。彼の説によれば、徳は、アレテー(技能)である、徳を修めようとするには、先づ徳が何であるかといふことをよく知らなければならぬ。徳が何であるかを知れば、人間は必ず徳を行ふ。不徳は、徳が何であるかを知らないところに生ずる。徳と知とは一致するものである。此の説をソクラテスの知徳合一説と稱して居る。

### 教育説

ソクラテスは、偉大なる哲學者であり、さうして、また偉大なる教育者である。彼の教育思想といふものは明かでない。併し、彼の根本思想から推及すれば、彼の教育思想は、ソフィストの個人主義・主觀主義に反するものであつたことと思ふ。ソフィストは、個人を以て萬物の標準とし、個人の主觀の外に、客觀的の眞理の存在を認めなかつた。然るに、ソクラテスは、此の個人の主觀の中に、客觀性を有する不變不易の眞理の存在を信じ、此の客觀的眞理の探求を眞の學問とした。ソクラテスが人間に共通の理性の存在することを認め、此の理性の中に絶対的の眞理の根據を置かうとしたのは、ソフィスト以前の希臘の思想に接近せるものである。ソクラテスの思想が客觀主義・團體主義の上に立つて居ることは、これによつて推測される。

ソクラテスは、其の生涯を擧げて實際教育に従事した。實際教育の方法に就いては、自ら其の範を示して居る。彼には學校といふものがなかつた。彼は、極めて粗末な服装をして、浮浪人の如くアテネの町をさまよひ歩き、青年を見れば、先づこれに問答を試みた。街頭と云はず、路傍と云はず、これみな彼が青年に教を説く教室であつた。知識を愛する青年は、彼の許に蟻集し、因襲的な舊思想に囚はれた學者たちは、彼を憎み且つ忌避した。

ソクラテスの知徳合一説によれば、道德的生活を實現するには、先づ第一に知見を開発しなければならなかつた。そこで、彼は、青年の知見を開発することに力めた。其の方法として、彼の採つたのは、問答法であつた。問答によ



つて知見の開發を期したので、彼は、今日でも開發教授の鼻祖と稱せられて居る。開發教授を試みた者は、ソクラテスを以て嚆矢としない。ソフィストの如きは、何れもみな此の方法によつた。併しながら、ソクラテス程問答を巧妙に利用した者はなかつた。ソクラテスの問答は、後世に於ても推獎せられて居る。

ソクラテスの問答法は、二種に分れて居た。其の第一は反語法、其の第二は産婆法である。反語法といふのは、反語的な發問によつて、相手の者を自家撞着に陥らしめ、其の無知を自覺させる方法である。これは、眞知に到達せしめる消極的方法に屬して居る。産婆法と云ふのは、相手の者が自己の無知を悟つた時、これに積極的の發問を試み、或は演繹的に、或は歸納的に誘導して、眞の知識を發見せしむる方法である。即ちこれは眞知探求の積極的方法と云つてよい。産婆法の名稱は、妊婦の出産を扱ふ産婆から考へつゝものである。

**ソクラテスの功績** ソクラテスは、たゞ希臘の思想界の功勞者であるのみならず、全世界に於ける文化の恩人である。ソフィストの爲めに攪亂せられて、墮落の淵に沈みかゝつた希臘の思想界は、ソクラテスの出現によつて救はれた。個人が萬物の尺度であるといふソフィストの主觀主義は、其の末派の者によつて誇張され、反道德的な惡思想を社會に傳播するに至つた。個人が萬物の尺度であれば、個人の欲するところは、何事によらずこれを遂行してもよいと考へるやうになつた。其の結果は、感覺的の快樂を人生の目的と思ふやうな者が多くなり、道德の權威は、全く地に墮ちてしまふのである。此の時に、ソクラテスは、ソフィストの説を排斥し、不變不易の道德の存在を唱へて、眞理のために其の身を棄てたのであつた。ソフィストによつて、其の價值を失つた道德は、ソクラテスによつて、再び其の權威を高めたのである。かくして、ソクラテスの思想は、頹廢しかゝつた當時の思想界に、清新の氣を注いで、

希臘哲學の全盛期を出現せしめた。ソクラテスの認識論や道德論は、後に出了た多くの學者によつて發展し、歐洲哲學史上を流れる理想主義の一大系統となつた。思想史上に於けるソクラテスの功績は、永遠に没することが出来ないものである。これを教育の上より眺めても、彼が唯一の教授方法とした問答法の如き、ながく教育社會に推獎され、今日でも尙ほそれが研究の必要を認められて居る。教育上に於ける功績も亦決して輕視することが出来ないのである。

### 第五節 プラトーンの教育説

ソクラテスの門人からは、多くの學者が出た。ソクラテスは、哲學を組織的に述べなかつた。故に、彼の學説は、甚だ粗笨なものである。ソクラテスの門人は、師説を繼承して、これを發展せしめた。多くの門人の中で、ソクラテスの學説を最も正しく解し、理想主義の大哲學を建設した者は、こゝに述べようとするプラトーンであつた。

プラトーン (Platon, 427-347, B. C.) は、アテネの人、貴族の子である。幼少の頃から、アテネの市民として完全な教育を受けた。二十歳の時、ソクラテスの門に入り、師の死に至るまで八年間、傍を去らずに師事した。師の歿後、諸國を廻つて、學問の研究や辯論の練習をなし、歸つてアテネに私塾を開いた。其の私塾は、アテネの英雄アカデミーを記念する運動場の中にあつた。其處をアカデミーと云つて居た。プラトーンの學派をアカデミー學派と云ふのは、これから出た名である。其の後、プラトーンは、政治上の理想を實現するために、二度までシシリヤに赴いたが、何れもみな失敗に歸したので、アテネに歸つて著述と教育に日を送り、八十歳の高齡を以て歿した。

**根本思想** プラトーンは、ソクラテスと異なり、浩瀚な著書を遺した。プラトーンの著書は、多く對話體になつ



て居る。其の學說を組織的に述べず、知識論も實在論も倫理説も一しよに説いた。プラトンの學説は、師説を繼承し、これに希臘在來の諸思想を加味し、これを獨創的な頭腦で統一した大規模の哲學である。プラトンの哲學は、本體論を其の根本思想とした。プラトンは、總べての事物に本體の存在することを認め、これをイデアと名づけた。イデアは、事物の常住不變な性質である。非物質的の性質を有する見えぬ姿であつた。眞の知識即ち概念的知識であつた。看取することである。而して、イデアは、概念の内容をなせるものであつたから、眞の知識即ち概念的知識であつた。

第七圖



プラトンの像

プラトンは、世界の事物に、常住不變の本體イデアの存在を認め、故に、彼の説によれば、世界は、イデアの世界と現象の世界との二種に分れる。イデアの世界は、常住不變の世界、理性の世界、實有の世界であり、現象の世界は、變化流轉の世界、感覺の世界、生滅の世界であつた。プラトンは、イデアと個々の事物との關係を次の如く解釋した。現象界の事物は、イデアの模倣に過ぎない。個物其のものにイデアが含まれて居るのではない。イデアは原型、個物は影像である。個物は、イデアを分有する時だけ事物の眞相を現はす。個物は永久にイデアを宿して居ないから、常に生滅流轉して止まない。イデアは、個物の目的である。現象界の原因である。プラトンは、最高イデアとして善のイデアを挙げた。世界は、イデアによつて支配されて居る。イデアの世界は、最高のイデアたる善のイデアによつて支配されて居る。イデアの認識に就いて、プラトンは、次の如く論じた。イデアを認識するものは理性である。感覺は、イデアを認識する力をもたない。吾人の靈魂は、イデアを分有して居る。これ即ち理性がイ

デアを認識し得る所以である。吾人の靈魂は、もとイデアの世界に棲息して居るものであるが、墮落して現世に來り、過去のことを忘れてしまつた。併し、靈魂は、イデアを分有して居るから、これを想起することが出来る。理性によつてイデアを認識するとは、靈魂が本有のイデアを想起することに外ならぬ。靈魂が一時忘れて居たイデアの世界を想起する時には、現在の身の果敢さを悟り、イデアの故郷を戀ひ慕ふ切なる情が起る。これをプラトンのエロース説（思慕説）と云ふのである。

**教育説** プラトンの教育説は、國家主義・團體主義に立脚して居る。ソフィストの個人主義に全然相反するものである。プラトンの本體論即ちイデア論は、國家主義を是認する結論となつた。プラトンのイデア論によれば、人間の靈魂は、イデアの世界から分れて現世に來たものである。故に、靈魂は、イデアに屬する方面と現象に屬する方面とを有して居る。イデアに屬する方面は理性、現象に屬する方面は激性及び欲性である。かくの如き心理説は、彼の倫理説や教育説の基礎となつて居る。プラトンの説によれば、國家も亦個人と同じく靈魂を有するものである。個人の靈魂が理性・激性・欲性の三部に分れるが如く、國家にもそれに相當する三個の階級がある。理性に相當する最上階級は治者、激性に相當する第二階級は文武の官吏、欲性に相當する第三階級は人民である。治者は、立法權を握り、國家を統治するもの、知慧の徳を最も必要とし、文武官吏は、法律の實行を掌り、國家の安寧を保護するもの、勇氣の徳を最も必要とし、人民は、生産に従事し、社會の要求する物資の供給に任ずるもの、節制の徳を最も必要とする。知慧・勇氣・節制を、特殊の徳とし、國民全體の徳として別に正義を挙げた。國家の目的は、個人をして有徳な生活をなさしめるにある。個人をして有徳な生活をなさしめるには、國家其のものが有徳でなければならぬ



い。以上の如き理由によつて、プラトンは、大に理想的國家論を高唱した。當時希臘に於ては、國家の綱紀が弛み、國民生活が著るしく頹廢して居たので、プラトンは、時弊を救済する爲めに、滿腔の誠意を披瀝して、熱烈に國家主義を唱へたのであつた。プラトンの國家論によれば、個人は、たゞ國家の分子としてのみ價值あるものに過ぎなかつた。個人それ自身は、何等の價值もないものであつた。故に、プラトンの唱へた理想的國家は、極端な共產主義的國家であつた。そこには個人の價值が全然認められなかつた。従つて、財産は勿論、妻子の私有も許されないであつた。併し、此の國家では、最も教育を重んじた。生れた子どもは、夙くから父母の家を去らしめ、國家の學校に入れて教育しなければならなかつた。また有爲な國民を得る爲めに、婦女子の教育も大に尊重せられた。プラトンの著書「國家論」及び「法律論」に現はれた教育思想を尙ほ少し詳しく次に述べて見よう。

プラトンの説によれば、教育の究竟目的は、イデアの實現にあつた。イデアの實現は、人間を道徳的に導くことであつた。人間を導いて道徳的生活に到達せしめるには、國家の一員として有能な人間としなければならなかつた。個人は國家によつてのみ、有徳生活をすることが出来たからである。即ちプラトンの教育説は、國家主義であり、道徳主義であつた。國家の爲めに有能な人物を養成すること、これプラトンの認めた教育の直接目的であつた。故に、國家は、國民の教育を經營しなければならぬ。國民教育の責任は、國家其のものにあつた。國家は、適當な教育機關を特設し、教育に關する制度を定めて、國家の目的に適合した教育を國民に與へなければならぬのであつた。

プラトンは、子どもの出生以前の事情に注意した。健全なる兒童は、健全なる両親から生れる。健全なる兒童を得やうとするには、先づ結婚者の資格を定めることが必要である。國家は、法律によつて結婚者の資格を定めなければならぬ。次には胎教に注意して、嬰兒に悪影響を與へないやうにすることを必要とした。生れた子どもは、母の手によつて養はれるのであるが、最初の間に於て、特に注意を要するは、身體の保健である。姑息の愛に流れてはならない。嚴格に過ぎて餘りに拘束し過ぎてはいけない。其の間を辿つて、快活・温和な性質を養ふことが大切である。

三歳から五歳までの間に於ては、専ら遊戯と童話によつて、兒童の心情を陶冶しなければならぬ。此の間の教育は、勿論、未だ家庭に於て行はれるものである。遊戯は、兒童の生活に適したものを選擇し、彼等が自然に喜んでこれを行ふやうにし、これによつて、兒童の品性を陶冶すると共に、將來の課業に向ふ準備をなさしめなければならぬ。六歳から十六歳若しくは十七歳までは、學校教育の初期である。六歳になれば、兒童は、學校へ入學しなければならぬ。これから男兒と女兒とは、別々の教育を受ける。男兒に必要な學科は、體操・音樂及び其の他の文藝的教科並に諸種の科學であつた。體操は、身體の鍛練を其の目的とし、これを相撲と舞踊の二大部門に分けた。音樂及び其の他の文藝的教科は、精神の調和的發達を期することが其の目的であつた。音樂は、十歳頃から初めることを適當と認めて居た。文藝的教材としては、ホーマーの詩等を誦讀せしめた。道徳を最も尊重し、不道徳な文學や音樂は、絶対にこれを禁じた。また常に善良な模範を示して、兒童の徳性を涵養することを力めた。十四歳頃になると、特に音樂的陶冶を重んじた。善美の正しく表現された音樂を課して、嚴肅・勇敢にして、且つ靜平・温和な心情の陶冶に力を注いだ。而して、音樂は、舞踏と結合して、最もよく其の職能を全うし得るものとした。音樂のみに偏すれば、兒童の氣質を柔和脆弱ならしめ、體操のみに偏すれば、精神の粗野な人間たらしめる。兩者は、相俟つて其の短所を



補充しなければならぬ。兩者の結合によつて、はじめて教育の目的を達することが出来る。此の時期に於ては、體育的・藝術的教科の外に、算術・幾何學・天文學其の他諸科學の概要を會得せしめなければならぬ。これは、たゞ國民としての實生活上に必要であるのみならず、哲學的陶冶の最良準備となるからである。十八歳から二十歳まではアテネ市に行はれたエフェーベの時代に該當して居る。即ち此の期間は、軍隊的教育の時代である。音樂的陶冶に費やす時間は大に減じて、戰鬥術や軍隊的の鍛練が主要な課業となる。勿論、讀書・習字・算術・幾何等の學科も併せて課せられるのであるが、國家は、これ等の學科を強制的に授けない。此の時期の終りには、成績考査をして、學科の成績が悪くて勇氣に富める者は、國防とか警察とか云ふやうな方面の任務に當らしめる。學才の優れた者だけは、尙ほ引き續いて學ばせるのである。二十歳から三十歳までの間は、高等教育の時代とも見られる。此の時代には、學才の優れた者のみを殘して教育するので、體育よりも學術の研究に重きを置く。學科は、算術・幾何・天文學等である。音樂も亦前期と同じやうに重要な地位を占めて居る。精神の調和的發達といふことが、此の時期に於ては、最も注意せられるのである。三十歳になると、再び成績の考査が行はれる。さうして、最も優秀な者のみが殘され、其の他の者は、下級の官吏として社會に送られた。三十歳から三十五歳までは、最も優秀な者に最高の教育を與へた。學科は、哲學を主とした。哲學の研究によつて、事物の本體を認識し、徳性を涵養した者は、こゝにはじめて支配者の地位に立つ資格を生ずる。かくして、此の修養を終つた者は、國家の最高官吏として、十五年間、公職に就かなければならない。五十歳になると、退官して自由に學術の研究に身を委ねることを許される。

プラトンは、女子の教育も亦男子と同じやうに必要であることを認めた。女子の教育を度外視して置いては、到底、家庭に於ける兒童の教育を彼等に託することが出来ない。これ女子教育の必要な理由である。プラトンは、女子の教育も、大體に於て男子のそれと同じものとし、たゞ戰鬥術等を省略するのを適當と考へたのである。

#### プラトンの教育説に對する批判

プラトンの教育説は、ソフィストの主觀主義・個人主義と異なり、國家主義を以て其の根柢とした。此の點に於て、彼は希臘に於ける従前の教育を是認したものである。彼の教育説は、アテネの教育に一致せるところもあり、スパルタの教育を肯定した點もある。殊に、プラトロンが國家主義を極端に主張し、個人を以て全然國家に隷屬するものとし、國民教育の全責任を國家に負はしめたことなどは、スパルタの教育と全く其の精神を等しふして居る。プラトンの教育説の長所及び短所等は、既にスパルタ及びアテネの教育の批判によつて明かに知られるものが多い。左にこれを簡単に概括約説して置かう。

プラトンの教育説の長所は、第一に、其の學説が獨得の哲學體系を基礎として其の上に成り立つて居ることである。ソフィスト以前の希臘の教育にも、プラトンの教育説に等しいものがあつた。併し、プラトンの如き哲學を根柢として、其の上に組織せられたものではなかつた。第二には、國家主義が教育の目的を構成して居ることである。此の點は、既にスパルタの教育中に論じたから反覆しない。第三は、理想主義・道徳主義の色彩が其の説の全體を一貫して居ることである。プラトンは、善のイデアを以て世界の最高統一原理とし、道徳的生活の完成を人生の目的と認め、教育によりて此の目的に達せしめようとした。教育其のものの本質上から考へて見て、甚だ當を得たものと思はれる。第四は、其の教育の意見が非常に精密であつて、其の中にあらゆる教育問題を暗示して居ることである。古代に於て、プラトンの如く、教育の實際に亘り、詳しい意見を述べた者はない。プラトンは、教育を論ずるに、



先づこれを結婚のはじめに溯り、老後にまで及ぼして居る。其の中には、家庭の教育も、幼稚園の教育も、學校教育も、成人教育も含まれて居る。一般的陶冶を主とする普通教育も、特殊の知能を授ける専門教育も含まれてゐる。かくの如く教育全體に亘る廣汎な意見を組織的に述べた點は、今日から考へても大にこれを推賞せざるを得ない。

プラトーンの教育説の短所は、其の教育説の基礎たる理想的國家の中に含まれた缺陷から生ずるものである。第一に、プラトーンの理想的國家は、餘りに空想的部分が多く、且つ矛盾も少なくない。従つて、其の教育説も亦同じやうな缺點に陥つて居る。第二に、プラトーンの理想的國家に於ては、個人を輕視し過ぎる。個人は、國家の一員としてのみ價值を有するものになつて居る。個人それ自らは、何等の價值もないのである。其の極端な國家主義は、教育思想の上にも及んで居る。プラトーンの教育説に於ては、個人の教育に對する國權の發動が餘りに度を過ぎ、自由教育の精神が全く没却されて居る。第三に、プラトーンの理想的國家は、階級主義が最も明白に認められて居る。治者と文武官吏と人民との區別により、教育も異なり、道徳も異なつて居た。教育上に於て、かくの如き階級主義を是認することは出来なからう。加之、彼の教育説は、たゞ自由民の教育のみに限定せられた。奴隸の教育の如きは、全く念頭に置かなかつた。平民や奴隸を教育して、其の知徳を高めなければ、到底、彼の理想的國家を實現することは出来ない。こゝにも亦彼の教育説上に於ける一つの矛盾がある。

### 第六節 アリストテレスの教育説

プラトーンの哲學を繼いで、更に一層其の學説を發展せしめ、希臘の思想を最高潮に導いた者は、アリストテレス

(Aristoteles, 384—322, B. C.) である。アリストテレスは、希臘の植民地たるトラキヤの一市府スタギーラに生れた。彼の父は、マケドニヤ王の侍醫であつた。十七歳の時、アテネに来て、プラトーンの門に入り、プラトーンの死に至るまで、二十年の間、こゝに止まつて學んだ。プラトーンの高弟中の第一人者として、其の學識は、嶄然として儕輩を抜いた。プラトーンの歿後、他の門人の嫉妬を受けて、アテネを去り、しばらく小亞細亞に止まつて居たが、マケドニヤ王フィリップに召され、當時十三歳であつた太子アレキサンダーの教育を托された。アレキサンダーが王位に就くに及び、再びアテネに赴き、リュカイオンのキムナジオンに學校を開き、講義と著述に没頭したが、アレキサンダーの歿後、反マケドニヤ黨の爲めに訴へられ、將に罪科に處せられやうとした時、アテネを逃れて、難をエウボエヤ島のカルキスに避け、翌年の夏、其の地に於て歿した。

#### 根本思想

アリストテレスは、プラトーンに師事して、プラトーンの學説を繼承した。併し、其の學風は、プラトーンと稍々其の趣を異にして居た。プラトーンの學風が詩人的なるに反し、アリストテレスの學風は、學術的であつた。アリストテレスの著書も亦頗る浩翰である。さうして、學問の範圍が非常に廣い。殆ど古代に於ける總べての學問を網羅して居る。プラトーンの著書が問答體に書かれ、種々雑多の問題を隨想的に論じたものであるに反し、アリストテレスの著書は、其の秩序が整然として居る。頗る組織的に記述してある。學風の相違が茲によく反映して居る。プラトーンは、個々の事物の外に、事物の本體の存在を認めて、これをイデアと名づけた。プラトーンの説によれば、事物の本體と個々の事物とは、全く離れたものであつた。換言すれば、イデアの世界は、現象の世界を全然離れた別の世界であつた。プラトーンを繼いだアリストテレスは、此の點に於て、プラトーンの説に修正を加へた。



アリストテレスは、事物の本質と個々の事物とを結合せしめた。彼は、プラトーンに當るものをウジア（實體）と名づけた。此の實體は、プラトーンのイデアの如く個物を離れて存在せず、個物の中に内在するものとした。併しながら、中世期の唯名論者の説の如く、個物其のものを實體と認めただけではなかつた。實體は、感覺に現はれた儘の個物にあらず、さりとして、個物を全然離れた抽象的の普遍にあらず、概念的普遍を蔵する個物、換言すれば、概念的普遍性の發展としての個物、これ即ち實體である。個物は、何れもみな形相と質料から成り立つて居る。此の形相は、現實の状態に在る實體、質料は、未開の状態に在る實體である。



スレテスリア

形相と質料とは、畢竟、同一物を両面から観察したるに過ぎない。別々に存在して居るものの結合ではないのである。未開の状態にある實體即ち質料は、現實の状態にある實體即ち形相に進み行かうとする傾向を有して居る。質料が形相に進み行くところに個物の生成變化が行はれる。アリストテレスは、これを運動と名づけた。アリストテレス

の説によれば、世界の事物は、盡く形相と質料から成り立ち、其の關係の相違によつて、事物の差別が生じて居るのであつた。或るものは、形相を多く、或るものは、質料を多く具有して居る。個々の事物の差別は、こゝに存在して居た。アリストテレスは、また個物と個物との間にも、形相と質料の關係あるものと認めた。甲の物は乙に對して形相であり、丙の物は、乙に對して質料であるに云ふやうに、萬物は、悉く形相と質料の關係の序列であると考へたのである。さうして、最上級の形相は、何ものに對しても質料たることなく、最下級の質料は、何ものに對しても形相

たることが出来なかつた。かくの如き最上形相を純粹形相又は第一形相とも云ひ、かくの如き最下質料を純粹質料又は第一質料と云つた。純粹形相は、毫も質料を含まざる形相である。アリストテレスは、これを神と名づけた。アリストテレスの根本思想は、以上の如き實體論にあつた。彼の學説は、すべてみな此の實體論から出發して居た。

**教育説**

アリストテレスは、其の著「政治學」の中に於て教育意見を述べて居る。アリストテレスの説によれば、教育の目的は、理想的國民の養成にあつた。アリストテレスの哲學も亦國家主義の政治説に歸着した。其の思想上の開展は、これを他の書に譲ることにしたと思ふが、彼は、國家を以て最も完全な社會の形式と考へた。國家は、それ自身が最高善の實現である。故に、國家を離れて道徳は存在しない。彼は、以上のやうに明言して居る。個人を道徳的に訓練して、理想的國民たらしめることは、人間の生存上最も重大な問題であつた。従つて、こゝに理想的國民の養成と云ふ教育の目的が生じて來るのである。アリストテレスの教育目的論は、國家主義を背景とする點に於て、プラトーンのそれと同じである。

アリストテレスも亦國民教育の責任を國家に負はしめた。國家は、適當なる學校を公立して、其の國民を教育しなければならぬ。此の主張は、プラトーンの教育説を想起せしめる。國家主義の教育説に於ては、蓋し當然の歸結であらう。併し、アリストテレスは、君主政體・貴族政體・民主政體の得失を論じて、民主政體を以て比較的弊害の少ないものとした。故に、アリストテレスの國家主義は、プラトーンのそれの如く極端に個人の價值を否定するものではなかつた。アリストテレスは、國家の施設する劃一的教育の必要を認めたが、また一面に於て、自由教育の精神を加味した説を唱へて居る。



教育の方法に關しても、アリストテレスは、かなり具體的な意見を發表して居る。アリストテレスの説によれば、教育の方法は、自然の示すところに従はなければならぬと云ふのであつた。教育の順序としては、最初、先づ身體の發育に注意し、次に習慣の養成に入り、最後に理性の陶冶に進むべきものとした。アリストテレスは、其の根本思想たる實體論に基づいて、精神と身體を形相と質料の關係上から考察したのである。精神は身體に對して形相であり、身體は精神に對して質料である。身體の陶冶を先にしたのは、質料を形相に進めようとする彼の一般的思想と一致して居る。彼の説によれば、精神其のものも亦形相と質料との關係によつて成れるものであつた。精神の中にも種々の要素があつて、それが形相・質料の序列をなして居る。さうして、一のものとは他のものに對して形相であり、又は質料である。其の精神の最高形相をなせるものが理性であつた。習慣の養成から、はじめて、最後に理性の陶冶に進まうとした理由も、これによつて察することが出来るのである。

以上の如き教育思想に基づいて、アリストテレスは、教育の方法を具體的に述べて居る。先づ健全なる兒童を出生せしめる爲めに、國家は法律を以て結婚者の年齢其の他を規定しなければならないと言つて居る。出生以前の事情にまで溯つた點は、プラトーンと同じである。アリストテレスは、七歳・十四歳・二十一歳を心身發育上の變化期と認め、これを自然の示す教育期の區劃とし、それによつて教育の方法を論じた。一兒童の出生後七歳までは、家庭教育の時期である。出生と同時に、先づ榮養及び運動に注意して、身體を強壯にしなければならぬ。殊に、早くから寒暑に慣れしめることの必要を説いて居る。五歳頃までは、決して讀書其の他の課業を強ひてはならない。身體の發達を害する惧れがある。遊戯は、兒童を運動に馴れしめる爲めに最も必要である。談話には特に注意して、兒童の性行

に不良な影響を與へるやうなものを避けなければならない。また卑しい繪畫や物語の類もこれを禁止することを必要とする。七歳から十四歳までは、公共教育の時期である。此の時期に至れば、國家の設立せる教育機關に於て、將來の國民生活に必要な教育を受けなければならない。此の時期に於て、特に重んぜられるものは體操である。體操は、兒童の身體を健全ならしめ、且つ元氣を養ふ爲めに最も必要と認められた。併し、餘りに過度な運動は、身體の發育を害するものとして、固くこれを誡めた。次に、重要な教科として、音樂を擧げた。音樂は、休養の手段となるのみならず、品性を高尚ならしめる効能がある。圖畫・文法・數學其の他の學科も亦價值あるものとして認められた。十五歳から二十一歳までは、同じく公共教育期の繼續である。略ぼ前と同じ學科が課せられた。此の時期に至れば、體操の如きは、更に一層積極的な鍛練を旨とし、これによつて忍耐や勤勞の精神を養ふものとした。

アリストテレスの教育論中に於て、最も重んぜられて居るのは、道徳的陶冶と云ふことである。アリストテレスは、教育及び教授の主眼點を徳性の涵養と云ふことに置いた。而して、徳性の涵養即ち人間を道徳的に陶冶するには、天性と習慣と教導の三要件を顧慮しなければならない。其の中でも習慣を最も主要なものとした。蓋し、それは、アリストテレスの倫理學說から導かれる結論であつた。アリストテレスの倫理學說によれば、徳とは理性的活動に伴ふて生ずる中庸の習慣に外ならぬからである。アリストテレスの倫理學說に關することは、詳細の説明を他の書に譲りたい。

#### アリストテレスの教育說に對する批判

アリストテレスは、古代希臘の大哲學者にして大教育家である。其の學識の該博な點に於ては、古今に其の例が乏しい。プラトーンの如く、詩人的の想像力や冥想的な思索力をもつ



ては居なかつたが、豊富な材料に基づいて、科學的に研究し、學術の體系を組織する點に於ては、遙かに其の師を凌駕して居た。アリストテレスの著書は、希臘の學術の最高標準を示すものであつた。後世に及ぼした影響の如何に大なるものであつたかは、アリストテレス學派が幾度か時を隔て、思想史上に現はれたことによつてわかるのである。又彼の著書の中には、教科書として永く用ひられたものが少なくない。教育上に於けるアリストテレスの功績も亦没すべからざるものである。

アリストテレスの教育思想は、其の長所も短所も、大體に於て、ソクラテスやプラトーンのそれと等しい。アリストテレスの教育思想は、これ等の人々の思想を祖述したもので、根本精神に於て一致して居るからである。アリストテレスが道徳的陶冶を以て教育論の中心としたのは、彼の學說の長所の第一に數へてよいものと思ふ。道徳的陶冶を教育の目的としたのは、アリストテレスの外にもあつた。併し、アリストテレスの如く、哲學說及び倫理學說に基づいて、これを明瞭に提唱したものはない。國家主義の上に教育の目的及び方法を定めたのは、學說の長所の第二である。國家主義の教育の利害得失は、既にこれを述べたから、これを省略する。國家主義の教育を主張しながら、極端な嚴肅主義・干涉主義に流れず、自由教育を加味したのは、長所の第三である。彼は、自然の示す所によつて、兒童の心身の發育期を分ち、其の各期に應ずる教育の方法を説いた。自然の暗示を顧慮して教育の方法を考へた點は、彼の教育說の長所の第四に數へてよいものであらう。

アリストテレスの教育說の短所は、國家主義及び道徳主義の教育說に共通せるものである。こゝにそれを列挙することを省略したい。

## 第四章 希臘晩年の教育

### 第一節 希臘教育の變遷

**希臘に於ける國情の變遷** マケドニア王のフィリップは、紀元前三三八年に、希臘の同盟軍をケイロニアに擊破して、希臘の覇權を握つた。こゝに於て、希臘全土を威服せしめて居たアテネも遂に滅びてしまひ、希臘の諸國は、もはや其の主權を失つたのである。フィリップ王は、幾干もなくして臣下の者に暗殺せられたが、其の子アレキサンダーが父の遺志を繼いでマケドニア王となり、希臘を平定した。かくして、スバルタ及びアテネの全盛時代は、過去の夢となりはてたのである。アレキサンダー大王は、大帝國建設の大志を懷き、マケドニア及び希臘の兵を率ゐて、ペルシヤ、エヂプト、印度其の他の諸國に遠征を試み、大に其の領土を擴張した。併しながら、其の歿後には、部下の諸將が互に相争ひ、二十餘年間を経て、遂にマケドニア、シリヤ、エヂプトの三大王國及び其の他數個の小王國に分裂した。これ等の諸國の間には、絶えず騒亂が繰り返へされて居たが、やがて羅馬帝國の侵略を蒙り、紀元前一四六年までに悉く滅びてしまつた。

**希臘晩年の教育** かくの如き國情の變遷により、實際教育の狀勢も亦次第に推移して行つた。これを古典時代・民族時代の言葉によつて區別して居る者もある。マケドニアの爲めに征服せられ、希臘の諸國が主權を失つてしまつてから、希臘の教育方針は一變した。從來に於ける國家主義の教育は廢れて、新に個人主義の教育が興つて來た



のである。ソフィストの哲學説は、大に此の時代の風潮に投合した。久しくアテネ市の教育機關となつて居たエフェーベの如きも、マケドニヤの治世に至つては、追々其の教育方針や内容が變化して來た。加之、外に哲學學校とか修辭學校とか云つたやうな學校が勃興した。これ等の學校は、何れもみな私立學校である。其の經營者は、哲學者又は修辭學者等であつた。ソフィストの起した教育機關と全く性質を同じくして居た。希臘の民衆は、これ等の私立學校に入つて自由に高等教育を受けることが出來た。かくの如き教育機關の勃興は、ソフィストの出現と同じやうに、全く時勢の要求に基づくものであつた。希臘の各都市は、其の主權を失つてからも、或る制限の下に自治を許されて居た。故に、自治體の一員として活動するには、辯論に長ずる必要があつた。故に、其の要求に應じて、修辭學を教授する學校が生じたのである。また希臘が主權を失つてからは、國內に種々の騷亂が絶えず起つて、平和な生活を送ることが出來なかつた。従つて、多くの人々は、自己の安心立命を望むやうになり、哲學研究に興味をもつたのである。そこで、哲學上の知識を授ける私立學校の經營が續々と現はれたのであつた。故に、希臘末期の哲學研究は、プラトーンやアリストテレス等が哲學の研究に没頭したのと、大に其の意味を異にして居た。アリストテレスの門弟や其の思想の傳統者中には、前述の如き哲學學校の經營者が少なくなかつた。

## 第二節 希臘晩年の實際教育

### エフェーベの變遷

エフェーベといふのは、前にも述べた通り、アテネ市民の組合である。アテネの市民は、こゝで國民生活上に必要な教育を受けたので、公立の國民教育機關とも見るべきものであつた。アテネの政府が減じ

て、マケドニヤの治世となつてからも、此の教育機關は、尙ほ依然として残つて居た。併し、其の内容はだんだんと變はつて來た。アテネの盛時には、これに加入することを市民の義務として居た。然るに、アテネの滅亡後は、たゞ有志の者だけが隨意に加入しただけである。加之、外國人の加入者が多くなつて、希臘人の會員が年毎に減少して來た。紀元前百年頃には、希臘人の數が僅かに百五十人ほどになつてしまつて居た。

其の教科の如きも、アテネの盛時には、軍隊的の教練が最も重んぜられた。アテネの國民として有爲な人物を養成すると云ふ教育上の理想がはつきりと見えて居た。然るに、後になつては、全く其の精神が減びてしまつて、たゞ一種の社交俱樂部のやうなものになつた。體操や遊戯の如きも、たゞ娛樂としてこれを練習するに過ぎなくなつた。併しながら、紀元前百年頃までは、まだ其の中に初期の精神が残つて居たが、其の後に至つて、それも次第に消耗してしまつた。

### 修辭學校及び哲學學校

これは、前にも述べた通り、時勢の要求に従つて生じた私立の高等教育機關であつた。此の種の私立學校が一時は非常に發達して、續々、創設せられた結果、遂にアテネ大學のやうな學校が成立したのである。

修辭學校と哲學學校とは、判然と區別することの出來ないものである。最初には修辭學を教授して居た學校で、後に哲學を教授するやうになつたものもある。またこれを併せて教授した學校もある。とにかく、これらの學校は、何れも時代の要求に應じて生じたものであるから、時代の要求によつて其の内容も變はつて行つたものと見られる。哲學學校は、プラトーンやアリストテレスの建てた私塾に其の淵源を發して居る。アリストテレスの後に出たスト



ア學派やエピクロス學派は、何れもみな哲學を教授する學校を開いた。プラトーンの創立した學校は、彼の歿後、甥のスピイシッポス (Speusippus. 394—336, B. C.) がこれを承継した。其の學長は、最初、先任者の指名によつて定めらるることになつて居たが、後には、選舉に依ることとなつた。アカデミーと云つて名高い學校がこれである。アリストテレスの學校は、長く續かなかつた。創立後十年ばかりで廢校となつた。ストアの學校、エピクロスの學校も、一時、非常に多くの學生を集めた。其の外にも尙ほ多くの哲學學校があつて、それぞれ専門の知識を教授して、時代の要求を満足せしめた。これ等の哲學學校は、外部の社會的事情の變動に左右せられ、轉々と其の位置を變じ、或は其の組織を改めたが、羅馬の時代に至つて統一せられ、アテネ大學となつたのである。

哲學學校の主要教科は、云ふまでもなく哲學であつた。併し、哲學の外にも文法・修辭學・物理學のやうな學科を併せて課した。哲學は、たゞ一定の學説を講述するのみに止まつた。多くはプラトーンやアリストテレスの哲學が其の中心となつて居た。教授の方法も、これ等の哲學者の遺著を教科書として、それに單なる註釋を加へるのみであつた。

**アレキサンドリヤの文化と教育** マケドニアの侵略を蒙つた時、希臘の國民中には、小亞細亞及びエジプト其他の植民地に難を避けた者が多かつた。こゝに於て、希臘の文化は、これ等の植民地に移植せられた。これ等の植民地に於て文教の中心となつたのは、エジプトのアレキサンドリヤであつた。其の外にロードス及びタルソス等に於ても、大に文教の振興を見るに至つた。エジプトは、アレキサンダー大王の歿後、プトレメウス及び其の子孫が君臨する獨立の王國となつた。プトレメウス一世は、アレキサンドリヤを文化の中心たらしめる志をもつて、夙に

圖書館を開き、博物館を設け、アカデミーを起し、公費を以て學問の研究を奨励した。プトレメウス二世及び三世は、何れも文教の興隆に力を注いだので、アレキサンドリヤの文化は、やがてアテネのそれを凌駕するやうになつた。アレキサンドリヤ大學の如きは、古代に於ける屈指の著名な學校であつた。文献の蒐集、學術の研究、學校の勃興等に伴ひ、アレキサンドリヤに於ては、教育も非常に發達したが、紀元前六四年に至り、マホメト教徒の襲撃を受け、遂に國土の滅亡となり、文化も自ら衰頹してしまつたのである。

### 第三節 希臘晩年の諸學派と教育

希臘の哲學は、アリストテレスによつて進歩の頂上に對したのであつた。而かも、此の時、希臘の政治は、既に衰頹に傾いて居た。マケドニアの侵略を受けて、政治上の獨立を失つてから、希臘の國民は、人生の無情を感じ、個人的安心立命を求めらるやうになつた。哲學の如きも、從來の如き、學究的な興味や、實社會に於ける功名利達の欲求を離れ、只管自己の精神的慰安を目的として研究する者が多くなつた。アリストテレス以後に現はれた諸學派には、何れも皆其の傾向が鮮かに現はれて居る。それ等の學派の中、主要なるものを擧げて見ると、(一)ストア學派、(二)エピクロス學派、(三)懷疑學派等である。此の三學派と教育の關係を次に一言しよう。

**ストア學派と教育** ストア學派は、ツェノン (Zenon. 342—270, B. C.) の創立せるものである。克己主義の道德説が其の根本思想になつて居る。ストア學派は、自然に従つて生活することを人生の目的とした。自然は理性である。故に、自然に従ふ生活とは、理性に従つて生活することである。理性に従つて物欲を制すること、これが即ち



自然的生活の要旨であつた。理性の力によつて、物欲の煩惱から解脱した状態を、アパタイアと名づけた。アパタイアの状態に達した理想的人物が、ストア學派の所謂賢者である。

ストア學派は、自然的生活によつて、安心立命の境を求めようとしたのである。自然的生活とは、理性的生活即ち道徳的生活である。ストアの學説は、當時の風教を維持する上に多大の効果を有して居た。加之、ストア學派は、創立者ツェノーンの時から、ストア・ポイキレーに學校を開き、多くの子弟を教養した。ストア・ポイキレーは、彩色した堂といふ意義である。ストア學派の名稱は、これから生じたと云ふ。ツェノーンに次いで此の學派を主宰した者は、クレアンテスである。ツェノーンもクレアンテスも品行の方正な學者であつて、當時の人々から多大の尊敬を受けた。ストア學派の學校は、希臘の晩年に起つた多くの哲學學校の中でも、最も著名なものであつた。此の學派が實際教育上に貢献した功績は、教育史上に没すべからざるものである。其の學説には、種々の缺點もある。主義に偏して、個人の感情生活を無視したことなどは、最も著しい缺點である。併し、道徳的生活を人生の目的とし、教育の理想をこゝに置き、自ら模範を示して子弟を教導した教育的精神は、甚だ貴いものと云はなければならぬ。

**エピクロス學派と教育** エピクロス學派の創立者は、エピクロス (Epikuros, 341-270, B. C.) である。快樂を以て人生の目的とした。人生の目的は、快樂を求めると云ふのである。ストア學派の理想と全く反して居る。快樂的生活と克己的生活、これは古今を通じて人類の思想界を貫く二大潮流である。此の二大潮流は、希臘の古代に於て、既に人類の思想界に對立して居たのであつた。エピクロス學派は、個人の快樂を以て人生の目的とした。併し、個人の快樂には、精神的快樂と肉體的快樂との二種あることを認め、肉體的快樂よりも精神的快樂を重んじた。而し

て、また精神的快樂をも二種に分けた。其の一つは、積極的・動的快樂である。これは、人間が自己の欲求を満足さうとする運動から起る。他の一つは、消極的・靜的快樂である。これは苦痛のない状態である。此の二種の快樂の中で、特に後の消極的・靜的快樂を重んじ、これを絶対的快樂とした。故に、エピクロス學派の説によれば、個々の快樂を求めることが人生の究竟目的ではなかつた。心の靜平を保つて何もものも求めざる満足の状態に達することであつた。かくの如き状態を名づけて、エピクロスは、アタラクシアと稱し、アタラクシアに達した理想的人物を賢者とした。エピクロスの解脱觀は、ストアのそれと頗る接近して居る。此の二學派は、全く異なる根本思想から出發して、同じ結論に達したのであつた。

エピクロス學派も亦ストア學派と同じく、哲學學校を開いて、子弟を教養した。此の點に於ては、同じやうに教育上の功績を認めなければならぬ。ストア學派の學者からも多くの賢者が出た。殊に其の創立者エピクロスの如きは、温厚な學者として、世人から深く尊敬せられた。併し、エピクロス學派の快樂主義は、種々の缺點をもつて居る。教育上の目的を此の學説によつて定めることは出来ない。第一に、此の學説は、往々世人から誤解されて、悪い意味に用ひられ易い。希臘の晩年に此の説が一般の民衆から多大の歡迎を受けたのも、享樂を欲する頹廢した民俗に迎合する點があつたからである。次に此の説は甚だ消極的であつて、精神的活動を不活潑ならしめ、人間の生活を退嬰に導く。エピクロス學派は、心の靜平を求め、これを絕對的の快樂とし、これを人生の目的とした。其の結果、教育上の意見の如きも、非常に消極的に傾いて居る。エピクロス學派に於ては、人間の積極的活動に必要な教科は、悉く不必要なものとして排斥せられた。最も價值ある學科と認められたのは倫理學である。倫理學は、人生の目的を自覺せ



しめ、且つこれを實現する方法を教へる。故に、倫理學は、最も重んずべき學科である。初歩の者には、讀方と書方も必要な教科の中に數へられた。自然科學の如きは、自然現象の原因を教へて、迷信から脱せしめる消極的價值を有するに過ぎない。文法・歴史・音樂・文學・數學・辨證法・修辭學の如きは、人生に全然無價值のものである。文法や歴史は思想を偏頗にする。音樂や文學は倦怠の情を催さしめる。數學や辨證法や修辭學は、人間の幸福と何等の關係もない。これがエピクロス學派の教育意見の一端である。かくの如き消極的意見が到底教育上に於て承認し難いものであることは論ずるまでもない。

### 懷疑學派と教育

ストア學派の理性的生活や、エピクロス學派の快樂的生活のやうに、人生の目的を明かに掲げず、懷疑主義の哲學思想を唱へた者を懷疑學派と云つて居る。懷疑學派の説によれば、人生の目的が理性的生活であるとか、快樂の追求にあるとか云ふのは、何れもみな獨斷論に過ぎないと云ふのである。かくして、懷疑學派は、認識の可能を疑ひ、知的要求の愚を唱へ、甚だしきに至つては、判斷の中止を叫んだ。懷疑學派の中には、種々の系統がある。プラトーン學派の如きも、後には懷疑主義に傾いた。

懷疑學派も亦教育上に利益と弊害とを與へた。懷疑思想を極端に發展せしむれば、學問の價值を否定し、同時に教育の効果を抹消し去ることになる。懷疑學派の中にも、かゝる極端な説を唱へた者が少なくなかつた。併し、從來の獨斷論から離れて、更に認識の問題を根本的に考へると云ふ態度は甚だよいのである。さうした點に於て、此の學派の思想も教育上の成績が全くないものとは考へられない。

## 第五章 羅馬の教育

### 第一節 概 説

**羅馬の建國と其の盛衰** 羅馬大帝國は、チベル河畔に住めるラテン人種の村落から起つた。此の村落が次第に膨脹して、名高い羅馬市となつた。それが羅馬建國のはじめである。後世の羅馬人は、紀元前七五三年を以て建國の年として居る。羅馬人は、建國のはじめから、侵略主義を國是として、次第に他の種族を征服し、其の版圖を擴大した。紀元前二七五年の頃には、伊太利半島の大部分を統一し、地中海沿岸の一大強國となつた。當時、地中海の沿岸には、カルタゴ共和國及びエヂプト、シリヤ、マケドニアの三大王國が相對峙して、其の勢力を競つて居た。羅馬は、先づカルタゴと戦つてこれを降し、マケドニア及びシリヤ等を征服し、地中海沿岸の諸國を悉く併呑し、世界第一の大國となつた。

羅馬の變遷に關する詳細の歴史的事實は、通常の西洋史によつてこれを知らなければならぬ。併し、羅馬盛衰の事情を簡單に理解して置くことは、羅馬の教育を知らうとする者にとつて、最も必要なことであらう。羅馬は、建國以來二百五十年間王政が行はれたが、其の後に至つて共和政治となつた。もと羅馬の人民は、貴族と平民との二階級に分れて居た。貴族の階級は、最初からの土着者及び其の子孫であつて、平民の階級は、後に移住して來た者及び其の子孫である。さうして、最初、貴族のみが政權を握つて居たが、後には平民も貴族と同じやうに政權を得やうとし







想も亦移り變はつて居る。併しながら、羅馬國家の發達を理想とする點は、殆ど前後を一貫したものであつた。初期の羅馬人には、此の理想が特に強く現はれて居た。チベル河畔の小村落に住んで居た羅馬の農民は、愛國心に燃え、正義の精神が溢れて居た。彼等は、質素な生活に甘んじ、日夜孜々として働らいた。さうして、自國の發展をはかるためには、如何なる困難をも排して進むといふ氣概を有して居た。かくの如き羅馬魂が羅馬の大帝國を建設した。かくして世界の大國となつた羅馬には、種々の民族が混淆して、次第に建國當初の精神を失つて來た。其の結果は、遂に大帝國の瓦解となつてしまつたのである。

オットー・ウイلمانは、羅馬民族の特質として、(一)實際的であつたこと、(二)辯舌を重んじたこと、(三)多方的な趣味を有つて居たこと、(四)道德的であつたこと、(五)世界的であつたこと等を數へた。羅馬人の特質を明瞭に約説したものである。

**羅馬の社會狀態**　羅馬の社會狀態は、時代によつて變遷して居る。其の人民の種別や、政治上の組織等に就いては、既にこれを概説した通りである。即ち、羅馬人は、はじめそれを二種に大別することが出來た。其の一は、土着羅馬人の系統、其の二は、移住者の系統である。此の外にも尙ほ多數の奴隸と云ふものがあつた。土着羅馬人の系統に屬するものを貴族とし、移住者の系統に屬する者を平民とし、これを併せて羅馬の自由民と認め、自由民と奴隸とを區別したのである。此の自由民の中には、種々の民族が含まれて居た。それ等の專問的に亘る説明は、これを他の書に譲りたい。其の後、社會が複雑となつて來るに従つて、貴族の階級の中に、一種の閥族を生じ、平民の階級に、中産階級や無産階級を生じて、自由市民の種類も亦頗る複雑になつた。而して、其の種類によつて、社會に盡す市民

の義務が若干異なつて居た。

羅馬の社會の特色は、家族制度が非常に重んぜられて居たことである。此の點は、日本の社會と稍々似て居る。羅馬の社會では、父若しくは夫が家族の中心となつて居た。而して、此の家族の中心たる父若しくは夫の家長權といふものが甚だ重かつた。家長は、家族の中心であると同時に、一家内の宗教に關して、牧師と同じ地位を認められた。一家内の宗教に關しては、市長も教長もこれに干渉することは出來なかつた。家長の權力が強いので、婦人の地位は、自ら低からざるを得なかつた。羅馬の法律は、婦人の地位を非常に輕視した。婦人は、男子の絶對的支配の下に置かれてあつた。子を生まざる妻を夫は離縁することさへも出來るやうになつて居た。また母は其の子に對して何等の權威をももたないものと認められた。併し、それは、婦人を奴隸視したわけではなかつた。婦人は、其の夫に對しても、其の子に對しても、或る威嚴を具へて居た。かくの如き家族制度も、羅馬の版圖が擴大するに及び、異國の文化や風俗のために攪亂せられて次第に銷磨してしまつた。

**羅馬教育の特色**

羅馬の教育も亦社會組織と同じやうに、時代によつて次第に變遷して居る。併し、全體を通じてこれを眺めると、希臘の教育とよく似た點がある。それは、國家主義が實際教育の背景になつて居ることである。國家の爲めに有爲な人物を養成すること、これが即ち羅馬の教育の目的であつた。羅馬の國家に有爲な人物とは、如何なる資格を有するものであらうか。それは、第一に戰爭の出來る人である。羅馬は、絶えず外敵と戰つて其の領土を侵略した。戰爭の役に立たなければ、羅馬帝國に於ける有能な人間とは認められなかつた。次には政治上の活動の出來る人である。それには先づ政治や法律の學問に通じて居なければならぬ。また雄辯と云ふことが最も必要な條



件である。以上の如く説明すれば、羅馬の教育の特色は、自ら明かになつたことであらう。羅馬に於ては、身體の壯健な人間、勇氣に富んだ人間、政治・法律の學問に通じた人間、雄辯の才能ある人間を、教育目的の對象として考へたのである。而して、愛國心の鼓舞と云ふことが、徳育の根本方針となつて居たものと思はれる。羅馬の教育の特色は、こゝにあつたのである。

## 第二節 羅馬の教育

羅馬の教育は、前後の二期に分ちてこれを述べるが便利であらう。前期の教育は、羅馬固有の教育、後期の教育は、希臘文化の移入以後の教育である。

**前期の教育** 古代羅馬の社會組織は、家族制度を其の基礎として成り立つて居た。古代羅馬の歴史を飾るものは、家庭であつた。羅馬の家庭は、一夫一婦から成り、父及び夫は、家族に對して絶対の權利を有し、家族間には、從順・誠實・忍耐・敬虔等の徳徳が非常に發達して居た。古代羅馬の教育は、かくの如き家庭を中心として行はれた。これが前期の教育の特色である。

古代羅馬の兒童は、善良なる家庭に於て、嚴格にして慈愛に富める兩親から、羅馬固有の思想や習慣を教へられた。羅馬の家庭は、幼兒の教育に最も適當な場所であつた。謹嚴にして勇敢な父、貞淑にして氣品ある母、それ等の言行は、自ら幼兒に道德的感化を及ぼした。國家は、教育事業に干渉する必要がなかつた。國家は、教育の權能を家庭の中心たる父に一任した。國家は、教育法令も制定せず、教育機關も設置しなかつた。如何なる方法により、如何なる

師に就かしめて、其の子女を教養すべきか。それを定める權能は、すべて家長に與へられて居た。後に至つては、セソルと云へる官職が設けられ、兒童教育の道德的方面を監督し、其の責任を果さざる家長に譴責を加へたが、最初には兒童教育に對して全然無干渉の方針を採つた。

羅馬の父母は、其の子女を愛し、子女の教育に最も力を注いだ。殊に、貴族の階級に於ては、子女の教育を重んじた。希臘の如くに奴隸を使用して教育の任務を分擔せしめるやうなことをせず、父が自ら模範を示してこれを訓陶した。



第九圖 羅馬の家庭

父は、常に己れが行く處に子どもを伴ひ、羅馬市民の生活を實地に見學せしめた。男子の教育には、父が主としてこれに當り、女子の教育には、母が主としてこれに當つた。男女ともに最も力を注いだのは、道德的訓練であつた。愛國心の鼓舞は、羅馬の家庭に於て、特に尊重せられた徳育の核心であつた。其の方法として、父母は、常に偉人及び英雄の事蹟や、戦争の物語等を、兒童に語り聽かせた。羅馬當時の國家を本位として考へた有能な人間を養ふことが教育の目的であつたから、體育も亦重要な地位に置かれ、兒童には、早

くから種々の遊戯を練習せしめた。殊に投槍とか乗馬術とか拳闘術とか云ふやうな戦争のために必要な遊戯が盛んに奨励せられた。文學的數育は、比較的輕視せられて居た。羅馬の國民として最も必要な十二銅標法典の誦誦を主とし、讀方・書方及び修辭等を學ばしめたのみであつた。十二銅標法典と云ふのは、紀元前四五一年に、貴族の官吏や裁判官が庶民に不法な處置を行ふことを防ぐ目的を以て編纂せられたものであつた。十二個の銅板に法律の明文を刻した



ので、十二銅標法典の名稱を生じたのであつた。

古代羅馬に於ては、家庭が教育所であり、父母が教育者であつた。併し、父母の中には、兒童を教育する知能の缺けた者もあつた。かゝる父母は、家庭教師を招聘して、其の教育を托した。けれども、此の家庭教師は、希臘の教僕と其の性質を異にして居た。家庭教師を招聘することの出来ない者は、遊戯や讀書等に特殊の才能及び知識を有する者が開いて居る私塾へ兒童を通學せしめた。さうした性質の私塾は、當時の社會の要求に應じて、到る處に設けられ、家庭の教育を補つて居たやうに思はれる。これ等の私塾は、初等學校・文法學校・修辭學校の三種に分れて居たのであつた。初等學校は、六・七歳の兒童の入學する最も程度の低い學校であつた。こゝでは、嚴格な訓練の下に讀方・書方・算術等の初步を教へた。文法學校には、十二歳前後の者が入學した。こゝでは、語學や修辭學や法律學や音樂を課した。修辭學校は、十五六歳の者を入學せしめた。専ら修辭學を研究させるのが此の學校の目的であつた。當時の羅馬に於ては、辯論と云ふものが特に其の必要を認められて居た。辯論に長じて居なければ、社會に出て活動することが出来なかつた。修辭學が尊重せられ、これを授ける専門の私塾が濫出したのは、時勢の要求から來て居る。此の修辭學校では、一定の論題を提出して、衆生の面前で演説討論等を行はしめた。かくして、議論の方法を會得し、雄辯家となる修養をしたのである。要するに、これ等の學校は、何れもみな家庭教育の補助機關とも見るべきものである。家庭に代はつて兒童を教育する所であつた。國家は、これに對して何等の援助をも干渉もしなかつた。かくの如き家庭中心の教育を受けた兒童は、十七歳の終になると、普通國民の教養を有する大人と看做される。これからトীগと稱する白衣を着ることが出来るのである。

### 後期の教育

希臘征服以後、希臘の文化は、羅馬に侵入して來て、古代羅馬の特質を銷磨せしめ、其の家族主義の美風を破壊した。武力を以て希臘を征服した羅馬は、文化を以て希臘に征服せられたのである。

希臘文化の影響を受けて、社會の狀態が一變するに及び、教育も亦それに伴つて著るしく變化した。家庭を中心とした従来の教育的精神は全く廢れ、多くの父母は、アテネの教育に倣ひ、其の兒童を乳母や教僕に委ねて更に顧みないやうになつた。それと同時に、學校教育が次第に勃興して來た。

前にも述べた通り、羅馬には夙に家庭教育の補助機關とも云ふべき私立學校が存在して居た。これ等の私立學校は、紀元前五世紀の頃に其の起原を發したものである。希臘の文化の移入により、これ等の學校が次第に其の組織を整へて來た。既設學校の或る者は廢れ、新らしき或る學校が興り、かくしてこゝに整頓した學校系統が生じたのである。此の時代の學校も種類から云へば、大體に於て前期と同じく三種に大別することが出來た。第一は小學校即ち初等學校、第二は中等學校即ち文法學校、第三は専門學校即ち修辭學校及び哲學學校である。

**小學校** これは前の初等學校と同じ性質のものである。讀力・書方・算術を教授する私立學校である。其の維持經營は専ら月謝によつた。

**中等學校** これは文法學校である。主として文法や文學を教授する私立學校であつた。其の文法及び文學の中には、希臘語や羅甸語を含んで居た。帝政時代には、政府の補助を受けて、學校を維持經營するやうになつた。學科も時代によつて變遷した。

**専門學校** 修辭學校や哲學學校がこれに屬する。哲學學校は甚だ尠なく、修辭學校が大部分を占めて居た。實際的



活動を貴ぶ羅馬の國民には、理論的な哲學の價值が割合に輕視せられた。これ即ち羅馬に哲學學校の發達しなかつた理由である。これに反して、辯論は、實際社會に於て活動する公人に最も必要な資格の一つになつて居た。従つて、修辭學校は、年々歳々其の數を増した。紀元前一六一年に、羅馬の元老院は、哲學及び修辭學の研究を禁じ、其の學徒を放逐する決議をした。其の後、ドミチヤヌス皇帝も亦同じやうな令を發したことがあつた。併しながら、實際に於ては、殆ど何等の効果もなかつた。後には却つてかゝる教育機關の必要を認め、國費を以て其の學校の維持をはかつた皇帝もあつた。

第十圖



羅馬の小學校

羅馬の青年がアテネに留學することも、既に古代から行はれて居た。また地方の青年で、羅馬に出て教育を受ける者も非常に多かつた。

**羅馬の女子教育** 羅馬人は、女子の教育にも常に注意を怠らなかつた。女子の教育も亦家庭が中心になつて居た。女子も男子と同じやうに小學校に入學させた。併し、小學校を終つた其の後には、専ら家庭教師に就いて學ばしめた。ルー فس (Gaius M. sonius Rufus) は、其の著「女子教育論」の中に於て、男女の教育を同一にしなければならぬと云つて居る。男女の道德は、同等であらしめなければならぬ。即ち男子も女子も同

じ道德の基礎に立つものである。また男子も女子も共に伶俐であり、さうして勇氣がなければならぬ。従つて、女子の教育は、男子と同等に必要であると言つて居る。最も進んだ意見である。男女の教育を同一にすると云つても、勿論、女子を男子と同じやうに取扱はうと云ふのではなかつた。男子と女子とは其の性質を異にして居る。男子には男子に適した教育を施し、女子には女子に適した教育を施さなければならない。男子と女子とは、其の性質に應じて同じ程度の教育をする必要があるといふのであつた。

**羅馬の教育に對する批判** 羅馬の教育全體に概括的な批判を下すことは甚だ困難であるが、極めて顯著な特徴のみを數へ見れば、長所の第一として、實際的と云ふことを挙げなければならない。羅馬の教育は、其の理想も其の方法も共に實際と云ふことに即して居た。決して空理想論に流れなかつた。實際の役に立つ人間を造ること、これが羅馬の教育を一貫した精神であつた。第二の長所には、國家的と云ふことを挙げなければならない。此の點は、希臘の教育とよく似て居る。羅馬の國力を増進して大國家を建設するといふ大きな夢があらゆる國民生活を支配して居て、教育の理想も其處から生じて來たのである。第三の長所としては、家庭教育の徹底といふことが數へられる。後には希臘の教育を模倣して、其の良風美俗を失つたが、兩親が兒童教育の全責任を負ひ、自ら活模範を示して教育した點は、教育史上に特筆すべき長所であらう。長所の第四は、道德教育を重んじたことである。愛國心の養成を以て教育の核心とし、兒童を道德的に訓陶することを父母の使命と認めた。古代羅馬の如く道德教育を尊重したのは、其の例に乏しいことであらう。長所の第五は、政治・法律等の如き學科を重んじて、社會生活上に有能な人物を養成しようとしたことである。其の結果は、雄辯術や修辭學の如き特殊の學科が大に發達したのであつた。



次に、羅馬の教育の短所を擧げて見ると、第一は、實際主義に伴ふ弊害である。即ち實際的方面を過重する餘り、理論的方法を輕視したのであつた。短所の第二は、國家主義に伴ふ弊害である。國家のみを眼中に置けば、自ら個人的方面が等閑に附せられる。これは、たゞ羅馬の教育ばかりではない。短所の第三は、政治・法律の學科を過度に尊重した爲めに、多くの人文學科の地位が輕視せられたことである。社會生活に必要な學科に力を注ぐことはよいが、他の人文學科にてもそれぞれ教科としての價値がある以上、これを輕んずるのはよくないのである。

## 第六章 羅馬の教育思想

### 第一節 羅馬の文化と教育思想

**羅馬の文化** 羅馬の文化は、概して云へば、希臘文化の模倣に過ぎなかつた。羅馬は、武力を以て諸國を統一し、尠大なる國家を建設した。併し、希臘人に比較すれば、遙かに文化的國民の資質を缺いて居た。希臘を征服して其の文化を移入し、それを模倣して、漸く自國の文化を高めたに過ぎなかつた。學術に於ても、文藝及び美術に於ても、希臘のそれには遠く及ばない。羅馬に於て、特に發達したものは、たゞ法律學と雄辯術のみであつた。これは羅馬文化の特色と云つてよい。

羅馬の國民文學は、共和時代の末頃から興つた。所謂ラテン文學がそれである。シーザーの筆に成れるガリヤ征討記の如きは、最も立派な一種の文學と認められて居る。アウグスツス大帝は、大に文學を奨励したので、此の時に、ヴ

ーヅル、ホラチウス、オヴイヂゥス等の詩人や、リヴィウスのやうな有名な史家が輩出した。後世此の時代を稱して、ラテン文學の黄金時代と云つて居る。其の後に至つても、タキツスの如き史學者や、セネカ及びエビクテートス等の如き哲學者が出た。併しながら、希臘の學術に比すれば、實に寂漠の感がある。

羅馬に於ては、共和時代の末頃から、歴代の帝王が、其の威光を示すため、または人望を得るために、大規模の工事を起した。従つて、建築や土木は大に發達した。壯麗雄大を極めた凱旋門や劇場や競馬場の跡が後世までも昔日の俤を偲ばしめて居る。

羅馬の文化には獨創の見が乏しく、希臘の模倣に止まるものが多い。併し、希臘の文化を承継ぎ、且つ基督教の思想をよく包容し、これをゲルマニヤ種族に傳へ、歐洲文化の先導者たる任務を果した。文化史上に於ける羅馬の地位も蔑視することは出来ないのである。

**羅馬の教育思想** 羅馬には獨創的な學術や文藝が發達しなかつたやうに、教育思想上にも特色のあるものがない。また教育家として偉大な人物を輩出しなかつた。羅馬時代を通じて、教育家の第一人者と言はれて居るのは、クインチリアヌスである。羅馬の教育思想と云へば、此のクインチリアヌスや、シセロ、セネカ其の他の政治家や學者が、實際教育に關する意見を述べて居るのみである。系統的な教育學說と云ふやうなものは全然ない。併し、それ等の人々が唱へた斷片的な教育意見の中には、傾聴すべき議論も亦尠なくなつた。左に其の二三を概説することにしよう。



## 第二節 シセロの教育説

シセロ (Marcus Julius Cicero, 106-43, B. C.) は羅馬の大政治家である。アントニウスとの間に不和を生じて、刺客の手に斃れたが、雄辯家としての名聲を永く史上に遺して居る。

### シセロの學風と根本思想

シセロは、幼時、羅馬固有の教育を受け、長ずるに及んで希臘の哲學を修め、且つ希臘及び小亞細亞其の他の地に遊學した。彼は、希臘の思想と羅馬の精神とを其の一身に於て結合した。知識の該博に加ふるに辯論の天才を有して居た。併し、彼は、たゞ希臘の哲學を平易に解釋し、獨得の雄辯を以て民衆に傳へたのみである。獨創的な思想を發表して居ない。

第十圖



シセロ

教育説 シセロの教育説は、科學的に組織せられたものでない。たゞ、哲學や修辭に關する著書の中に散在する斷片的の意見のみである。

シセロの説によれば、教育とは、自然から與へられた性の完成に外ならなかつた。人は、自然界に於て最高の地位を保つものである。故に、人は、自然から知及び情に關する稟賦の性を稟けて生れて來た。此の性を正しく發展せしめることは、人にとつて最も重大な問題である。こゝに教育の必要なる理由が存在して居る。人間に具はれる善の萌芽を育成して、罪惡の根源とも云ふべき享樂心を抑制し、高尚な思想の發達を促すものは、教育を除いて外にない。

セロは、以上のやうに教育の必要を力説して居る。

シセロは、兒童の發達といふことに最も深く注意した。初生兒は、殆ど無意識の状態にある者であるが、やがて感覺を生じ、知識を生じて、次第に發達してゆく。知的生活の發達に伴つて、道德的の萌芽も生じて來る。活動力も著るしく進む。教育の方法は、此の心身發達の順序によつて定めなければならない。幼兒は、遊戯や童話を非常に好む。従つて、幼兒に先づ授けなければならないものは遊戯や童話である。以上の如き理由によつて、シセロは、遊戯や童話に關する意見を詳しく述べた。シセロはまた兒童の發達に外圍の影響の極めて著るしいものであることを認めた。外圍の影響に就いて種々の説明を試みた。シセロは、體罰を非難して居る。幼童は、時々これを罰する必要がある。何となれば、全然罰を加へなかつたならば、兒童の性癖を矯めることは出來ないからであつた。併しながら、兒童の過失に對して、侮辱的な態度を示したり、怒に乗じて罰を加へたりしてはならない。怒れる時は、心情が激動して居るので、往々常規を逸した振舞をし易い。兒童を叱責する場合には、決して嫌惡の情を交へず、誠實と親切を旨とし、兒童をして衷心から感謝せしめるやうにしなければならない。かくの如く、シセロが體罰を排斥したのは、今日から見ても卓見と云はなければならない。

シセロの教育思想は、羅馬の教育の背景をなして居る國家主義の上に立脚して居た。シセロの説によれば、教育の目的は、國家のために個人を陶冶することであつた。人は、國家の中に生れ、國家の保護を受けて成長する。國家が個人を保護して、これを教育する所以のものは、個人を安樂に徒食せしめるためでない。國家其のものをこれによつて存立せしめる爲めである。故に、人間は、常に國家の持續發展に必要な知識や技術を學ばなければならない。シセ



口は以上の如く述べて居る。

シセロは、雄辯を非常に重んじた。これは、羅馬の社會狀態や實際教育の反映である。シセロの著書には「雄辯術」と云ふのがある。シセロは、雄辯家の養成を以て教育の目的と考へた。當時の羅馬社會が最も歓迎したものは雄辯家であつた。故に、羅馬人は、雄辯家となつて、社會のために活動することを理想とした。従つて、羅馬の國家を中心として考へた國家主義の教育は、結局、雄辯家の養成と云ふことに歸着したのであつた。併し、當時の雄辯家は、今日のその如く、單なる辯舌の達人を意味して居なかつた。該博なる知識、高遠なる識見、豊富なる思想等を有し、これを辯舌によつて發表し得るものが雄辯家であつた。當時の世の中に於ては、難詰の如き思想發表の機關が完備して居なかつたので、市民は、公開の席上等に於て意見を發表した。故に、辯舌の必要が認められたのである。シセロは、雄辯家の資格として、第一、事物に關する知識の豊富なること、第二、辯舌によつて聽衆を感動せしむる力を有すること、第三、人の心理狀態をよく理解すること、第四、頓智の才あること等を擧げた。

### 第三節 セネカの教育説

セネカ (Seneca, A.B.C.—05) は、コルドバに生れ、羅馬に移りて哲學を研究した人、エピクテイトスと並ぶ羅馬のストア哲學者として聞えて居る。ネロの教育主任となり、後にネロが帝位に即くに及び、羅馬帝國の政治に參與して、大に權勢を振つたが、ネロの厭ふ所となつて死刑に處せられた。

根本思想 セネカは、ストア派の哲學者である。其の思想は、ストアの哲學を承け繼いで居る。人間は、理性と

衝動即ち欲情より成れるものである。而して、理性は、これ即ち神より發したるもの、これあるがために人間は萬物の靈長と稱することが出来る。此の理性によりて、欲情を抑壓するところに、道德と云ふものが生ずる。欲情は、たゞこれを節するのみに止まらず、全く破壊してしまはなければならぬ。かくして、人間は、はじめて眞の幸福に達することが出来る。人間が欲情を廢棄して眞の幸福に達するには、多大の努力を要する。哲學は、かくの如き人間の努力に適當な指導を與へるものである。哲學は、人間に對して、神を敬ひ、人を愛し、自己の意志を神意と一致せしめ、喜悅及び苦痛によつて動かされない聖者の道を教へる。セネカの根本思想は、以上の如き點にあつた。セネカは、國家主義を唱へ、國民としての主要道德として、正義・敬虔・好意を擧げ、大にこれを重んじたが、また他の方面に於ては、基督教の精神を汲み、人類愛を主張し、同情及び慈愛の徳の必要を認め、怨に酬ゆるに徳を以てせよと言つて居る。

教育説 セネカの教育説は、以上述べた哲學及び道德に關する根本思想に基づいて居る。セネカの説によれば、教育の目的は、道德的生活を實現することにあつた。道德的生活の實現とは、前にも述べた通り、理性の力によつて、欲情を排除することであつた。故に、理性の活動を盛んにして、これにより欲情を支配せしめることを以て、セネカは、教育の目的と認めたのである。

セネカは、教育の事業を醫師の治療に譬へた。人間の欲情は、理性に先立つて現はれる。従つて、人間は、精神上の疾病をもつて生れるものである。教育者は、此の精神上的の疾病を治療する醫師に等しいものである。教育者は、常によく中庸を保つて寛嚴其のよろしきを得ることを要する。懲罰は、恰かも外科の治療のやうなものである。兒童の



過失には、なるべく寛大なるがよい。併しながら、寛大にして効果のない時には、或る程度の懲罰も亦やむを得ない。勿論、怒りに乗じて児童を罰するが如きことは、これを深く誡むべきである。外科の治療は、一時の苦痛を與へても、悪症を根治する效能がある。懲罰も亦これに似て居ると云ふのであつた。

セネカは、個性教育の必要を説いた。児童は、それぞれみな性質を異にして居る。性質を異にする児童に對しては、またそれぞれ教育上の取扱を異にしなければならない。例へば、粗暴な児童は、これを温順ならしめるやうに、憶病な児童は、これを快活ならしめるやうに取扱ふことが必要である。児童は、衝動的に名譽心をもつて居る。此の名譽心を利用することは、児童の道德的訓練上、見逃すべからざる方便である。實例による練習は、教訓による指導よりも、教育上有效であるから、幼少の時から模範を示して、善良なる習慣を養はなければならない。セネカは、如何なる事情の下にあつても児童の個性を抑壓するやうなことを非とした。かく児童の個性に着眼したのは、卓見と云はなければならない。

#### 第四節 クインチリアヌスの教育説

クインチリアヌス (Marcus Fabius Quintilianus. 35-103?) は、羅馬時代の教育界を代表する第一人者と稱せられて居る。西班牙のカラグリスに生れたが、幼少の時、羅馬に來て雄辯術を學んだ。其の後、故國に歸つたが、十年の後、再び羅馬に出て辯護士を開業した。ウエスバシヤヌス帝の時に、學校を開いて、皇帝から校費の補助を受けた。ドミチヤヌス帝の時に至りて、教育家としての功績を認められ、コンスル (Consul) の稱號を受けた。

#### 根本思想

クインチリアヌスも亦民族時代に於ける希臘思想の影響を受けた。理性主義・個人主義が其の根本思想になつて居る。人間は天賦の理性を有する者である。故に、人間の本性は善である。人間は、何れもみな善に向はんとする性質を具へて居る。かくの如き理性主義及びそれに基づく性善論は、希臘の哲學者が屢々これを唱へたものである。羅馬に於ても、これを承繼した者が尠なくない。セネカの思想の如きも、大體に於てこれと一致して居る。クインチリアヌスも、羅馬時代に於ける他の諸學者と同じく、創見的思想家ではなかつたのである。併し、彼の教育意見は、比較的まとまつたものであつた。希臘羅馬を通じて、彼の著書「雄辯教授論」の如く、組織的に教育のことを論じたものはないと云はれて居る。

#### 教育説

クインチリアヌスは、理性主義を以て、教育の根本思想とした。人間は、天賦の理性を有するものである。故に、児童は、自ら學習し得る能力を具へて居る。鳥は飛ぶべく生れ、馬は走るべく生れた。それと同じやうに、人は理解すべく生れたものである。教育とは、要するに、此の自然の性能を助長發展することに外ならぬ。人間の性は善なるが故に、自然の性を發展せしむれば、人間は自ら善人となる筈である。人間が成長してから善に背くやうになるのは、自然の性能に對する不注意の結果である。自然の性能に對する注意の如何により、人間の賢愚及び善悪が分れる。以上がクインチリアヌスの教育思想の主眼點である。

#### 教育の目的

クインチリアヌスの説に従へば、教育の目的は、児童が先天的に稟有する性能を發展せしめるにあつた。先天的の性能を助成すれば、何人もみな自ら道德的に善良なる人間となることが出来るものと考へたのであるから、彼の教育目的觀は、それを他の方面から見れば、人間の道德的陶冶に歸するのである。彼は、かくの如く、先天



的の性能を發展せしめた有徳の人間を以て雄辯家と認めた。雄辯家とは、畢竟、有徳の人を意味する。單に辯舌の巧妙な人を指すものではない。徳は本、言は末である。徳ありて而して辯舌に長じ、徳と雄辯とを以て國家に奉仕する人、これ即ち眞の雄辯家である。クインチリアヌスは、以上のやうな説を述べて居る。クインチリアヌスは、他の羅馬の學者と同じく、雄辯家の養成を以て具體的な教育の目的としたのであつた。併し、其の雄辯家の性質に至つては、今日のそれと全く相違して居るのである。

**教育の時期** クインチリアヌスは、教育の時期に就いて次のやうに述べた。教育は、兒童の學校入學以前から注意しなければならぬ。眞の雄辯家を養成するには、最も幼少の頃から、保育は勿論、知的陶冶にも注意して行くことが必要である。例へば、記憶の如き、有力な知識の基礎となるものは、幼時から適當にこれを増進する方法を講じなければならぬ。嫁母は、兒童に種々の感化を及ぼすものである。善良なる性質を有し、發音の正しい者を選ばなければならぬ。當時の社會に於ては、一般に七歳を以て學習の初期として居たが、クインチリアヌスは、これに反對した。學習の初期にかゝる制限を設ける必要はない。言葉を話し得るやうになれば、學習せしめてもよい。なるべく早く學習せしめ、七歳以前にアルファベットなどは、教へてしまつた方がよいと言つて居る。クインチリアヌスは、早教育の主張者である。

**教育の方法** クインチリアヌスは、大に兒童本位の教育を唱へた。教師は、先づ兒童の個性を顧みて、それに適當した教育の方法を講じなければならぬ。個性の徴候として、特に記憶力と模倣の才能とに注意することが必要である。たゞ教授のみならず、訓育上に於ても、兒童の個性を顧み、なるべく名譽心を鼓舞して、善良なる性能を發達せしめなければならぬ。以上の如き見地の下に、クインチリアヌスは、極力體罰を排斥した。第一に、體罰は野卑である。兒童を奴隸扱ひにするものである。第二に、叱責しても効果がないうやうな兒童を鞭てば、益々其の悪性を助長せしめるだけのことである。第三に、教師が注意深く監督して居れば、體罰を加へなければならぬやうなことは生じない。以上がクインチリアヌスの體罰排斥の理由であつた。

教科目に關しては、略ぼ希臘のそれを襲用した。即ち最初には讀書及び習字を主とし、次に文法を授け、其の間に音樂・天文學・幾何學及び哲學等を併せて課すべきものとした。最初から希臘語の教授を必要としたのは、獨創的な意見であつた。クインチリアヌスの説によれば、自國語は、幼少の時から自然にこれを學び得る機會をもつて居る。殊更に最初からこれを教へる必要はない。加之、國文學は、みな希臘の文學から發達して來たものである。従つて、國文學の研究は、先づ希臘の文學からはじめなければならぬ。クインチリアヌスが希臘語を第一に教授する必要を認めた理由は、以上のやうな點にあつた。

**教師論** クインチリアヌスは、屢々教師論を述べて居る。教師は、道德的品性が高く、且つ學識が該博でなければならぬ。さうして、常に自ら兒童の模範となり、人格的に感化を與へることが必要である。教師は、兒童に對して親の如き愛情をもたなければならぬ。嚴格に過ぐれば嫌忌せられ、寛容に過ぐれば輕侮せられる。寬嚴其の中庸を得なければならぬ。兒童の過失に對して憤怒の情を漏らしたり、又は、矯正すべき過失を默過したりすることは、何れも教師の心得に反して居る。兒童の質問には、必ず答へ、質問を發せざる兒童には、教師が發問しなければならぬ。兒童の成績を賞揚することは大に必要である。併し、あまりにそれを褒め過ぎてはいけぬ。教師にとつて最



も大切な心がけは、児童の個性に注意し、これに適應した教育を施し、其の性能を十分に發達せしめることである。

クインチリアヌスは、初年級の教師の責任の特に重大なことを認めた。初年級に於て、教授の方法を誤れば、児童は、後に至つて二重の苦痛を受けなければならない。即ち、既得のものを除去すると共に、新しいものを收得しなければならぬからである。故に、初年級の教授には、最も熟練な教師を用ふることが必要であると云つて居る。

**教育の場所** クインチリアヌスは、教育の場所を論じ、家庭よりも學校を優れるものとした。家庭教育は個人教育、學校教育は共同教育である。個人教育の是認者は、教師が一人の児童に全體の注意を集める利益を擧げる。併し、一人の児童をかくの如く活動せしめる必要はない。却つて、これは、児童を過勞せしめ、獨立心の發達を妨げる。且つまた共同教育によれば、比較的良教師を得やすいのみならず、児童をして公共生活に慣れしめる便宜がある。以上の如き理由によつて、クインチリアヌスは、學校教育に賛成した。併しながら、彼は、學校にあまり多くの生徒を收容することに反對し、一學級の生徒數等をも適當に制限する必要を認めた。

**クインチリアヌスの教育説に對する批判** クインチリアヌスの教育説は、羅馬時代の教育説の中で、最も詳しく、且つ最もまとまつたものであつた。其の學説は、未だ系統的教育學の體系をなして居るものとは云はれない。併しながら、今日の世の中から見ても、頗る傾聽に値する多くの卓見を含んで居る。

其の長所と認むべきものは、第一、教育に關する諸問題を最も組織的に詳論した事、第二、實際的に活動し得る有爲な人物の養成を教育の目的としたこと、第三、國家主義・理性主義の教育を唱へ、これに個性尊重の思想を巧みに調和せしめたること、第四、教育の時期を學校入學以前に溯らしめ、早教育を主張したること、第五、教育上に於ける教師の地位を重んじ、教師の心得を詳細に論じたこと、第六、児童の個性を尊重し、これに適應せる教育の必要を主張すること等である。

また其の短所と認むべきものは、第一に教育をたゞ自由民のみに限れることである。これは、クインチリアヌスばかりではない。希臘・羅馬の教育界に於ける共通の現象であつた。第二には其の根本思想たる理性主義が今日の學説から見て妥當でないことである。人間が天賦の理性を有するものと見るのは、今日の學説に反して居る。これも亦クインチリアヌスの教育説のみに存する缺點ではない。其の他にも尙ほ幾多の缺點はあらう。併し、それ等は、何れも羅馬の教育思想及び實際教育に共通せるものであるから、省略することにした。



## 第二篇 中世教育史

通常、西洋史上に於て、中世と稱するは、西曆紀元四七六年、西羅馬帝國の滅亡前後より、西曆紀元一四五三年、東羅馬帝國の滅亡に至る約千年間を云ふのである。これには種々の異論もある。定説と認むべきものはない。

### 第一章 中世期の國情と文化

#### 第一節 中世期に於ける諸國の盛衰

**ゲルマニヤ種族の移動** 羅馬帝國の北方には、早くからゲルマニヤ種族が住んで居た。此の蠻族は、其の性質が慍悍で戦闘好きであつた。人口が増加するに従ひ、だんだんと南下して、屢々羅馬帝國の北境を脅やかした。然るに、第一世紀の末頃、亞細亞の匈奴種族が漢人の襲撃を受けた時、其の一部の者は、中央亞細亞から歐洲の東南部に侵入した。こゝに於て、ゲルマニヤ種族の一部たる西ゴート人は、南に逃げて羅馬皇帝の許可を受け、其の領土の中に移住した。これがゲルマニヤ種族移動の始めてある。羅馬帝國が東西に分離した時、西ゴートの酋長アラルリックは、兩國の軋轢に乗じて羅馬市を掠めた。これよりゲルマニヤ種族は、續々羅馬の領内に侵入し、羅馬人とゲルマニヤ人と間に争闘が絶えないやうになつた。紀元四七六年、西羅馬帝國は、ゲルマニヤ出身の傭兵の爲めに實權を奪はれ、

名實ともに滅びてしまつたのである。

**サラセンの興起** 東羅馬帝國は、分立以來一盛一衰の状態を續けて居たが、サラセンがアラビヤに興るに及び、腹背に強敵を受ける有様に陥つた。即ち東はサラセンに侵略され、マジヤール人及びアヴァール人等から絶えず攻撃せられるやうになつた。サラセンは、アラビヤの住民である。セム種族に屬して居る。多神教を奉ずる半開の民族であつて、遊牧・隊商等を業として居た。英傑マホメットが其の種族の中から出て、イスラム教を唱へ、宗教の力によつて民族を統一してから、國力が急に伸長して、一時は、地中海沿岸の一大強國となつたが、マホメットの死後、其の國は、東西のサラセン教主國に分裂し、雙ふて航海及び貿易を奨勵し、學藝を保護したので、サラセン文化の黄金時代となつた。かくの如く隆盛を極めた東西サラセン教主國も、其の後次第に國威が衰へ、附近の諸國から蠶食せられて遂に滅亡した。

**フランクの活動** ゲルマニヤ種族の一派にフランクと云ふものがあつた。西羅馬帝國の衰亡に乗じ、他のゲルマニヤ種族と共に、ガリヤに侵入した。其の中にクロヴィスといふ酋長が出て、ガリヤの北半を征服し、こゝにフランク王國を建設した。クロヴィスの歿後、次第に國王の權力が官宰に移り、遂にビピンといふ者が王を廢して自立した。ビピンの子チャールス大帝の時に至り、近傍の諸王國を平定し、其の領地が非常に擴大した。此の時代には、西歐羅巴の文化が著るしく進歩した。チャールスの歿後、相續の争が起つて、フランク王國は、東フランク・西フランク・イタリアの三王國に分裂した。其の三王國は、各々特殊の發達を遂げて、現今の獨逸・佛蘭西・伊太利の諸國となつたのである。



**ノルマンの活動** ノルマンも亦ゲルマニヤ種族の一派である。もとスカンデナヴィヤ半島及びデンマルク地方に住み、海賊となつて近海を荒して居た。チャールス大帝の頃から、ノルマンは、屢々フランク王国を侵略した。大帝の死後、西フランク王国は、遂にノルマンの侵略を防ぎかねて、これと和を講じ、其の酋長ロロにセイヌ河の下流一帯の北方を與へ、ノルマンディー侯に封じた。またデンマルク地方のノルマンは、頼りにイングランドを侵した。イングランド王アルフレッド大王も亦ノルマン撃退の困難を知り、内地に移住することを許した。其の後、ノルマンのカヌート大王は、遂にイングランド全土を併合したが、二十餘年を経て、王族エドワードの爲めに破られた。これからアングロサクソンとノルマンとの間には、絶えず争闘が行はれたが、遂に兩人種の血統や言語や風俗等がよく融和して今日の英國となつたのである。またノルマンの一派に屬するルス人の酋長ルーリックは、スウェーデンから、今のロシアの西北部に侵入した。さうして、其の地方のスラブ人を征服して、ロシア帝國の基を開いたのである。

**トルコの勃興** オスマン・トルコ人は、カスピ海の東岸に往んで居たトルコ人の一派である。偶々東方に興つた蒙古人に追はれて小亞細亞に移つたが、酋長オスマンの時に至り、隣國を征服して小王国を建てた。オスマンの孫ムラッド一世は、東羅馬帝國の衰微に乗じて、これを侵略し、アドリヤノールを取つて、其處に都を移した。これからトルコと東羅馬帝國との間に種々の複雑な交渉を生じたが、一四五三年、トルコのマホメット二世は、コンスタンチノールを陥れて、東羅馬帝國を滅ぼした。

## 第二節 基督教の起原と其の發達

中世期の思想界及び實際社會に、最も大なる影響を及ぼしたものは基督教である。故に、中世期の教育を知らうとする者が、先づ基督教の起原・發達及び其の思想の大綱に通ずるは、極めて必要な事柄であらうと思ふ。

### 基督教の起原

基督教は、ユダヤ人イエス・キリストの唱へた宗教である。イエスは、アウグスツス大帝の治世に、イエルサレム附近の大工の家に生れた。幼時の経歴は明かでない。三十歳の頃、自らキリスト(救世主の意)と

稱し、新らしき宗教を唱へて多くの信者を得た。然るに、偏狭なユダヤ教徒の爲めに惡まれて讒訴され、羅馬の代官に捕へられて、十字架の上に非業の死を遂げたのである。

### 基督教の普及

イエス・キリストの歿後、其の弟子は、四方に散じて基督教を傳導した。特に、高弟ペテロ及びパウロ等が、羅馬にこれを布教するに及んで、基督教は、次第に歐洲の天地に傳播するやうになつた。基督教は、一神教に屬して居る、唯一の天帝以外に何

第二十圖



トスリキ

ものをも崇拜しない。地上の主權者の如きものの崇拜は、絶対にこれを拒絶した。従つて、歴代の羅馬皇帝は治安を妨害するものありとして、大にこれを迫害したが、迫害すればする程益々其の信者を増した。コンスタンチヌス大帝の時代に至りては、遂に侮り難い勢力となつたので、大帝は、社會の大勢に鑑み、これを公認するに至つた。更にテ



オドシウス大帝の時には、基督教を信ぜざる者を嚴罰する命令が下された。かくして、基督教は、羅馬の人心を征服し、西洋文化の一大基礎となり、政治・道徳・學術・藝術其の他あらゆる方面に大なる影響を與へた。

### 羅馬法王の起原と其の勢力

羅馬帝國内には、初め羅馬、コンスタンチノーブル、アレクサンドリヤ、アン

チオキヤ、イエルサレム等の各地に基督教の本山があつて、其の本山の管長が各管内の教會を統轄して居た。其の中でもペテロ及びパウロが開いた羅馬の本山は、信者から最も尊敬された。管長にも代々英傑が現はれて、遂には他の本山の首位に立つやうになつた。かくして、其の管長の稱號たるパパーには、地上に於ける神の代表者即ち法王の意味を含むに至つた。これが羅馬法王の起原である。羅馬帝國がサラセン及び北歐の蠻族等から侵略され、腹背に敵を受けて悩んで居た時、羅馬法王は、これに乗じて政治的方面に其の勢力を擴張したので、これから事毎に皇帝と法王との間に議論を生ずるやうになつた。ヘンリー四世の時代には、法王グレゴリー七世と大衝突を生じたが、法王の勢力に敵することが出来ず、皇帝は、法王に哀願して漸く其の破門を許された程であつた。かくして、羅馬教會の勢力は次第に高まり、皇帝は、常に法王から壓迫を受けるやうになつたが、十字軍の失敗以來、法王に對する世人の尊敬心は漸く薄くなり、羅馬教會も次第に衰微した。

### 第三節 基督教の教義

#### 基督教の教義

基督教は、猶太教に其の源を發して居る。猶太教の長所を探り、其の弊害を除き去つて更生した一神教である。基督教の教義に於ては、造物主たる唯一神を萬民の父とした。萬民は、悉く此の天父の愛を受ける

兄弟である。故に、天父が我等を愛する如く、我等は、天父を愛し、且つ同胞たるすべての人類を愛しなければならぬ。然るに、我等は、天父を忘れて罪惡に向つて居る。須らく悔ひ改めて天父に歸らなければならない。これがイエス・キリストの説いた基督教の要旨である。

基督教は、希臘固有の思想と全く全の基調を異にして居た。希臘の思想は、自然生活・現實生活を重んじた。これに反して、基督教は、超自然の彼岸にのみ憧がれ、現實生活を卑しんだ。また希臘思想に於ては、幸福を以て人生の目的とし、自己の理想を實現することによつて、此の目的を達する方法とした。然るに、基督教に於ては、寧ろ自己を否定し、神命に服従することを人生の目的とした。また希臘思想が主知説なるに反し、基督教は、全く主情意説に立脚して居た。かくの如く、其の思想の基調が既に相反して居る。其の道徳の如きも亦自ら相違せざるを得ない。希臘に於ては、知慧・勇氣・節制・正義の諸徳を最も重んじた。これを希臘の四主徳と稱して居る。然るに、基督教に於ては、これ等の諸徳を悉く排斥して、愛・信・望等の諸徳を擧げた。これが基督教の三主徳である。

#### 希臘神學の成立

基督教の創立者イエス・キリストは、單なる信仰の鼓吹者に過ぎない。最初の基督教は、

他の多くの宗教の如く、單なる信仰に止まつて居た。併しながら、此の教義が羅馬に入り、希臘の思想と戦つてこれを征服するに當つては、従前の如く、單なる宗教の儘に進むことが出来なかつた。こゝに於て、基督教の教義を哲學的に組織すること、換言すれば、基督教の信仰に學術的の根據を與へやうと試みる者が現はれた。かくの如き試みは、二世紀以後に至りて着々と進み、遂に希臘神學の成立を見るやうになつたのである。基督教徒が其の信仰に學術的根據を與へやうとするに當り、先づ着眼したのは、希臘の哲學であつた。蓋し、希臘の哲學は、當時の世の中に於け



る組織的な知識の最高標準となつて居た。これを探つて其の信仰を合理化しようとするのは、極めて自然な考へであつた。最初、基督教義の組織に努めた人々を總稱して、哲學史上では、教父哲學者と云つて居る。此の教父哲學者は、多年の間基督教の思想を詳細に研究し、先づ基督教徒の間に異論の多い諸問題を統一確定した。此の教義を統一確定するまでには、屢々宗教會議が開かれ、かなり多くの歳月を費やしたのである。教父哲學者によつて、基督教の教義が確定したので、「基督教徒は、何を信すればよいか。」と云ふ問題は、こゝに解決を告げたが、まだ外に残つて居る問題がある。それは教父哲學者が統一した基督教の教義は、果して道理に叶つて居るかどうかと云ふ問題である。よつて、こゝにまた教父哲學者によつて確定した基督教の教義を哲學的に論證しようとする一派の學者が現はれた。これをスコラ哲學者と稱して居る。此のスコラ哲學者によつて、基督教の神學ははじめて大成したのである。スコラ哲學者の中からは、トーマス・アクイナスの如き優れた學者が輩出して、中世期の思想界に燦爛たる光輝を添へた。従つて、スコラ哲學は、一時歐洲の天地を風靡する程の勢力を生じたが、中世期末に至つて、思想界に種々の新しい運動が起るに及んで、自然に衰微してしまつた。

## 第二章 中世期の教育

### 第一節 中世期の社會と教育

中世期の社會 中世期には、社會の組織が頗る複雑になつて來た。此の時代には、諸外國相互間の交通が頻繁

になり、民族の盛衰消長が非常に著るしかつた。加之、基督教の如き從來の思想と全く其の基調を異にせる新思想が普及して、人心を征服した。これ等の事情は、何れもみな社會の組織を複雑ならしめる原因であつた。就中、基督教が社會組織の上に及ぼした影響は、極めて著るしいものであつた。

中世期の社會は、一面に於て希臘・羅馬の社會に類似し、他面に於て、全くそれと趣を異にするものであつた。希臘・羅馬に於ては、社會組織が自然的に成立した。或る民族が他の民族を征服して、征服したものは自由民となり、征服せられたものは奴隸となり、こゝに嚴然たる階級制度の社會が成立する。これが最も最初の社會状態であつた。かくの如き社會に於ては、現世の活動が最も重んぜられた。現實主義が社會生活の根柢をなして居たのである。然るに、中世期に入りては、基督教の信仰が次第に民心を支配するやうになつた。基督教は、「人類の平等を主唱する未來主義の宗教である。かくの如き思想の影響を蒙れば、人間の社會生活も亦自ら一變せざるを得ない。即ち社會の各方面に宗教的色彩と云ふものが著るしく濃厚になつた來たのである。從來は、たゞ政治的の統治關係が階級制度の基礎になつた居たが、新に宗教的關係から一種の階級を生ずるやうになつた。即ち宗教家と稱する精神的の支配者が現はれ、特別の地位を占め、次第に其の勢力を高めて來たのである。

中世期の社會に於ける特殊の事實と認むべきものは、騎士階級の發生である。中世の騎士 (Knight) は、封建制度の發達に伴つて生じた特殊の階級であつた。フランク王國では、サラセンの侵入を防ぐために、其の領地を諸臣に分與して、外敵に對する防備を委任した。多くの君主は、何れもみなこれに倣つて、其の領地を臣下に分與した。而して、臣下の者は、また其の與へられた封土を諸臣に分與した。かくして連鎖的に君臣の關係を結び、君主は臣下を



愛護し、臣下は君主に忠誠を盡すと云ふやうな慣例を生じて來た。これが即ち中世期の封建制度である。此の制度は、第十世紀の頃略ぼ完備し、それから五百年の間歐洲諸國に行はれて居た。かくの如き封建制度に於ては、兵役と納税の義務を臣下の者が負はなければならなかつた。而して、軍務に服する者と、財政を助ける者とが別々になつた。所謂兵農の別を生じたのである。かくして、こゝに騎士の階級が発生し、其の階級の中に騎士道と云ふものが發生して來た。此の騎士道は、ゲルマニヤ種族固有の習慣と基督教の精神とが結合して成れるものであつた。

中世期の社會を回顧して、尙ほ一つ特筆しなければならぬのは、都市の發達と云ふことであつた。ゲルマニヤ種族は、もと狩獵や牧畜を生業として居た。都市の生活には慣れない蠻民であつた。各地の都市に侵入しては、これを亂暴に破壊した。然るに、多年の歲月を経る間には、漸く都市の生活に慣れ、商工業を營みてこれを家業とするやうになつた。こゝに於て、西歐羅巴の各地には都市が次第に發達して來た。最も最初に發達したのは、十字軍の時に莫大の利益を得た伊太利の各都市即ちヴェニス、ジェノア、フロレンツ等であつた。これに次いで、ハンブルグ、ブレーメン、リューベック等、獨逸の各都市が發達した。これ等の各都市は、何れもみな獨逸皇帝の支配を受けて居たが、後に至りみな自治權を得て、事實上の獨立共和國となつたのである。

#### 中世期教育の特質

中世期の思想界は、基督教の影響を受けて、希臘・羅馬の思想と全く異なる方面に發展した。基督教は超自然主義の上に成り立つて居る。人間の自然生活・現實生活を賤し、かくの如き生活を脱却して、超自然的彼岸に到達することを理想とした。故に、基督教に於ては、禁欲生活を重んじた。身體を以て欲望の源とし、精神的修養により、此の欲望を抑壓しなければならぬものと考へた。従つて、希臘・羅馬の社會に於て、最も重要な地位

を占めて居た體育の如きものは、全く輕視せられるやうになつた。これは、一般の思想が教育上に及ぼした顯著な事實の一つであつた。現實主義に立脚せる希臘・羅馬に於ては、市民の生活に必要な知識や技能を重んじた。然るに、中世期に及んでは、かくの如き教科を全然排斥し、只管宗教的生活に入る教養のみに力を注いだ。殊に、羅馬の人々に大切な資格となつて居た雄辯術の如きものは、全く不必要と認められ、却つて其の反對に沈黙考が貴ばれるやうになつた。これも亦一般の思想が及ぼした教育上の特殊現象であつた。

オットー・ウイルマンは、中世教育の特質として三個條を擧げた。其の第一は、基督教的完全に達することであつた。基督教的完全に達すること、それは、完全なる基督教徒となることである。基督教徒としての心情を陶冶すること、即ち神を信仰し、博愛慈善のために努力することに外ならない。第二には、精神の集中と云ふことを擧げた。希臘・羅馬の教育は、多方面に興味をもたしめることに力めた。然るに、中世期には、たゞ心を専らにして神を信じ且つ敬愛することを教育の要諦とした。即ち神と云ふ一の中心點に精神を集注せしめたことが、中世期の教育の特質の一つであつたと云ふのである。第三には、教權によつて教育を嚴重に監督したことを擧げた。教育と云ふものは、たゞ神に對して敬虔であり従順である人間を養成するためにのみ其の必要を認められた。中世期に於ては、自由研究の如きものは、全くこれを抑制せられ、教授と云へば、たゞ基督教の精神を傳へた文書の註釋のみに限られてしまつた。これが中世期の教育の特質の一つであると云ふのである。ウイルマンの説は、大體に於て妥當な見解であらう。中世期の教育の特質は、これを更に約言すれば、宗教的の一語に盡きてしまふのである。

#### 中世期の教育に對する批判

中世期の教育は、或る點から見ると、其の長短が希臘・羅馬の教育と相反して居



る。併し、こゝには希臘・羅馬の教育と中世期の教育とを比較しない。たゞ中世期の教育の長所と短所とを極めて總括的に約説して置くだけにする。

中世期の教育は、宗教教育である。其の長所も短所も此の宗教教育其のものに關係して居る。先づ其の長所と認むべきものを列挙して見れば、第一、宗教的人格の養成を教育の理想とし、内面的の精神修養を重んじたことであつた。現在生活を本位とする教育に比すれば、其の理想が遙かに高遠である。第二、信仰の價値を認め、享樂を排し、欲望の抑壓を徳育の根本方針としたことであつた。これには缺點も亦伴つて居るが、教育上に於ける効果も認めなければならぬ。第三、人類愛が教育活動の根柢となつたことであつた。基督教は、すべての人間をみな神の子と視た。従つて、自由民と奴隸と云ふやうな差別を設けず、平等に教育すべきものとした。これは、中世期の教育の長所中に於ても、特筆すべきものである。

次に、中世期の教育の短所の方面を列挙すると、第一、教育の理想とした人格の觀念が偏狹であつた。中世期の教育は、専ら宗教的人格陶冶を以て其の理想とした。併しながら、宗教的人格のみを完全な人格と認めることは出来ない。第二、信仰を中心とした修養を重んじ過ぎた爲めに、其の他の方面の陶冶が十分に出来なかつた。體育の如き、社會生活に必要な種々の知識即ち政治及び法律等の諸學科の如き、著るしく輕視せられた。第三、欲望の抑壓のみを強ひた爲めに、人間の活動力を鈍らせ、人生に生氣を失はしめた。これも亦禁欲主義を根柢とする教育の常に陥る弊害である。第四、教權が教會によつて支配せられるやうになつた。これには種々の弊害が伴つた。其の結果、教育を萎靡せしめたことも尠なくない。

## 第二節 僧庵學校

基督教の普及に伴ひ、其の宣教師とならうとする者も多くなつた。それ等の者を教育する適當な機關の必要を生じた。此の要求に應じて現はれたものが僧庵學校 (Monastic School) である。

**僧庵學校の起原** 僧庵學校は、僧庵の附屬として設けられた學校である。故に、僧庵學校の起原を知るには、先づ僧庵のことを明かにして置かなければならない。僧庵と云ふのは、基督教徒が集まつて、嚴格な戒律の下に禁欲生活をなし、難行苦行を積んで正しい生命を得やうとした修養所である。もとこれは基督教に關係のないものであつた。東方から傳はり、紀元第一世紀から第二世紀へかけて、小亞細亞及びエチプトに於て大に榮え、それが遂に基督教徒の間に入り込んで來たのである。僧庵には澤山の修行者が集まり、それぞれみな別々の室に分居して黙想に耽つた。食事の時や、祈禱の時や、會議の時には一堂に集まつた。かくの如き僧庵生活は、エチプトから希臘に傳はり、だんだんと西部歐羅巴の方面に廣がつて行つた。禁欲主義を守ること、獨身生活をして純潔に其の身を保つこと、總べての財産を抛棄して貧困な生活に甘んずること、以上の命令に對して絶対的服従をなすこと等が僧庵生活に於て最も重んぜられた道徳であつた。僧庵の生活がだんだんと進歩するに従ひ、其の中に學校を附設する者が出來た。これが即ち僧庵學校の起りである。紀元五二九年、羅馬の貴族ベネチクトは、社會の腐敗墮落を厭ひ、カシノ山中に僧庵を營み、且つ少年教育の端を開いた。これ即ち僧庵學校の嚆矢である。第九世紀に至つては、總べての僧庵が學校を附設して附近の兒童を收容するやうになつた。



**僧庵學校の制度** 僧庵學校の制度を見るに、最初は、將來僧庵生活をなす者のみを入學せしめたが、後には正員と外員とを分ち、他日僧庵生活をしようとする者を正員とし、普通の入學希望者を外員として入學を許した。僧庵學校の教師は、何れもみな僧侶のみであつた。教科目は、時代によつて變遷して居る。最初は、専ら僧庵生活の準備となるもののみを授けた。其の教科の範圍が狭く、且つ其の程度も低かつた。然るに、後には種々の教科目加はつた。ベネチクト派の全盛期に及んでは、希臘語や羅馬語も加はり、且つ七自由教科も加はるやうになつた。七自由教科とは、文法・修辭・辯證法・算術・幾何・天文・音樂の七科を云ふのである。前の三科を三學と云ひ、後の四科を四術として區別して居る者もある。

**僧庵學校の實際教育** 僧庵學校の教授は、主として問答法によつて行はれた。訓練は、頗る嚴重であつた。もとの學校は、僧庵生活の準備教育を施すのが目的であつたから、訓練上の根本方針を決したものは、僧庵生活上に必要な諸道德であつた。即ち前にも述べた通り、禁欲・純潔・自足・從順等の諸徳の涵養を以て訓練の主眼點としたのである。僧庵學校に於ては、これ等の諸徳を陶冶するために、嚴格な訓練を行つた。體罰の如きは、寧ろ訓練上の有效な手段の一つと認められた。體罰は惡魔を追ひ出す道と稱せられた。さうして徳育上にも知育上にも用ひられた。

**カール大帝と僧庵學校** 僧庵及び寺院を保護し、僧庵學校の發達を助けたのは、西羅馬帝國の再興者カール大帝 (Carulus Magnus, 742—814) である。カール大帝は、基督教の獎勵者であり、同時に學術の獎勵者であつた。中世期の文化史上にも教育史上にも其の名を逸することの出来ない名君である。大帝は、各僧庵に對して學校を附設し、僧侶のみならず、一般の俗人も入學せしめるやうに命じ、また官吏を特派して、各學校を監督し、教育の進歩發

展に力を盡した。

カール大帝は、英國ヨークの監督學校長アルクインを招聘して教育顧問とし、當時、非常に衰頹して居た宮廷學校

を興し、皇后や皇子及び皇女等と共に自ら學問を勵んだ。また八〇二年には、全國に命令して、其の子女を必ず學校に學ばしめるように訓へた。即ちこれは義務教育制度の實施である。大帝の命令は、遂に其の實施を見るに至らなかつたが、教育史上に特筆すべき記録たるを失はない。

### 第三節 騎士の教育

僧庵の教育



第三十圖

**騎士と騎士道** 中世期に騎士と稱する特殊の階級を生じて來たことは、既にこれを略述して置いた。騎士の階級の發生に伴ひ、其の階級の間には、自ら一種の道德が成り立つた。これを騎士道と稱して居る。騎士道の理想は、神の爲め祖國の爲めに身命を賭して戦ふことを辭せぬ勇敢にして義侠心に富めぬ武人たるにあつた。故に、騎士道に於ては、身體の壯健なること、精神の高潔なること、名譽を重んずること等を最も尊んだ。これ

等の點は、我が國の武士道によく似て居る。たゞ我が國の武士道と異なるのは、婦人を特別に尊敬する習慣であつた。後に述べる通り、騎士道では、或る一定の期間を婦人に奉仕して禮儀作法を學ぶことになつて居た。平時に於ては、



山野に狩獵し、或は闘武會に出席したりして武術を練磨し、戦時に於ては、君主又は教會の爲めに戦ふことが騎士の任務であつた。かくの如き特殊な習俗と道徳とを有する騎士の階級には、自らまた特殊な教育を生じて來たのであつた。次に述べる騎士の教育がこれである。

### 騎士の教育

騎士の教育は、三期に分れて居た。第一期は、出生後七八歳まで、第二期は、七八歳より十四五歳まで、第三期は、十四五歳より二十一歳までである。

第一期の教育は、専ら家庭に於て行はれた。即ちこれは家庭教育の時期である。家庭教育の中心は、其の母であつた。兒童は、母から種々の教訓を與へられた。身體を壯健にすることの必要及び其の方法、長上に對して従順なるべきこと等は、特に母が其の子に力説したものであつた。此の家庭教育に於て、兒童は道徳的の陶冶と共に宗教的の教育を與へられたのである。

第二期の教育は、他の君主又は其の他の貴人の家に於



圖 四十 第



圖 五十 第  
騎士兒童の遊戯

て行はれた。兒童は、七歳になると、自分の家を離れ、地位あり名望ある他の家に送られ、騎士として必要な行儀作法を見習ひ、或は學問や武藝を會得することになつて居た。さうして、此の第二期に於ては、主として其の夫人に奉

仕し、種々の行儀作法や又は將棋其の他の遊戯等を學び、時々城外に出て相撲や馬術の練習をした。此の時代を侍童と稱した。

第三期の教育は、第二期の教育の繼續である。十四五歳になると、夫人の許を離れて主人に奉仕するのであつた。主人に仕へて其の命令を守り、日常の雜用に服しながら、武器の操縦法や武術の一斑を實地に理解することになつて居た。平時には狩獵や擬戰に伴ひ、戦時には戰場に隨從させ、騎士に最も必要な種々の禮儀作法と實戦上の技能とを十分に習得せしめるのが、此の時期に於ける教育の要諦であつた。騎馬・水泳・射術・擊劍・遊獵・將棋・作詩を騎士の七藝と名づけた。此の時代に於ける教科の内容をこれによつて知ることが出来る。此の時代を稱して從士と云つた。

かくして二十一歳に達すれば、一定の嚴肅な儀式の下に、「寺院を衛りて、悪人を責め、僧侶を尊敬し、婦人及び弱者を保護し、國家の安寧を維持し、同胞の爲めに血を流すことを辭せざらん。」と云ふ誓を立て、初めて騎士の列に加はることになつて居た。

### 騎士の女子教育

騎士道に於ては、婦人を尊敬することを最も根本的な道徳の一に數へて居た。婦人尊敬の風習は、自ら女子教育にも注意せしめた。概して云へば、女子の教育は、男子の教育に比して、知育の方面に於て劣り、情育の方面に於て優つて居た。女子の教育の中心教科として重んぜられたのは、家事・家政・音樂及び對話等であつた。殊に、其の中でも、裁縫及び手藝等の學科は、女子に最も必要なものと認められた。音樂の中には、唱歌や管絃樂等が含まれて居た。讚美歌を唄ふことは、唱歌の中の大部分を占めた。音樂も亦女子の修むべき大切な學科と認められ



た。女子の中には、七自由教科等に通じて居る者もあつたが、極めて罕な例に屬して居た。故に、知育の點に於ては、餘り高級なものと云はれない。併し情操陶冶の方面は非常に進んで居た。騎士の全盛時代には、品性が高潔で見識があり、多くの騎士をして中心から敬服せしめた貴夫人も少なくなかつたとのことである。

#### 第四節 市民の教育

**都市の發達と市民教育の勃興** 中世期教育の特色は、前にも述べた通り、宗教的と云ふことであつた。教育は、たゞ宗教家となるもののみ必要なものであるやうに思はれて居た。一般の民衆に社會生活上の知能を授けると云ふ世俗的教育は、全く輕視せられて居た。たゞ僧庵學校等の一部に於て、僅に少數の者に平易な學藝の初歩を授けたのみであつた。希臘・羅馬の教育が國民生活乃至社會的活動を以て、教育の目的を定める根本的の要件としたのと全然其の趣を異にして居る。併し、中世期に於ても、騎士の階級の發生と共に騎士の教育が起り、都市の發達と共に都市教育の必要を感じるやうになり、ここに、教育の傾向は、漸く宗教的方面から世俗的方面に轉回するに至つたのである。

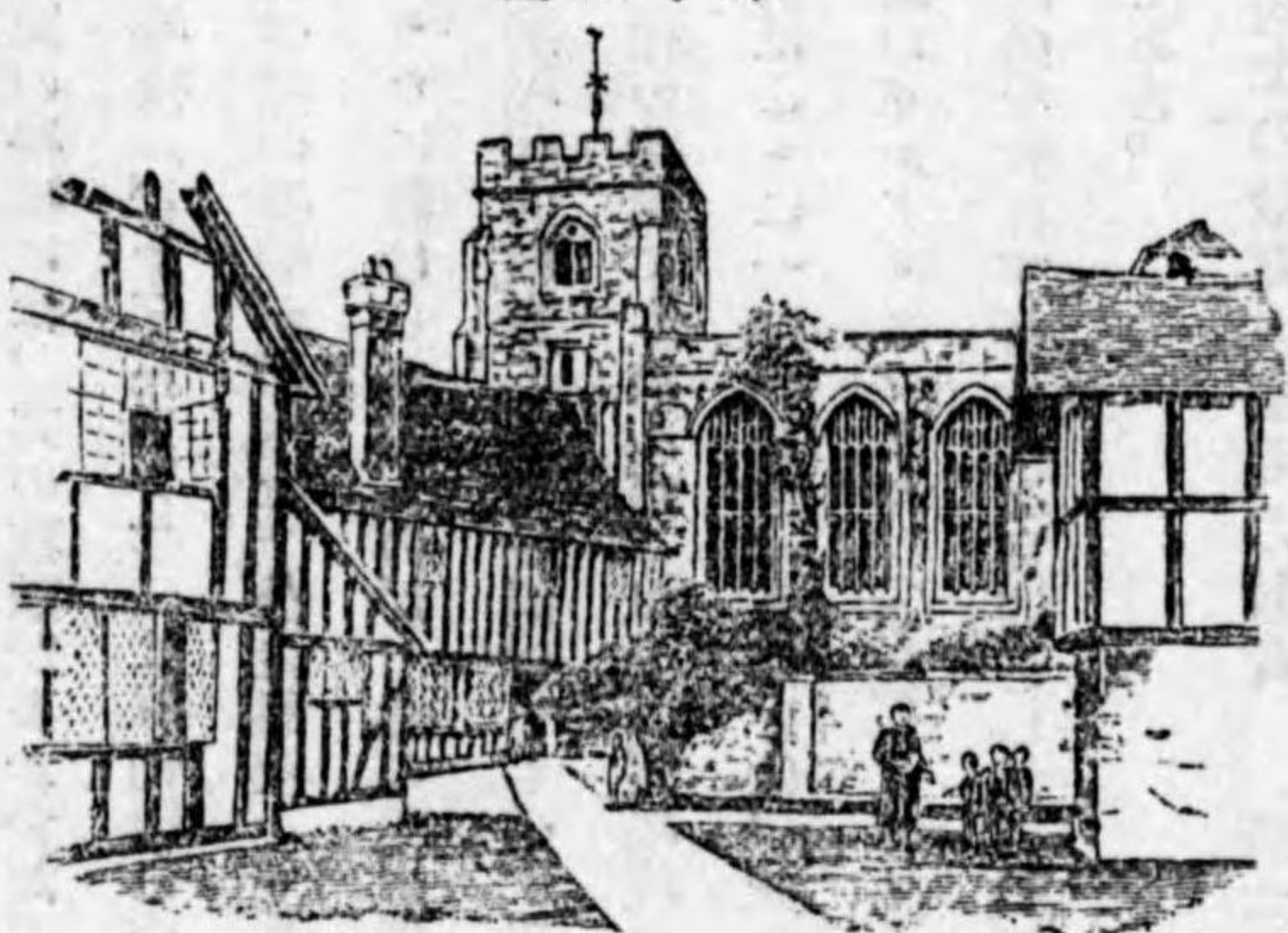
中世期に於ける都市の發達に就いては、既にこれを述べて置いた。都市の發達は、ゲルマニヤ種族の文化的發展を意味するものである。従來は、たゞ狩獵や牧畜のみを業として居た蠻族が文化の光りに照らされて、次第に市民生活を營み、商工業に従事するやうになつたから、ここに都市の發達と云ふ一の新らしい社會現象を生ずるに至つたのである。

都市が發達して、市民の生活を營むやうになると、市民としての教養が必要になつて來る。即ち市民として生活するには、種々の知識や技能が必要になつて來る。そこで、市民にそれ等の知識や技能を授ける教育の要求となる。かくして、ここに市民教育の勃興となつたのである。

#### 市民教育の實際

中世期末に至つて次第に發展した各都市の市民教育は、希臘・羅馬の教育と其の精神を同じふし、専ら社會生活上に必要な知識を授けるのが目的であつた。市民教育は、決して中世期特有の宗教的教育を排斥するものでなかつた。従來の宗教學校には、新興都市の公人として生活するに必要な陶冶が缺けて居たから、其の缺陷を補正する爲めに生じて來たのであつた。市民教育の機關には、種々の學校が含まれて居るが、大體から云へば、何れもみな讀方・書方等を主とし、これに羅旬語等を加へて居た。其の組織や教授・訓練等の方法は、殆ど宗教學校と同じものであつた。當時はまだ印刷術が進歩せず、書物が乏しかつた。其の價格は頗る高價でこれを求むることも容易ではなかつた。従つて、教授上にも教科書等を使用せず、譜記・筆記等の方法によつて、教師から新知識を注入せられた。訓練は、極めて嚴格であつた。體罰の如きは、訓練上に最も必要な手段となつて居た。祝祭日等には、牢獄から免れるやうに、學校生活を離れて、

第六十圖



徒弟の學校



演劇會を催し、種々の遊戯に耽ることを喜んだ。一般に社會が學校生徒を優遇したので、怠惰にして放縱不規律な生活が多くなり、良民が迷惑を感じたことさへもあつた。

市民の學校には、其の種類が多かつた。羅甸學校・公衆學校・文法學校等は、特に其の中の著名なものであつた。羅甸學校 (Latin School) は羅甸語を中心として、讀書・文法・宗教等を課した。一二六二年、リュイベックに初めて此の種の學校が出来た。公衆學校 (Public School) は、羅甸學校と略ぼ内容を同じふして居た。一二六七年、ブレスラウに設けられたものが、此の種の學校の嚆矢である。文法學校 (Grammar School) は、前の二者よりも、尙ほ一層現代的教育に重きを置けるもの、學科は、讀方・書方・作文・算術等を主とした。此の學校は、先づ英國に起つて、他の諸國にも及んだ。以上の諸學校は、何れもみな歐洲諸國に於ける今日の中等學校の基礎になつたのである。尙ほこゝに一つ注目すべきことは、此の時代の終りに至つて、下層階級に教育を施す學校が現はれたことである。英國のギルド・スクール (Guild School) 即ち組合學校と稱するのは、それに屬して居る。此の學校は、専ら組合内の徒弟を教育することを目的とした。獨逸や伊太利や白耳義等にも、同じ性質の學校が次第に普及するやうになつたのである。

#### 騎士の教育と市民の教育

騎士の教育と市民の教育とは、何れもみな現實世界に於ける有能な人間を養成することを目的とする點に於て、其の性質を等しふして居る。かくの如き教育の目的上から見ると、基督教の教育に反し、希臘・羅馬の教育と同じ傳統に立つものである。併しながら、騎士の教育も市民の教育も基督教を排斥するものはなかつた。基督教の精神の上に現實的な活動をしようとする人物の養成を其の主眼とした。希臘・羅馬の思想と基督

教の精神とが教育上に於て結合したのである。

騎士の教育、市民の教育、何れもみな基督教の精神の上に、有爲な社會人の養成を理想とした。併しながら、騎士の生活と市民の生活とは、大に其の内容を異にして居た。従つて、同じく社會人と云ふも、兩者の期待する所が相違した。騎士の教育と市民の教育とが根本的に性質を異にするやうになつたのは、此の社會生活の相違に原因するものである。騎士の教育は武斷主義、市民の教育は民衆主義によつて行はれた。前者に於ては、戰爭に必要な知能が教科の内容となり、後者に於ては、市民の生活即ち商工業上に必要な常識が主要教科となつたのである。

### 第五節 大學教育

#### 大學の起原

高等學術の研究機關となり、或はまた社會文化の指導機關となつて、中世期の文化に最も偉大な貢獻をしたものは大學である。大學は、もと科學の研究を目的として集まつた熱心な學者や青年の會合に其の起原を發して居る。中世期の歐洲人にかくの如く科學研究の興味を誘發したのは、東方の學問の影響であつた。十字軍によつて歐羅巴各國と東方諸國の交通が開けるやうになり、基督教徒は、アラビヤに發達した科學に接し、且つ東方人の學究的態度に動かされたのである。最初は、政府と何等の關係もなく、且つ宗教上の束縛をも受けなかつた。最も自由な研究團體であつた。然るに、それが第十二・三世紀頃になると、次第に發達して來て、組織的研究所となり、遂に大學として公認せられるやうになつたのである。而して、これが一般の民衆に對して、精神的の一大勢力を有するに至り、帝王も基督教會も都市もみなこれを其の勢力範圍に入れて、種々の方面に利用しようと考へるやうになつ



た。其中でも特に大學の保護獎勵に力を注いだものは教會であつた。教會に於ては、其の強大な権力と豊富な財産とを以て、或は其の設立を援助し、或はこれに種々の特權を附與したので、第十三世紀以後に於ては、大學と教會の關係が頗る密接になつた。かくして、遂には法王の認可が大學設立の要件となり、其の認可によつて特權を生ずるやうになつた。其の特權の主なるものは、大學の教官に對する公役・税金・寄附金等の免除、大學關係者の犯罪者に對する大學自身の裁判權、學位授與權等であつた。

**著名なる大學** 中世に設立された大學の中、最も著名なるものは、伊太利のサレルノ大學及びボロニヤ大學、佛蘭西の巴里大學、英吉利のオックスフォード大學及びケンブリッジ大學等である。

**サレルノ大學** 伊太利最古の大學である。もとは醫學の研究所であつた。サレルノは、伊太利の南部にある温泉の所在地である。氣候が溫和で、病氣の靜養に最も適して居る。故に、此の地には、早くから醫學の研究が進んで居た。第六世紀の頃、希臘の醫學書の翻譯が此の地に於て出版されて居る。以來、此の地は醫學の中心地として各國に其名を知られた。従つて、此の地に於ける醫術の研究は非常に進歩した。各國の名士にして病氣靜養の爲め、此の地に居を卜した者も少なくなかつた。かくして、サレルノには醫學の研究所が起り、醫學の研究所は、やがて醫學校となり、遂に發展してサレルノ大學となつたのである。

**ボロニヤ大學** サレルノ大學と共に、伊太利最古の大學がある。併し、サレルノ大學とは異なり、法學校から發達したものであつた。北部の伊太利には、長く羅馬の遺風が残り、羅馬法の如きも實際に行はれて居たので、自然に法律の研究者がそこに集まつた。これがボロニヤ市に法學校の起つた原因である。ボロニヤの法學校は、一一五八年に

第七十圖



中世の大學に於ける講義の様

フレデリック一世から大學の特權を與へられたが、其の後、次第に名聲を博し、第十三世紀の初めには、學生の數も四千人の多きに達した。而して、一三一六年には、醫學を加へ、一三六〇年には、更に神學を加へた。併し、醫學と神學とは、法學ほどに發達しなかつた。

**巴里大學** 巴里大學は、もとノートルダムに附屬せる監督學校であつた。一一一七年にアベラール (Abelard, 1079—1142) が教職に就いてから有名になり、數千人の學生が集まつた。巴里大學が公式にルイ七世から認可を得たのは、一一八〇年であつて、それから十八年を経て、羅馬法王の認可を得たのである。かくの如く、巴里大學は、もと神學校から起つたものであつた。此の學校には、著名な神學研究者が最も多く集まつたので、神學界の一大權威をなして居た。其の後、文科・法科・醫科が加はつて、最も完備した綜合大學になつた。後に巴里大學を模範として創設せられた大學も少なくなかつた。

**其の他の諸大學** サレルノ大學からは、ナポリ大學が分れ、ボロニヤ大學からは、パトヴァ大學が分れた。英國の諸大學は、伊太利及び佛國の大學よりも稍、後れて現はれた。



オックスフォード大學は、第十二世紀の後半に起り、ケンブリッジ大學は、第十三世紀の初めに起つた。これ等は、何れもみな巴里大學を模範として創設せられたものである。獨逸の大學は、英國のそれよりも尙ほ少し後れた。フライグ大學、ハイデルベルヒ大學、ライプチヒ大學等、何れもみな第十四世紀の創立である。これ等の諸大學も亦多くは巴里大學に其の範をとつたものであつた。

### 大學の組織

中世期の大學は、學術研究の團體を意味して居た。學術の研究を目的として、教授と學生とが集まつて團體生活をする、其の團體に對して、國家若しくは教會が種々の特權を與へたのである。これが中世期に於ける大學の真相であつた。故に、大學の原語たるユニヴェルシタス (Universitas) には、團體と云ふ意義が含まれて居る。其の團體は、通常、教授と學生の團體を意味して居たが、ボロニヤ大學のやうに、學生本位の團體もあつた。ボロニヤ大學では、大學總長も學生が其の任に當つて居た。ユニヴェルシタスは、後に一般的研究所 (Studium Generale) と稱せられるやうになつた。一般的研究所は、何人でも自由に集まつて研究する場所と云ふ意味であつたが、後には綜合大學を意味するに至つた。

中世期の大學は、神學科・醫科・法科・文科の四分科大學を本體とし、文科大學は他の三大學の下に位して居た。併しながら、總べての大學がみな此の四分科を併置して居るわけではなかつた。其の學科の内容を舉げて見れば、神學科大學にありては、最初、伊太利の神學者ロンバルド (Peter the Lombard) の編纂したセンチンシエー (Sententiae) を研究し、後には、トーマス・アクイナスの「神學大全」等を研究した。其の外に聖書も時々研究した。醫科大學に於ては、主として希臘やアラビヤの醫書を研究した。例へば、希臘の醫書では、ヒポクラテスの醫學論文、

東方の醫書では、アヴィセンナの醫學に關する遺著等を譯讀した。法科大學に於ては、専ら民法と寺院法とを研究した。寺院法は、更に分れて、教會の行政に關するもの、規則に關するもの、役員に關するものの三部に分れて居た。文科大學に於ては、七自由教科を中心の研究教科とした。アリストテレスの哲學は、其の中でも特に重要な地位を占めて居た。

大學の職員に就いて云へば、監督は、羅馬法王より任命せられ、總長は、各分科大學長から選出せられた。最初は、總長も分科大學長も半年交代であつたが、後には一年交代となつた。大學の特權は、既に述べた通りである。即ち教官に對する公役及び諸税の免除、大學關係者の犯罪を自由に裁判する權、學位授與權の三種が其の主要なるものであつた。學位には、マギステル (Magister) ドクトル (Doctor) リセンチヤ (Licentia) バッカラウリス (Baccalaureus) 等の種類があつた。これ等の學位は、文科大學にもあり、其の上に位する神學科・醫科・法科の三分科大學にもあつた。

### 大學教育の實際

中世の大學に於ける實際教授は、専ら講義の筆記によつた。當時、未だ印刷術が進歩して居なかつた爲めに、書物の數が少なく、適當の參考書を得ることは、非常に困難であつた。従つて、教師が教授するのを、學生は、一字一句も誤まりなくこれを筆記したのである。當時の講義には、冗漫なものが頗る多く、ウィーン大學の神學教授ハーゼルバハ (Hasellbach) の如き、「舊約全書」中の「イザヤ」の一章を講ずるに二十二年間もかゝつたと傳へられて居る。また中世期の大學には、講義の外に討論と云ふことも行はれた。これは、形式論理學の三段論法に従つて辯論を戦はすのであつた。



### 第三章 中世期の教育思想

#### 第一節 中世期の思想界と教育思想

##### 希臘羅馬の思想と基督教

中世期の思想界は、希臘・羅馬の思想と基督教との調和と云ふことに歸着する。イエス・キリストの誕生は、アウグス투스大帝の治世であつた。イエス・キリストの唱へた此のヘブライの新宗教は、イエスの死後、間もなくペテロやパウロによつて羅馬に傳播した。羅馬の皇帝からは、最初苛酷な待遇を受けたが、次第に民心を征服して、コンスタンチヌス帝の時に至り、完全な勝利を博した。コンスタンチヌス帝は、民心に深く浸み込んだ基督教の偉力を認めて、これを逆用しようと考へた。即ち彼は紀元三二三年に羅馬を統一するや否や、基督教を國教と定め、其の翌々年小亞細亞のニカイヤに宗教會議を開いて教義の確定を企てた。此の教義の確定に盡力した學者が教父哲學者である。故に、原始基督教及び教父哲學等のことは、年代の上から云へば、古代の中に入るべきものである。

教父哲學は、アウグステイヌス (Aurelius Augustinus. 354—430) によつて一段落を告げた。此の時までにすべての問題がみな解決してしまつたのである。それから四百年の間を歐洲史上の暗黒時代と稱して居る。北歐の蠻族は、羅馬帝國に侵入して、古代の文化を極力破壊した。希臘・羅馬の文學や藝術は、漸く教會によつて保存され、僅かに其の傳統を後世に傳へ、近世文化の端を啓くことが出來たに過ぎない。此の時代の僧侶は、教會の中にかくれて

たゞ古典の編纂や解釋のみを事とした。創見のある學說等は全く出なかつた。政治史上の暗黒時代は、思想史上に於ても亦白紙の時代であつた。

然るに、第九世紀の頃に至り、教父哲學者が確定した基督教の教義を哲學的に證明しようとする一派の學者が導師の養成を目的とする教會の學校即ちスコラの中から起つた。これが即ちスコラ哲學者である。スコラ哲學は、基督教の哲學化である。換言すれば、基督教と希臘・羅馬哲學との結合である。此の學派は、第九世紀から第十五世紀頃まで續いた。就中、第十三世紀に於て最も隆盛を極めた。トーマス・アクイナスは、此の全盛時代に現はれた代表的なスコラ哲學者である。

基督教は、希臘・羅馬の思想と、全く反對の基調の上に立つて居る。最初、羅馬に傳播した當時は、希臘・羅馬の思想とはげしく衝突したが、遂に勝利を得て民心を征服してしまつた。併しながら、原始的の基督教は、單純な信仰に過ぎない。到底、希臘・羅馬の哲學の如く、組織的・系統的なものではなかつたから、時代を経るに従つて、漸くこれを哲學的に組織する必要を生じて來た。こゝに於て、希臘・羅馬の哲學を採り、これを基督教の教義に結びつけようとするスコラ哲學が發生し、それが約六世紀間思想界の中心となるに至つたのである。故に、中世期の思想界は、希臘・羅馬の思想と基督教の調和の一語を以てこれを盡すことが出来る。

中世紀末の思想界 第十四世紀以後、スコラ哲學は、次第に衰頹して行つた。其の原因は、スコラ哲學に反する種々の傾向が現はれて來たことである。スコラ哲學が全盛を極めた第十三世紀の頃に於ても、既に幾多の反スコラ的思想が思想界の一部を流れて居た。例へば、神秘主義の思想の如き、自然科學的思想の如きものがそれである。こ



れ等の思想は、最初、微々として振はなかつたが、年と共に優勢となり、遂に、スコラ哲學の一大敵國となるに至つた。これがスコラ哲學を衰頹せしめた一原因である。尙ほ一つの原因は、スコラ哲學其のものの中から、當然破滅しなければならぬやうな思想上の缺陷を暴露して來たのであつた。スコートスに其の端を發し、ウィリアム・オッカムに至つて益々明瞭になつた信仰と理性の分離問題の如きは、其の最も顯著なものである。

スコラ哲學の衰頹は、やがて思想界を混沌たらしめたが、其の間から次第に近世文化の萌芽が現はれて來た。

## 第二節 基督教と教育思想

### 基督教の教義と教育

基督教の教義に就いては、既に屢々これを述べた。基督教は、出世間主義・禁欲主義を其の根本思想として居る。基督教の教義に従へば、人生の目的は、現世生活を脱離して、彼岸の世界に安心立命するにあつた。故に、基督教から云へば、現世の生活は、天國に入る準備に過ぎなかつたのである。かくの如き思想に基づいて、基督教に於ては、現世の生活を卑しめ、人間の肉體的慾望を制することを、天國に歸る唯一の方法とした。従つて、基督教によれば、希臘・羅馬の時代に主徳として重んぜられた知識・勇氣・節制・正義の如き徳目は、却つて人生の理想に反するものであつた。何となれば、これ等は、何れもみな現世を本位とした徳目であるから。これ等の徳目を排斥し、只管、神を愛し、神の命に服従して、天國に歸ることのみを望んだ。神の命に服従しなければならぬと云ふ思想は、やがて教會に對する服従の思想となり、教會萬能の傾向を生じた。かくの如き基督教の根本精神は、やがて其の教育思想上に反映した。基督教に於ては、極端な出世間主義・禁欲主義の上に教育の目的を定めた。希臘・

羅馬の時代のやうに、天賦の個性を十分に發達せしめるとか、國家のために有爲な人物を養成するとか云ふやうなことは、全くこれを不必要と認めた。たゞ教會の權能即ち教權に盲從して、一切の慾望を禁制し、現世の生活を離れ、天國に復歸することのみを念とする敬虔的な信者を養成することが唯一の教育目的であつた。故に、基督教に於ては、宗教の手段としてのみ教育の必要を認めた。教育独自の價値は、こゝに全く否定せられてしまつた感がある。

### 基督教の教育思想に及ぼせし利害

基督教は、教育の理想を唯心的方面に轉向せしめた。此の點に於ては、基督教の教育思想上に與へた功績を認めなければならない。從來は、動もすれば、教育の目的を定めるに當り、現世生活に拘泥し過ぎた。其の結果、教育其のものが功利的に流れ、浮薄に傾き、人格の教養に缺陷を生じた。例へば、現在の社會に活動する爲めは必要であるからと云ふ理由により、音楽や體操の如き教科が中心教科となると云ふやうな状態であつた。基督教は、俗世間の生活を卑しめ、宗教的の信仰を重んじた。従つて、教育上に於ても、人格的修養を陶冶の主眼とした。それが爲めに、教育思想に内面的の深味を増して來たことは事實である。併し、基督教は、また大に教育思想を毒した。基督教によつて教權萬能主義の思想を生じ、教會の權力が人間の活動に極端な壓迫を加へるやうになつた。教權の命ずる所、人間は、これを絶對的に盲從しなければならぬ。人間は、たゞ教會の命令を奉じ、教會の爲めに一身を捧げて活動すべきものであるとした。かくの如き教權萬能主義の前には、學問も教化も全く其の價値を失つた。自然の研究や觀察は阻止せられた。個性の自由な發達は妨げられた。かゝる思想は、教化の思想と全く相反するものである。基督教が教育思想上に與へた害毒の大なるは、此の一事によつても知ることが出来る。



### 第三節 アルクインの教育思想

**アルクインの功績** 中世期の教育史上に其の名を逸することの出来ない一人は、アルクイン (Alcuin. 735—804) である。アルクインのことは、既にこれを僧庵學校の中にも述べた。彼は、中世期の明君たるカール大帝の招聘を受けて其の教育顧問となつた人である。ヨークに生れ、其の地の學校の主事をして居たが、羅馬市に遊んだ時にカール大帝に知られた。アルクインは、カール大帝を援けて、其の領土内に多くの學校を設立した。而して、彼は、大帝に提議して、各地に多くの學者を求め、さうして自ら主宰となり、有力な學術團體を組織した。王朝時代から既に衰頹して居た宮廷學校を再興して、上流社會の教育を振興せしめた。アルクインは、其の外に多くの著述をして、文化の發展に少なからぬ貢獻をした。中世期の教育思想上に、アルクインは、最も重要な地位を占めて居る。

**アルクインの教育思想** アルクインは、嚴重な宗教主義の上に立てる教育家である。彼は、其の門弟に向つて、希臘・羅馬の書を読むことさへも禁じたと云ふ小膽な教育家であつた。アルクインは、教育の目的を容知の發達とした。アルクインの説によれば、道德の如きは容知の結果に過ぎなかつた。而して、此の容知を發達せしむるに最も必要な教科として哲學を擧げた。故に、哲學は、あらゆる教科の最高位置を占めるものであつた。哲學は、單に高尚な知識を授け、人間を知的に陶冶するのみならず、生活の指導者となり、道德的の訓練をも與へる。哲學を修める者は、自然及び人事に關する諸般の知識に通じ、人間の生活の意義を明かに知ることが出来る。さうして、自己の生活を改善して向上發展せしめやうとする意志を誘起するに至る。而して、人間は、哲學によりて神事を認知し、死に就いて考

へるやうになる。其の結果、現世の生活を嫌厭し、肉體的の欲望を制して、永久の郷里に安心立命するに至る。以上がアルクインの教育思想の概要である。

### 第四節 ラバーヌス・マウルスの教育思想

**ラバーヌスの功績** アルクインの門下からは、多くの有力な教育者が出た。ラバーヌス・マウルス (Rabanus Maurus. 776—850) も其の一人である。彼は、マインツに生れ、フルダーの僧庵學校に學んだが、監督者に其の天才を認められ、其のすゝめにより、アルクインに師事することになつた。アルクインの許に滞在したのは、漸く一箇年に過ぎなかつたが、終生文通を絶たなかつた。フルダーに歸つて、僧庵學校の教育に従事し、其の改善及び發展に盡力した。それが爲めに、フルダーの僧庵學校は、内外に其の名を知れ、獨逸學界の中心となつた。後に彼はマインツの大僧正に擧げられて、一般庶民の教育にも努力した。ラバーヌスは、其の師アルクインよりも博學で見識も高く且つ思想が進歩的であつた。スコラ哲學の先驅者とも云はれて居る。

**ラバーヌスの教育思想** ラバーヌスは、教育上に於ける聖書の價值を認めた。聖書は、至高萬能なる神の聲である。これによらなければ、容知の完成を望むことは出来ない——と言つて居る。彼は、かくの如く聖書を重んじた。併しながら、多くの宗教學者のやうに、科學の書や異端の書を排斥しなかつた。此の點は、彼の教育思想の優れて居ることを語る證跡の第一である。彼は、また個性教育の必要を認めた。生徒の個性を知り、これに適應した教育をしなければならぬと言つて居る。これ即ち彼の教育思想の特徴を語る證跡の第二である。彼は、教師の道德的修養



を特に重んじた。他人に善をす、める者は、先づこれを自己の行爲に表はさなければならぬ。教師が模範を示してはじめて徳育は完全に行はれると論じて居る。これ即ち彼の教育思想の特徴を語る證跡の第三である。其の他にも彼は尙ほ實際教育に關する種々の卓見を述べて居る。要するに、彼は、中世期の教育家中、最も進んだ思想をもつて居た者の一人である。

### 第五節 スコラ哲學と教育思想

**スコラ哲學の盛衰** スコラ哲學は、基督教の教義を希臘哲學によりて基礎つけたものである。其の起りに就いては、既にこれを述べて置いた。第九世紀から中世期の終りに至るまで、思想界の中心となつて流れた。通常これを三期に分ける。第一期は、第九世紀から第十二世紀に至る發生の時代、第二期は、第十三世紀の全盛時代、第三期は、第十四世紀以後の衰頹時代である。時代によつて、其の根柢となつた哲學思想が次第に推移して行つた。第一期に於ては、主としてプラトーンの哲學が其の根柢となり、第二期に於ては、主としてアリストテレスの哲學が其の根柢となり、第三期に至つては、唯名論が其の根柢となつた。

スコラ哲學は、時代の要求によつて生じて來たものであつた。東方から侵入した基督教の思想により、歐洲全土の民心は、一時これに眩惑されてしまつた。併しながら、ゲルマニヤ民族の精神は、基督教の信仰によつて全然滅びてしまはなかつた。だんだんと思想的に目覺めて來た。さうして、基督教の獨斷的信仰に盲従することが出来なくなつた。かくして、こゝに信仰上の危機を生じて來た。基督教の教義に哲學の根柢を與へて、獨斷的信仰を合理的信仰に

轉向せしめなければ、信仰の權威を持続することが出来なくなつた。スコラ哲學は、かくの如き民族的精神の煩悶の上に生じたものである。

スコラ哲學は、希臘羅馬の哲學を基督教の教義に結びつけて、平易な信仰の道を頗る難解の哲理に組み立てた。恰かもこれは平易な實踐道德に過ぎない孔子の學説が宋明の學者によつて、難解な性理説となつたのと同じである。スコラ哲學は、當時の民心に満足を與へた。如何に當時の民心を満足せしめたかと云ふことは、これが數世紀に互つて其の勢力を保つた事實に徴しても明かである。スコラ哲學は、信仰を合理化する目的を以て生れた。信仰を一々哲學上の理論に結びつけやうとした結果、無意味な穿鑿に耽つて徒らに議論のための議論をすると云ふやうな末派の學者も多くなつた。それが爲めに、此の學派は、今日まで煩瑣學派とも稱せられて居る。

**スコラ哲學と教育思想** スコラ哲學は、主として、大學の神學科に於てこれを課した。數世紀に互れるスコラ哲學者の中には、中世期の學界を代表する人々が多く出て居る。それ等の學者が如何なる教育思想を有して居たかと云ふことは明かでない。こゝに述べることも不可能である。併し、スコラ哲學の本義から見れば、知識と信仰とは、全然一致し得るものであつた。信仰以外のものは、これを知識の對象とすることが出来ない。眞の知識は、必ず信仰の基礎を有するものでなければならなかつた。スコラ哲學の創唱者として聞えて居るアンゼラムスの謂へる「我は知るために先づ信す」の一語は、スコラ哲學を一貫する根本思想である。此の根本思想によつて、教育を如何に解して居たかも察し得られる。スコラ哲學者の教育思想は、明かに宗教主義の上に成り立つたものであつた。ものを知ると云ふこと、それは信仰の爲めであり、信することはやがてまた知る爲めに外ならぬのであつた。ものを知るとは、信す

12



る爲めであるとするれば、教育と云ふことは、やがて宗教の方便であると云ふ解釋が生れて来る。何となれば、ものを知ると云ふことは、これを他の方面から見れば、ものを教へることであり、ものを教へることは、これ即ち教育の一面に外ならぬからである、スコラ哲學は、知識と信仰とを結びつけるものであつた。中世期の教權萬能主義を擁護する爲めに、スコラ哲學は、最も巧妙に組織せられた理論であつた。従つて、學校教育を宗教の從僕たらしめた中世期の教育を、スコラ哲學は理論的に是認したのである。宗教的人格の陶冶、換言すれば、教會のために最も忠實な信者を養ふことがスコラ哲學の到達すべき教育の目的であつた。スコラ哲學の生み出した教育思想が、宗教主義の一語に蔽はれる理由は、これによつて明かである。其の教授法の如きは、學派の性質上、たゞ演繹的に既定の眞理を證明するのみに過ぎなかつた。此の學派が教育の思想上に與へた貢獻は、蓋し極めて尠ないものであつた。

### 第三篇 近世教育史

こゝに近世と稱するは、東羅馬帝國の滅亡より現代に至るまでの四百數十年間を指すのである。此の間に世界の各國は、實に著るしい發展を遂げて、全く其の面目を一新した。其の時に於ては、僅々五百年に足らないのであるが、歴史上に遺された事件は非常に多く、歐洲史の大部分をこれに埋めて居る。通常の歴史には、此の近世史を更に二分して、近古史・近世史の名を掲げ、佛國革命以前を近古史と名づけて居るものもある。併し、教育史上に於ては、かくの如く分ける必要もないから、これを近世史の名の下に通説することにしたい。

#### 第一章 近世の國情と文化

##### 第一節 近世に於ける各國の興亡

先づはじめには、近世に於ける各國の國情を明かにして置きたいと思ふ。近世に於ける各國の興亡盛衰は、極めて複雑である。これを詳細に述べることは、普通の西洋史に譲らなければならない。こゝにはたゞ近世教育の發達を理解する豫備知識として必要な事柄を述べるのみに止める。

**近世初頭の世界的革命** 近世の初めに當り、世界の人心に最も強き刺戟を與へて、思想上の大革命を惹き起し



たものは、文藝復興と宗教改革であつた。文藝復興の運動は、先づ伊太利から起つた。伊太利に於ては、第十三・四世紀の頃から、人道學派と云ふものが現はれ、頻りに希臘・羅馬の古書を研究し、其の精神を現代に活かさうとした。これが即ち文藝復興運動の由來である。此の運動の先驅者となつたのは、ダンテ、ペトラルカ、ボッカチオ等の詩人であつた。次第に獨逸・英國・佛國等に波及して、種々の方面に種々の影響を及ぼした。宗教改革は、其の影響の一つである。

文藝復興の結果、希臘やヘブライの古書を研究する者が多くなつた爲めに、基督教の眞精神が自ら明かになつて來た。さうして、當時の教會が基督教の精神に全く反して居ることを自覺するやうになつた。其の結果が宗教改革を惹起したのである。宗教改革は、獨逸のルーテル、瑞西のツウイングリ、佛國のカルヴィン等によつて火蓋を切られて世界の思想史上に稀有の記録を止めるに至つた。

文藝復興及び宗教改革が、直接に歐洲各國人の思想と生活とに與へた影響は多大である。近世の歐洲史は、此の思想上に於ける二大革命に其の端を發するものと云つてよい。

### 地理上の發見

中世期末から近世の初めにかけて、地理上の發見が各國人の耳目を驚ろかし、其の好奇心を刺戟した。十字軍の東征、蒙古人の西征等によつて、東西の交通がだんだんと開けて來て、歐洲人の地理的知識が著るしく發達した。其の結果、歐洲人の中には、冒險的な航海を試み、新航路や新世界を發見する者が續々と現はれた。ヴェニス人マルコ・ポーロは、東遊して元の世宗に仕へ、歸國後に「東方見聞録」を著はした。其の中に我が日本のことが誇張した文字によつて紹介されて居る。それが爲めに、西歐人は、我が日本に對して多大の興味をもつやうになつた。

た。第十五世紀に至り、ポルトガル人ヴァスコ・ダ・ガマは、印度に達する新航路を發見し、ジェノア人コロンブスは、新世界アメリカを發見した。當時、伊太利の諸市は、印度の物産を歐洲の諸國に轉賣して、莫大な利益を占めて居た。西歐の諸國は、大にこれを羨んだが、トルコ人が其の中間の陸路を塞いで居るので、直接に東洋と貿易することが出来ない。そこで海路からアフリカの喜望峯を迂回して、印度に達する新航路を發見するやうになつたのである。ヴァスコ・ダ・ガマが喜望峯を廻航して、始めて印度のカリカットに到着したのは、一四九八年のことであつた。コロンブスは、疾に世界の球形説を信じ、大西洋を西航すれば、必ず印度に達するものと思ひ、イスパニヤ王イサベラの助力により、大西洋を横斷して、偶然にも西印度諸島の一島に到着した。これがアメリカ大陸發見の端緒であつた。新航路及び新大陸の發見は、大に西部歐羅巴人の海外遠征思想を刺戟した。殊に、中央集權が略ぼ成立して、國運發展の機運に向つて居たポルトガル及びイスパニヤの諸國は、率先して外に活動を試るやうになつた。

地理上の發見は、歐洲諸國人の新知識を開發し、進取の氣象を鼓舞した。其の結果、物質的・精神的兩方面に於ける歐洲文化の發達を促し、全世界の歴史上に一新紀元を劃するやうになつた。故に、此の地理上の發見と云ふことも、近世の歴史を考察する者が、先づ注目しなければならぬ問題である。

### 封建制度の崩壞

西歐羅馬諸國に普く行はれて居た封建制度は、中世期の末に至り、次第に崩壞して、中央集權制度がこれに代はるやうになつた。十字軍以後、諸侯や武士が權勢を失つて、諸國の王權が非常に擴張したからである。かくしてこゝにイングランド、フランス、イスパニヤ、ポルトガルの四大強國が西歐羅巴に現はれて來た。イングランドに於ては、百年戰役・薔薇戰役等により、諸侯の滅亡又は疲弊する者が多かつた。これに乗じて、へ



ンリー七世は諸侯を併せ、イングランドを統一して獨裁政治を斷行した。フランスに於ても、百年戦役のために滅亡し又は疲弊した侯諸が多かつた。チャールス八世は、此の機を利用して、大に王權を擴張し、強大なる國家を建設した。イスパニヤに於ては、第十一世紀頃から基督教徒とマホメット教徒との争闘が絶えなかつた。それがために數多の小國に分れたが、一四七九年、アラゴンの王子フェルヂナンドがこれを統一して、イスパニヤ王國を起した。ホルトガルは、もとカスチラ王國に屬して居たが、第十一世紀の末頃に至りて獨立した。其の後、國王は、次第に王權を擴張して強大な王國とした。

### 宗教上の争亂

ルーテルの宗教改革は、多くの共鳴者を出した。併しながら、またこれに反對して舊教を擁護する者も多かつた。こゝに於て、新舊兩教徒の衝突が到る處に演ぜられた。それに政治上の争闘が絡んで、オランダの獨立、イングランドの宗教改革、フランスの内亂、三十年戦役等、重大な事件が各地に續出した。

オランダは、もとベルギーと共に、ネーデルランドと稱し、イスパニヤ王の領地になつて居た。ネーデルランドには、新教と舊教との二種の宗教が並存した。即ち今のオランダ地方には新教が行はれ、ベルギー地方には舊教が行はれて居た。然るに、フィリップ二世に至り、新教を禁示し、且つ從來其の地方の人民に與へてあつた種々の特權を剝奪したので、オランダ人は、大に怒つて叛亂を起した。其の結果、オランダは、遂にイスパニヤの統治を離れ、純然たる獨立國となつた。かくして、オランダは、印度の新航路を發見して、東洋諸國との貿易を開き、次第に商業上の覇權を握り、第十七世紀の半頃には、歐洲第一の富國となつた。

イングランドに於ては、チュードル朝の祖ヘンリー七世の頃から、王室を中心にして絶えず新舊兩教の争を續けた

が、エリザベス女王に至り、大に舊教派を壓迫し、オランダを助けてイスパニヤ王フィリップ二世と戰つた。此の戦役に大捷を得てから、イングランドは、イスパニヤに代つて海上に雄飛するやうになり、英國今日の富強の基を開いた。

フランスには舊教徒が多かつた。新教徒は、其の勢力が更に振はず、常に舊教徒からユグノーと侮けられて居た。フランシス二世の時、權臣ギーズ公フランシスは、大に新教徒を迫害した。然るに、次の幼帝チャールス九世の時に至り、攝政たる母后カザリンは、舊教信者でありながら、ギーズ公から政權を奪ふために、新教徒を味方に引き入れ、これに信教の自由を與へた。こゝに於て、新教徒はやゝ勢力を得、舊教徒と争ふやうになり、八年に亘る内亂を生じた。これをユグノー戦役と云つて居る。チャールス九世は、母後の專權を厭ひ、新教徒の將軍コリニーを信任した。政權の失墜を恐れた母后は、ギーズ公ヘンリー(フランシスの子)と結托し、一五七二年のセント・バソロミー祭日の未明を期し、新教徒の大虐殺を企てた。遭難者は三萬人の多きに達したと云ふ。こゝに於て、また再び内亂が起り新舊兩教徒の争は益々はげしくなつた。

獨逸の新舊兩教徒は、アウグスブルグの宗教會議により、表面上相和したが、其の實尙ほ互に軋轢を續けた。其の軋轢は、やがて三十年戦役を惹き起すに至つたのである。三十年戦役の起りは、獨逸皇帝マチャスの從弟たるボヘミア王フェルヂナンドが舊教徒を保護して新教徒を迫害したことにある。ボヘミア人は、新教徒の迫害者フェルヂナンド王を國外に放逐した。然るに、其の翌年、獨逸皇帝マチャスが死亡したので、フェルヂナンドは、皇帝の位を嗣ぎフェルチナンド二世と稱した。依つて、ボヘミア人は、新教同盟の首領たるファルツ選挙侯フレデリック五世を迎へ



て王とし、獨逸皇帝に反抗した。其の騒亂は、次第に擴大して、デンマルク、オランダ、イングランド、スウェーデン等の諸國が渦中に入り、世界最大の宗教戰亂となつた。三十年戰役は、一六四八年のウェストファリア條約により、漸く終りを告げたが、此の戰役によつて、フランス及びスウェーデンの兩國は、大に盛運に向ひ、獨逸帝國は、全く瓦解するに至つた。

### 佛國の盛衰

三十年戰役後、佛國の國勢は、大に振興した。ルイ十四世の時に至りては、歐洲の覇者の如き盛觀を呈した。帝は、自ら政治を親裁して、「朕は即ち國家である。」と宣言し、壯麗なる宮殿を營み、豪華なる生活をなし、諸般の制度を革新すると共に、大に文教を保護獎勵したので、佛蘭西文學の黄金時代を現出した。ルイ十四世は、また種々の理由を口實として諸外國を侵略した。ネーデルランド、オランダ、ファルツ等、何れもみな其の侵略を蒙つた。イスパニヤ王位の繼承に關しては、獨逸、イングランド、オランダ等を敵として、前後十三年に亘る大戰爭を續けた。かくの如き宮廷の豪華と外征のために、國力は大に疲勞した。加之、少數の貴族及び僧侶は、種々の特權を有し、全國中の約三分の二に餘る土地をもつて居ながら、殆ど租税を出さない。これに反して、僅かに三分の一の土地を所有せる多數の平民は、一切の租税を上納しなければならなかつた。此の不合理な稅政に深刻な怨みを抱いて居た平民は、ルソー等の自由民權說に共鳴し、遂に革命の烽火を擧げるに至つた。それは、一七八九年のことであつた。かくして、佛國民は、王宮を襲ひ、ルイ十六世を捕え、これを斷頭臺上に殺害し、共和政治を實施した。併しながら、國內は種々の黨派に分れ、依然として混亂を極めて居たが、ナポレオン・ボナパルト出て、國內を鎮定するに及び、はじめて大革命の終焉を見るに至つた。其の勢望が次第に高まるに従ひ、ナポレオンは、武力を以て政府を倒し、制度を改

正して、自ら其の第一執政となつたので、佛國の實權は、全くナポレオンの手に歸してしまつた。ナポレオンは、大に外征の師を起して、オーストリア、伊太利、獨逸等に侵入した。ナポレオンは、また大に内治に力を用ひ、治績を擧げたので、遂には推されて帝位に即き、ナポレオン第一世と稱するに至つた。併しながら、トラファルガーの海戰に於て、英國の艦隊に敗られ、且つ露西亞の遠征に失敗してからは、諸外國から壓迫を受けるやうになり、遂に帝位を棄て、エルバ島に配所の月を眺めるやうになつた。ナポレオンの失脚後、列國は、ウィーン會議を開いて、一切の國際問題を解決した。かくして、佛國は、再び王政に復歸したが、其の後、また專制主義の弊に堪えかねて、國民は次第に王政を嫌ふやうになり、革命を起して王政を顛覆し、假共和政府を設け、ルイ・ナポレオンを擧げて大統領とした。ルイ・ナポレオンは、間もなく國民投票によつて帝位に上り、ナポレオン三世となつた。ナポレオン三世は、大に武斷政治を行つて、帝位を固くすると共に、國威を宣揚して、歐洲の覇權を握らうとした。併し、メキシコ事件以後、事毎に失敗が重なつて、遂にはプロシヤの爲めに征服せられるに至つたのである。

### 英國の發展

エリザベス女王の歿後、イングランドには屢々革命が起り、一時はクロンウエルを中心とせる共和政府が出現したが、一七〇七年、女王アンの時、スコットランドと合併して、大ブリテン王國となり、次第に其の國力の充實をはかつた。一八〇五年、佛國の艦隊をトラファルガーに撃破し、ナポレオン第一世の野心を挫いてから、海上の覇者となり、イスパニヤ及びホルトガル等に代つて、海外に雄飛するやうに至つた。かくして、英國は、世界の各地に尠大なる殖民地を有する大強國となつたのである。

英國には、夙に政黨政治が行はれた。英國にはじめて政黨政治の開始せられたのは、ウィリアム三世の時代であつ



た。それから間もなく、責任内閣の制度が確立して、トリー黨とホイッグ黨とが交互に内閣を組織して政治上の責任を負ひ、王室は、全く政争の外に立つことになつた。それが爲めに、他の諸國のやうな激烈な革命も起らず、比較的穩健に内政の改革が行はれた。ヴィクトリア女王の治世に至つて、英國の文物制度は、最も目覺ましい發展を遂げたのであつた。

### 獨逸の統一と其の活躍

三十年戦役のために、獨逸帝國は殆ど瓦解した。皇室は、たゞ虚位を擁するのみとなり、各地の諸侯が互に其の勢力を争ふに至つた。かくの如き群邦の割據の中から、漸く頭角をあらはして來たプロシヤは、七年戦役後に至り、オーストリアと對立する獨逸國內の強國となつた。一八〇六年には、ナポレオン三世の侵略を蒙つて、領土の大半を失つたが、ナポレオン三世の失脚後、再び其の國勢を恢復し、オーストリアと共に、獨逸聯邦の中心となつて居た。然るに、英邁にして雄略あるウィリアム一世が帝位に即くに及び、ビスマルクを宰相に擧げ、モルトケを參謀長に任じ、オーストリアを獨逸聯邦の中から除いて、獨逸を統一しようとした。偶々シレスウヰヒ、ホルスタイン兩公國の處分問題に就いて、オーストリアとの間に争論を生じたので、機逸すべからずとして、オーストリアを攻撃し、これを降伏せしめ、其の主張を貫徹した。一八七〇年には、イスパニヤの内亂を基として、ナポレオン三世と戦ひ、佛國に侵入し、巴里を包圍し、大捷を博して城下の誓をなさしめた。此の戦役中に、ウィリヤム一世は、獨逸聯邦の民衆の希望を容れ、ヴェルサイユ宮殿に於て、獨逸皇帝即位式を擧げた。ウィリヤム二世に至り、聯邦會議の決議により、プロシヤ王は、獨逸の帝位を世襲することになつた。かくして、こゝに獨逸統一の大業は成り、獨逸帝國の活躍時代が始まつたのである。

### 露西亞の勃興と領土の擴張

露西亞の諸侯は、二百餘年間、キプチャック汗國に屬して居た。然るに、其の後モスコイ大公國が次第に隆盛となつて、他の諸侯國を併合し、イワン三世の時に至り、遂にキプチャック汗國を滅ぼして全國を統一し、露西亞帝國の基を開いた。世にこれをイワン大王と云つて居る。其の孫イワン四世の時に、はじめて皇帝(Царь)と稱し、大に領土の擴張をはかつた。イワン四世の歿後、争亂のために國力が衰へたが、ミカエル・ロマノフの即位と共に、再び其の國勢を恢復した。これがロマノフ家の祖である。ロマノフの歿後、四十年を経て、其の孫ペートルが即位した。これがペートル大帝である。ペートル大帝は、自ら西歐の文物を研究し、大に國政及び民俗の革新をはかつた。大帝は、良灣を獲得して、西歐の文化を輸入し、露國の民俗を改善することを國策の根本問題と考へ、大に近傍の諸國を侵略して領土の擴張を企てた。こゝに於て、露西亞の國勢は俄然として勃興し、世界の大強國となるに至つた。

ペートル大帝の後、數代を経てから、女帝カザリン二世が即座した。カザリン二世は、大帝の志を繼いで、領土の擴張をはかつた。先づポーランドを分割し、クリミア半島を奪ひ、更に東方の侵略を企てた。ニコラス一世、アレクサンドル二世等、何れもみな侵略主義を執つて、屢々近隣の諸國と戦つた。併しながら、クリミア戦役に於ても、露土戦役に於ても、常に列國の干渉を受けて、南下の志を達することが出来なかつたので、極東の方面に着眼するやうになつた。かくして、遂に日露戦役の勃發となつたのである。

### 伊太利の國情

伊太利も亦多くの小國に分れて居た。さうして、其の國々には、專制政治が行はれて居た。伊太利人の中には、屢々統一に運動を起した者があつたが、いつもオーストリアに妨げられて失敗に終つた。然るに、



其の後、サルヂニヤから、ヴィクトル・エマニユエル二世が出て、賢相カプルーを信任し、大に國力の發展を企てた。サルヂニヤ王は、先づ立憲政治を施行して、民心の收攬をはかり、ナポレオン三世の歡心を買つて其の援助を受け、オーストリアを撃破して其の勢力を挫いだ。かくして、サルヂニヤ王は、次第に伊太利統一の歩を進めた。一八六一年、トリノに伊太利の議會を開き、はじめて伊太利王國の成立を宣言した。サルヂニヤ王ヴィクトル・エマニユエル二世は、此の時に推されて伊太利王の位に即いた。伊太利王國は、其の後次第に發展し、舊羅馬法王領の全部を併合し、統一の大業を完成するに至つた。

#### 北米合衆國の獨立と其の發展

亞米利加に於ける英國の植民には、もと信仰の自由を得るために、本國から移住した者が多かつた。従つて、頗る獨立自主の精神に富んで居た。これ等の植民は、次第に本國の政策に不滿を抱くやうになり、一七七七年、遂に獨立を宣言して、本國に反旗を翻へした。當時、英國の横暴に惡感を抱いて居た列國は、何れもみな北米合衆國の獨立を承認し、直接に間接にこれを援助した。英國は大勢の非なるを察し、ヴェルサイユに講和條約を結んだ。こゝに於て、北米合衆國は、憲法を制定して、十三州の聯邦を組織し、全州の統一を期すると共に、各州の自治を許した。一七八九年、ワシントンが大統領として、國都をワシントンと名づけた。

北米合衆國の國勢は、獨立以來屢々として進歩した。其の領土は、次第に擴大して太平洋岸に達した。領土の擴張と共に、南北兩部の利害が相反するやうになり、一八六一年、有名な南北戰爭を惹起したが、南軍の屈服により、合衆國の統一は、益々鞏固になつたのである。

**世界大戦役** 一九一四年に世界大戦役が起つた。此の大戦役は、有史未曾有の大事變であつた。其の起りは、セ

ルビヤに同情する一青年が、オーストリア皇太子及び其の妃を狙撃したことにあつた。併しながら、此の戦役がかくの如き大事變となるには、種々の複雑な原因が潜んで居た。其の中でも、特に主要な原因と認められるのは、獨逸を中心とする諸國の勢力争ひであつた。獨逸は、汎ゲルマニヤ主義を理想として、輒近著るしく其の國力を充實せしめた。獨逸の武力と野心には、各國が何れも不安を感じるやうになつて來た。獨逸の軍國主義に對する各國の不安は、何等かの反動となつて現はれなければならぬ形勢となつて居たのであつた。セルビヤとオーストリアの戦端が其の動機となつて爆發し、遂に全世界を戦亂の渦中に投ぜしめたのである。

世界大戦役の結果、獨逸及びオーストリアは敗戦して、其の國情を一變した。また露西亞には革命が起つて、ロマノフ朝の没落となり、勞農政府が出現した。英・米・佛・伊其の他の諸國にも、それぞれ從來に例のない種々の現象が現はれた。まことに世界の大戦は、人類の生活上より見るも、思想上より見るも、永久に記録せらるべき由々しい大事件であつた。

## 第二節 近世期に於ける文化の發達

### 近世文化の曙光

中世期末に於ける文藝の復興は、自由研究の精神を旺盛ならしめた。基督教が羅馬の國教となつてからは、教會萬能の世界となり、學術も文藝も悉く教會に隷屬するものやうになつてしまつた。然るに、文藝の復興により、かくの如き宗教の羈絆を脱して、自由に希臘・羅馬の古典を研究し、希臘・羅馬の精神を現代に活かさうとするやうになつた。故に、文藝の復興は、希臘・羅馬の古典の復興であると共に、其の精神の復興であつた。



近世の文化は、文藝復興によつて生じた自由研究の精神の産物である。近世文化の曙光は、これを文藝復興の中に見出すことが出来る。

文藝の復興と前後して、種々の發明や發見が續々と起つて、社會の耳目を驚かした。第十四世紀頃に於ける時計及び眼鏡の發明の如き、第十五世紀頃に於ける活版術の發明の如き、其の最も顯著な例に屬して居る。また磁針を航海術に應用するとか火薬を銃砲に應用するとか云ふやうな應用の方面も頗る進歩し、發明の方面と相俟つて、人間の生活を一變せしめた。かくの如き種々の發明や發見は、何れもみな人類の物質的文化に長足の發達を促したが、精神的文化も亦これによつて尠なからぬ影響を受けた。活版術の發明の如きは、特に精神文化の發達に大なる貢獻をしたものであつた。中世期に於ては、まだ印刷と云ふことがなかつたので、書籍は、悉く僧侶が手寫したものであつた。第十五世紀の初めに至つて、はじめて木版術が發明せられ、それから間もなく、木版の活字が出来、更に金屬製の活字が出来た。支那では、西洋の活版術に先だつこと四百年の昔、既に活版術も製紙法も發明せられて居たが、サラセン文化の西漸に伴ひ、支那の製紙法が歐洲に傳はり、こゝに印刷術の一大發達を促したのである。印刷術の進歩が、近世文化の發展に與へた影響を見逃すことは出来ない。

**近世期に於ける思想の發展** 近世文化の全體を簡単に述べることは出来ないから、たゞ教育史研究上に必要な思想の發展のみを概説して置くことにしたい。

中世期の思想界の中心となつて居たスコラ哲學は、第十四世紀以後次第に衰亡した。スコラ哲學の衰頹、文藝の復興等により、宗教と哲學は全く分離した。從來、宗教の奴隸となつて居た哲學は、独自の價値を自覺して、新らしき方面に進んで行つた。近世の思想界に於て先づ注目すべきは、新らしい哲學の發生と云ふことであつた。文藝の復興は、殆どあらゆる文化に影響を及ぼした。必ずしも哲學のみが其の影響を受けたと云ふわけではない。宗教・文學・美術・道德・科學等、みな其の影響を蒙つて居る。併し、思想の發展を歴史的に眺めると、先づ哲學の方面に注目しなければならない。近世期に於ては、如何なる思想も殆どみな哲學を背景として居るからである。

近世期のはじめに旺盛を極めた自由研究の精神が生み出した新哲學組織の一つは、英國に發生した經驗哲學であつた。其の先驅者をば、フランス・ベーコン (Francis Bacon, 1561—1626) と云ふ。經驗哲學は、外界に於ける個々の事實の正確な觀察を知識の基礎としようとするものである。かくの如き思想は、既に中世期の頃から思想界の一隅を流れて居たが、中世期の思想には、まだ多くの空想的・神秘的な色彩が濃厚であつた。然るに、ベーコンは、此の空想的・神秘的思想を極力排斥して、確實なる科學的研究に基づく知識の必要を最も明瞭に主張した。學問の研究は、經驗から出發しなければならない。先入の偏見を除き、虚心平氣に個々の事實を實驗觀察し、それ等の事實に通じた法則を發見すること、これ即ち眞の學術研究方法であると云ひ、ベーコンは、此の研究法を新オルガノンと名づけた。これ即ちアリストテレス以後唯一の學術研究方法と認められた演繹法に對する歸納法の提唱である。併し、ベーコンは、たゞ學術研究の新理想と新方法とを教へたのみに過ぎない。彼には未だ哲學上の新思想と云ふものはなかつた。ベーコンの後に出了たホッブス、ロック等によりて、此の經驗論は、堂々たる學派となつた。殊に、ロックは、經驗哲學の大成者として、思想史上に光輝を放てる者である。ロックは人間の心を白紙に譬へて、觀念の先天性を否定し、最も徹底的な經驗論を唱へた。ロックの經驗論を更に發展せしめたヒュームは、經驗論の必然的歸結が經驗論に止ま



ることの出来ない理由を示すに至つた。経験論の思想は、これを發展せしむれば、経験論を離れてしまふと云ふことが、ヒュームの説によつて明かになつたのである。

英國の経験論と並んで、近世の思想界を風靡した他の一系統は、佛國及び和蘭に發生し、獨逸に入りて發達した純理哲學である。純理哲學は、経験哲學と全く其の立脚地を異にして居る。経験論の如く、外界の事實に重きを置かず、吾人の直接に意識する所を確實なる知識の根據とするものである。デカルト (René Descartes, 1596—1650) を以て此の學派の祖として居る。デカルトは、吾人の知識の不完全なることを痛感し、あらゆる傳承的學問を排斥し、眞理を心の中に求めた。自己に内在する自明の原理を發見する爲めに、あらゆる事物を疑つたが、たゞ一つ疑ふことの出来ないものがあつた。それは私の存在と云ふことであつた。我は、一切のものを疑ふ。併しながら、「我が疑ふ」ことのみは疑ふことが出来ない。「我思ふ故に我あり。」デカルトは、これを根本的眞理として、神の存在、外界の存在を證明した。デカルトの思想は、スピノーザに傳はり、更に發展して純理哲學の一大系統となつた。ライブニッツは、純理哲學を根柢とし、これに経験哲學を加味して有名なモナド論を唱へた。ライブニッツの哲學は、ウォルフに傳はり、啓蒙時代の獨逸思想界の中心勢力となつた。

純理哲學と経験哲學との調和的傾向は、既にライブニッツの説にも現はれ、英國の経験學派の説にも現はれて居た。併し、此の傾向を更に進めて、啓蒙時代に於けるあらゆる思想を綜合し、獨得の批判哲學を建設し、近世の哲學史上に一新の生面を開いた者は、獨逸のカント (Immanuel Kant, 1724—1804) である。カントは、人間の知識を確實のものとして種々の説を唱へて居る從來の哲學を排斥して、「認識は果して可能なりや否や」の根本問題から出發し

た。カントは、自己の立場を批判哲學と名づけて、從來の獨斷哲學と區別した。カントの説によれば、「吾人の認識は可能であるが、其の可能の範圍はたゞ現象界にのみ限られて居る。」と云ふのであつた。カントは、此の世界を現象の世界と物其自の世界とに分けて、現象の世界のみを認識の對象とし、物其自の世界を認識の限界外に置き、これを道德の舞臺とした。カントの哲學は、世界の思想界に最も大なる影響を及ぼした。其の説に反對する者、贊成する者、續々として出て、僅々数十年の中に、希臘の古代にも優れるが如き哲學界の全盛時代を現出した。

カントの哲學の繼承者を總稱してカント學派と云ふ。カント學派は、其の範圍が非常に廣い。此の學派の中に入る哲學者は、尠なからぬ數に達して居る。フイヒテ、シェーリング、シュライエルマッヘル、ヘーゲル、ショーペンハウエル、ハルトマン、ヘルバルト等は、其の中の著名なるものである。これ等の諸學者は、何れもみなカントの哲學を繼承し、或は其の缺陷を補正し、或は其の思想を發展せしめた。

カントの歿後に出て、獨逸の哲學界を風靡した者はヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770—1831) である。ヘーゲルは、理性主義の哲學を唱へた。理性を論理的進行とし、此の論理的進行を絶對となし、世界は、此の絶對的發展によつて成れるものと考へたのである。ヘーゲルの哲學は、普魯西の官學の如き觀を呈して、多くの學徒を出したが、其の學徒の分裂によりて次第に勢力を失つた。ヘーゲルの哲學の衰亡と共に、一時、擡頭したのは唯物論であつた。極端な唯心論の上に立つて居るヘーゲル學徒の中からも、唯物論者が現はれた程である。これによつて思想界の大勢を知ることが出来る。

ヘーゲル哲學の盛時には、カントの哲學も全く學界から閑却せられて居た。然るに、其の後、カントの哲學に注目



する者が多くなつた。「カントに歸れ。」の一語が學界の一隅に起つて來た。かくして、カント哲學は、當時流行して居た唯物論を排して、思想界に復活した。第十九世紀以後に至り、カントの哲學を復活せしめ、これを祖述した學者を總稱して、前のカント學派に對し、新カント學派と呼んで居る。新カント學派は、獨逸のみならず、英國・佛國・伊太利・和蘭其の他の諸國にも散在して居て、其の數が非常に多く、種々の學派に分れて居る。

新カント學派の系統に屬するものの中、現代の哲學界に其の勢力を有するは、マールブルヒ學派と西南學派である。マールブルヒ學派は、マールブルヒ大學を中心として起れる一派を云ふ。此の學派の基礎を築き上げた者はコイヘン (Hermann Cohen, 1813—1918) である。コイヘンは、カントの唱へ出した先驗的理想主義の思想を最も體系的な學說に組織した。西南學派は、獨逸西南部の大學教授によつて主唱せられたものである。ウインデルバンド及びリッカートが此の學派の代表者として聞えて居る。ウインデルバンド (Windelband, 1818—1915) は、カントの思想の中にかくれた精神を明かにしてこれを現代に活かすことを力めた。價値の概念を以て其の中心思想とし、哲學を以て普遍妥當的價値の學とした。

英國に發祥した經驗哲學は、種々の曲折を経て、功利主義の倫理思想を生み出した。此の思想も亦新しいものではない。たゞ英國の經驗學者によつて學術的に組織せられたのみである。功利主義の主唱者には、ベンザム、ミル、スペンサー、シデューウィック、ラッシュダール等を數へることが出来る。功利主義者の中にも、純然たる經驗論から離れ、理想主義を加味する者が次第に現はれて來た。ピアース及びジエームス等によつて提唱せられたプラグマティズムも亦經驗哲學の系統に屬するものである。併し、これも亦純粹の經驗哲學とは云はれない。要するに、輓近の哲學は、純

理哲學と經驗哲學との調和といふ點を特徴として居る。

### 第三節 近世の文化と教育

**文化と教育** 文化と教育とは密接な關係を有するものである。文化は教育の進歩によつて普及發達し、教育は文化の普及發達に伴つて進歩する。古今の歴史に徴しても、文化の發達した時代には、必ず教育が進歩して居る。また明君賢宰が出て、教育事業に力を注ぐ國には、必ず諸般の文化の發達を見るに至るのである。

教育は、一種の文化事業である。教育の目的は、結局、文化の發達と云ふことに歸着する。文化と教育との關係が如何に密接であるかは、これによつても明かである。故に、教育の變遷を知らうとするには、其の時代に於ける文化の概要に通ずることが極めて必要である。一般文化史の豫備知識がなくて、教育史を研究することは、困難と云ふよりも寧ろ不可能であると云つてよい。本書が教育の事實及び思想を叙述するに當つて、其の時代に於ける國情並に社會組織と文化の概要の説明に力を用ひたのは、こゝに其の理由が存在して居る。併し、社會の事情や文化の説明は、教育史以外のことである。これを教育史の中に述べたのは、普通の西洋史や西洋文化史に精通して居ない人々の便宜をはかつたのである。

#### 近世の文化と教育

近世期に入りて、諸般の文化が急激に進歩したことは、實に驚ろくべき事實である。文藝復興以來、僅々四百年、其の間に於ける文化の進歩は、人類の歴史が始まつてから、近世期の初頭に至るまでの進歩に數倍して居る。かくの如く目覺ましい文化の發達は、教育上にも著るしい影響を及ぼした。就中、近世の思想が教



育に種々の刺戟を與へて、其の改善を促がした功績を閑却することは出来ない。

近世の文化が教育上に及ぼした影響は、種々の方面にこれを認めることが出来る。即ち、第一に、近世の文化は、正しい教育の理想と其の意義を自覺せしめた。古代に於ても、中世に於ても、理想なしに教育は行はれて居ない。教育と云ふ事業は、何等かの理想がなければ到底行はれないからである。古代にありては、有爲有能な國民の養成が教育の理想であつた。中世にありては、忠實な基督教徒の陶冶が教育の理想であつた。併し、これ等の教育理想は、何れも個人の價値を餘りに輕視し過ぎた。否、寧ろ個人其のものの價値を全然認めなかつた。國家の方便、教會の奴隸としてのみ、個人の價値を認めて居た。かくの如き人生觀の上に成り立つ教育の理想を正しい教育の理想と考へることは出来ない。正しい理想の上に立たない教育は、教育の本義を失つて居る。近世初頭の思想的革命は、教權の束縛から個性を解放した。こゝに於て、人格の觀念が明かになり、これが教育の理想を決定せしめるに至つた。殊に、カントの批判哲學は、人格の價値を高めて、個性の發展、人格の陶冶を外に教育の目的を考へることが出来ないやうになつたのである。正しい教育の理想と其の意義の自覺は、近世の文化が教育に及ぼした最も深甚な影響の一つである。第二に、近世の文化は、教育の制度を確立し、實際教育を完備せしめた。古代・中世に通ずる教育の一大缺陷は、制度の不備であつた。制度の不備は、同時に實際教育の不完全であつた。近世の文化の發達は、國家組織の整頓と相俟つて、教育制度を確立せしめた。殊に、義務教育制度の實施の如きは、教育制度の沿革史上にも特筆すべきことであらう。初等教育・中等教育・高等教育其の他のあらゆる教育制度が合理的・系統的に確立したことは、近世期に於ける一大特徴である。制度の確立に伴つて、實際教育も大に其の内容を改め、古代及び中世とは、全く隔世の感が起るやうになつた。第三に、近世の文化は、教育思想を發達せしめた。古代に於ても中世に於ても多くの人々が教育上の意見を述べて居る。併し、其の意見は、何れもみな斷片的の偶感に過ぎなかつた。教育思想として傳へるに足るやうなものは極めて少ない。然るに、近世に至り、教育の意義を正しく自覺するやうになつてから、教育の思想が次第に進歩して來た。殊に、近世の哲學は、教育思想に鞏固な根據を與へた。從來の如く、單なる斷片的意見のみ止まらず、學術的根柢の上に立てる種々の思想が續々と現はれ、堂々たる教育學の體系も生ずるやうになつた。これも亦近世の文化が教育上に及ぼした著しい影響の一つと見なければならぬ。

## 第二章 第十六世紀の教育及教育思想

### 第一節 文藝復興と教育

#### 文藝復興の起原と其の影響

文藝復興の意義や起原は、既にこれを述べ盡した。即ちこれは希臘・羅馬の古典を通して其の精神を復活させようとする文化的大運動である。此の運動は、第十四世紀から第十六世紀へかけて行はれた。先づ伊太利に其の端を發し、歐洲の全土に波及した。此の運動が伊太利から起つたのは、こゝに希臘・羅馬の古典や又は風習が最も多く残つて居たからである。

文藝復興の先驅となつた者は、前に述べた通り、ダンテ、ペトラルカ、ホッカチオ等の如き伊太利の詩人であつた。これ等の詩人は、第十四世紀の頃、大に古學研究の必要を叫び、進んで希臘・羅馬の古典を研究した。恰かも其の頃



東羅馬帝國がトルコ人の爲めに滅ぼされて、東羅馬の古典學者が悉く伊太利に避難して來た。伊太利人は、これ等の古典學者を歓迎して、大にこれを優遇した。さうして、彼等に就いて古典を研究した。こゝに於て、伊太利には、希臘・羅馬の文化が復活して、燦爛たる光輝を放ち、諸方より來て學ぶ者も次第に其の數を増した。當時、また印刷術の發明に伴ひ、書籍が普及したので、其の研究熱は、尙ほ一層旺盛になつた。かくの如く、伊太利に其の端を發した思想上の革新運動は、漸次他の諸國に波及して、歐洲全土を其の渦中に投げしむるに至つた。

**文藝復興と教育思想**

文藝復興は、種々の方面に種々の影響を與へた。此の文藝復興が、教育思想に與へた影響は、人文主義の勃興である。人文主義(Humanism)は、またこれを人道主義とも云ふ。希臘・羅馬の古典文藝に含まれて居る精神に觸れて、自由に人間性を助長せしめようとするものである。人文主義は、中世の教權萬能主義に基づく形式主義・禁欲主義と、全く相反して居る。人文主義は、希臘・羅馬の古典古語を以て唯一の教材とした。故に、人文主義は、自ら古語の學習に重きを置いた。これが人文主義の教育の特徴の一つである。人文主義の本義は、古典や古語を通して、希臘・羅馬の精神を復活せしめることにあつた。古典や古語の學習が其の目的ではなかつた。其の精神を體得する手段として、古典や古語を學習したのである。併し、後には次第に目的と手段とを顛倒して、思想よりも古典や古語を重んずるやうな傾向を生じた。次に思想上から見た人文主義教育の特徴を擧げて見よう。人文主義は、希臘・羅馬の精神の復興である。従つて、希臘思想の特色たる審美主義・理性主義が其の思想の基調をなして居た。また中世期の基督教教育の超自然主義に比すれば、遙かに濃厚な自然主義的色彩を有するものであつた。基督教では、現世生活を卑しめ、禁欲主義を重んじた結果、體育等は、全くこれを輕視した。新人文主義の教育思想は、

此の點に於ても亦全く基督教のそれと相反して居たのである。此の思想上の特徴に就いては、後にも述べる機會があらう。

**文藝復興と實際教育**

文藝の復興は、たゞ教育思想のみならず、實際教育にも種々の影響を及ぼした。基督教本位の教育が、教育を信仰の方便として考へた思想を根柢から破壊した。さうして、現世の生活に必要な知識・技能を授け、現世に於て活動し得る人物を養成しなければならぬことを教へた。こゝに於て、教育の精神、教科の内容等を一變せしめたのである。

**文藝復興と初等教育** 文藝復興は、特に中等教育及び大學教育に對して大なる影響を及ぼした。初等教育は、幼稚な兒童の教育である。人文主義の教育に於て重んじた古典や古語の研究の如きものは、初等教育の内容上に何等の影響をも及ぼさなかつた。たゞ初等教育の必要を自覺せしめたのみであつた。然るに、中等學校及び大學等に於ては、其の學科の内容に著しい改正を促した。

**文藝復興と中等教育** 文藝復興の中等教育に及ぼした影響の例を擧げて見れば、伊太利に於ては、諸侯が競つて新しい中等學校を起した。其の中でも、マントヴァ侯の設立したヴィットリノの學校の如きは、特に著名なものであつた。ヴィットリノは、マントヴァ侯に招かれて、四十五歳の時に此の學校を創立して、二十三年間自らこれを監督した。此の學校に入學した者は、皇族其の他の貴族や、ヴィットリノの友人の子弟であつた。ヴィットリノは、精神・身體及び道徳を調和的に發達せしめ、國家のため基督教會の爲めに活動し得る人物を養成することを教育の理想とした。其の目的を達する手段として、彼は、古典研究の必要を認め、最初には先づ羅甸語の練習をさせた。十歳



以前の児童には、記憶と誦讀とを主とし、長ずるに従つて高尚な文章を學ばしめた。後には教父の手に成れる著書や七自由教科等をも授けた。教授の方法は、筆記・翻譯・説明等によつた。體育の方面にも注意し、相撲・舞踊・競走・跳躍等の遊戯を奨励した。獨逸に於ては、第十六世紀の頃に王侯學校が起つた。此の學校は、もと王侯の保護によつて成れる寄宿舎であつたが、次第に人文主義の教育を施すやうになつたのである。また中世期の末に起つた羅句語學

第十圖



文藝復興時代の宮廷學校

校は、人文主義の影響を受け、次第に其の内容を改めてギムナジウム (Gymnasium) となつた。羅句語學校は、もと大學の準備教育機關であつたが、人文主義の刺激を受けて、其の教科の中に羅句語・希臘語・ヘブライ語を加へ、また修辭學や數學等を加へた。一五三七年に、ヨハネス・スツルム (Johannes Sturm) がストラスブルグに設立したギムナジウムは、最も著名なものである。スツルムは、敬虔の念に富む知識のある雄辯家の養成と教育の目的とした。教科としては、宗教問答及び信仰個條、羅句語及び羅句文學等を擧げ、こ

れを實際生活に應用することに力を注いだ。

英國に於ても亦中世の終に起つた公衆學校や文法學校の内容を改めて、人文主義的な教育を施した。セント・ポールの學長ジョン・コレットの設立した學校は、人文主義に基づく教育機關として最も代表的なものであつた。これ等の學校では、古典及び古語の研究を大に奨励すると共に、また嚴重な宗教的教育を施した。

人文主義と大學教育 人文主義は、大學教育の内容に大なる改善を加へた。人文主義者は、中世期の大學に於て中心教科と認められて居た羅句語を、最も不純なものとして排斥した。故に、中世期の大學に於て最も基礎的な教科となつて居た文法は、人文主義によつて最も不必要な教科となつてしまつたのである。人文主義者は、また中世の大學に於て主要な教科となつて居た哲學・神學及び法學等を盡く排斥した。ペトラルカは、哲學を辯證的詭辯と名づけ、マギステルを辯證法小賣人と云つて居る。人文主義は、中世期の大學と全く教科の價值に關する見解を異にして居たのである。かくの如く、人文主義は、從來の教科を盡く排斥し、重要な教科として詩と雄辯とを擧げた。其の中でも特にシセロやヴァーギルの著書を重んじた。故に、第十五世紀以後には、人文主義がシセロニズムと稱せられた。人文主義者は、詩と雄辯とを最も重要な學科とした。併しながら、此の詩及び雄辯の中には、哲學・歴史・文法・修辭學其の他の種々の教科を含んで居た。古代の希臘・羅馬に於ける文化の全體に互れるものであつた。

## 第二節 人文主義の教育思想

文藝復興が教育思想上に及ぼした影響の最も顯著なものは、人文主義の勃興であつた。これは既に述べて置いた通りである。人文主義の教育思想及び教育思想家に就いて、ここに簡単な説明を試みたいと思ふ。

### 伊太利に於ける人文主義と教育思想

伊太利は、人文主義の發祥地である。伊太利の人文主義は、其の特色として、第一に、宗教及び道德を輕侮したこと、第二に、シセロニズムを現出したことを擧げなければならない。シセロニズムとは、シセロの著書を重んじ、其の文章を形式的に模倣した人文主義の一傾向である。自由研究を標榜して



起つた人文主義の精神から見れば、明かに邪道に墮ちたものと云つてよい。其の他自然主義・現實主義・個人主義・理性主義の如き、人文主義と共通した特徴に就いては、特にこれを列挙するまでもない。

伊太利の人文主義者として著名なるは、前にも述べた通り、ダンテ、ペトラルカ、ホッカチオ等の詩人である。ダンテは、フロレンスの人、「神曲」(Divina Comedia)の名著によつて、其の名を後世に傳へて居る。彼の思想は、未だ中世期の思想を十分に脱却したものではなかつた。ペトラルカは、伊太利に於ける模範的の人文主義者と稱せられて居る。終生を古典の蒐集と研究とに費やした篤學者である。中世期の偏狭な學風を脱して、自由研究の必要を認めたとて、ダンテに一步を進めた。教育に關する著書を遺して居ないが、彼の思想は、教育思想上にも種々の影響を及ぼした。ホッカチオは、純粹の文士である。希臘語を深く研究し、他の人文主義者に率先して、ホメーロスのイリアス及びオデッセース等を受讀した。

人文主義の影響を受けて、人文主義的教育思想を唱へた最も著名な教育者を擧げて見れば、ヴェルゼリオ、ヴェジオ、ヴィトリノ、ピッコロミニ、フィレルフォ等である。文藝復興時代の教育思想に、最大の影響を與へたのは、羅馬の教育學者クインチリアヌスの教育説であつた。従つて、これ等の人々の多くは、何れもみなクインチリアヌスの教育説から何等かの暗示を得て居る。

**ヴェルゼリオの教育説** 文藝復興時代に於て、最初に教育を論じた伊太利の人文主義者は、ヴェルゼリオ(Pier Paolo Vergerios. 1319—1428)である。パドヴァ大學の教授として知られた。一四〇〇年に「高尚なる性格と自由科學」と云ふ著書を公にした。

ヴェルゼリオは、從來の僧院教育に反對して、身體及び精神を調和的に發達せしめ、現實社會に於て力強き活動の出来る人物を養成することを教育の理想とした。其の手段として早教育の必要を唱へた。幼弱な兒童の精神は、陶冶の可能性を多くもつて居るから、かゝる時代に學問や技藝の基礎をつくらなければならないと云ふのが彼の意見であつた。彼はまた道德教育を重んじた。幼年兒童には、肉體的感覚を刺激するやうな娛樂を遠ざけ、飲食及び睡眠其の他に關する良習慣を早くから養はなければならぬと言つて居る。教授科目としては、中世期と同じく自由教科を擧げた。また個性教育の必要を唱へ、嚴重な苛責を極力排斥した。體育を重んじ、遊戲の價值を認めたとて、希臘・羅馬の教育思想の復活と見てよい。

**ヴェジオの教育** ヴェジオ(Maffes Vegio. 1406—1458)は、セントベートル寺の監督として知られた。人文主義を奉じ、古典の研究に力を盡したが、同時にまた基督教を信じた。其の思想は、禁欲的・宗教的・保守的色彩に富んで居る。文藝復興時代の教育思想を代表するものではなかつた。併しながら、「兒童教育論」の名著は、當時の教育社會に最も廣く讀まれたので、近世初頭の教育思想家として其の名を逸することは出来ない。

ヴェジオは、其の著書「兒童教育論」の第一卷に於て、兩親の義務を論じた。教育は、兒童の出生以前から始めなければならないと云ひ、結婚前の注意、出産前後の注意を詳細に述べて居る。殊に幼兒の訓練に就いては、強迫や罵詈や體罰を避け、善良なる模範によつて兒童を導かなければならぬことを力説した。第二卷に於ては、學習論や教師論を述べた。教授は七歳から始めること、最初の教育は、家庭に於てこれを行はなければならぬこと、學校及び教師は、これを選択する必要のあること、學科の難易は、兒童の年齢と並行せしめること、賞讃と叱責によつて兒童の



名譽心に訴へること等、種々の意見を發表して居る。また教授の方法に關しては、生徒の競争心を鼓舞することを必要とし、學んだところを互に誦誦し合ふこと、これを言語によつて發表すること、討論によつて知識を確實にするこゝと等を有効な方便とした。更に第三卷に於ては、職業の選擇や女子教育に就いて述べ、第四卷以下第六卷までの三卷に於ては道徳に關する問題を論じた。

**北歐に於ける人文主義と教育思想**

伊太利の人文主義が獨逸及び佛蘭西の方面に傳播したのは、伊太利に留學した者が歸郷してこれを其の地方に鼓吹したことも、勿論、其の原因をなして居る。併し、ヒエロニマイナー(Hieronymianer)の宣傳もこれを輕視することは出来ない。これは、ゲルハルド・グローテ(Gerhard Grote, 1781-1851)を開祖とせる宗教團體である。ヒエロニマイナーは、「共同生活仲間」を意味して居る。此の宗教團體は、和蘭の地方に勢力を得た。最初は、専ら宗教的の修養に關するもののみを研究して居たが、當時の宗教書には、羅旬語で書かれたものが多かつたから、自ら羅旬語の研究を必要とするやうになり、學校を設立して羅旬語を研究して居る中に、漸次人文主義に接近したのである。

北歐の人文主義が、伊太利のそれと異なるは、宗教・道徳を尊重したことであつた。伊太利の人文主義は、宗教・道徳に對して輕侮的態度を取つた。然るに、北歐の人文主義者は、これを尊重した。其の結果は、やがて宗教改革の偉業がこゝに其の緒を發するに至つたのである。

北歐の人文主義者中、教育思想上に傳ふべき者は、アグリコラ、エラスムス、ウインベリング、ヴィヴス、アスカム等である。

**アグリコラの教育説**

アグリコラ(Rudolphus Agricola, 1483-1535)は、和蘭に生れ、ルヴァン大學に於て古典を學び、巴里に赴きて人文主義の學者ウエッセルに師事した。後年、ハイデルベルヒ大學の講師となり、聖書の研究に身を委ねた。希臘語の造詣が非常に深かつた。獨逸に於ける最初の人文主義者である。代表的な著書には、一四八四年に出版した「研究法論」と云ふのがある。

**學科の選擇**

アグリコラは、先づ學科の選擇に就いて、次のやうな意見を述べて居る。修むべき學科は、天性によつて決定しなければならない。例へば、法律家に適する性格の者には、法律を修めしめ、醫師に適する性格の者には醫學を修めしめるのである。併しながら、哲學のみは、如何なる學科を修める者もみなこれを學ばなければならない。何となれば、總べての問題を正しく考察し、且つ適當に發表するには、哲學的教養を必要とするからである。哲學には自然哲學と道徳哲學とある。自然界の研究は、精神的陶冶のために最良の手段である。吾人が地理や動物や植物のことを學ばなければならぬ理由は、それが陶冶の手段としての價值を有して居るからである。また道徳哲學は吾人の生活を淨化するものである。聖書の研究は、道徳哲學の中で最も主要なる地位にある。吾人は、これによつて其の生活を神聖ならしめることが出来る。自然の研究も道徳の研究も、希臘・羅馬の書物に依るがよい。其の内容を知ると同時に、言語の練習をなし得る便宜がある。

**研究の方法**

研究の方法即ち學習法の根本問題として、(一)理解、(二)保持、(三)創造の三要件を擧げた。第一の理解と云ふのは、學習しやうとする事柄を正しく知覺することである。其の方便としては、讀書の必要を説いて居る。第二の保持と云ふのは、知覺した事柄を堅く記憶して忘れないこと、第三の創造と云ふのは、既に學び得た知識から



新らしい何ものかを導き出すことである。要するに、アグリコラは、個々の事物を精密に理解して、これを正確に記憶し、自由に應用し得るやうにすることを、學習法の要諦としたのである。

### エラスムスの教育説

エラスムス (Desiderius Erasmus, 1471-1536)

は、單に獨逸の人文主義者として知名

の士であるのみならず、文藝復興時代を通ずる人文主義的教育思想界の第一人者である。ロッテルダムに生れ、九歳の時、デヴェンテルに赴き、有名な文學者アレクサンドル・ヘギュースに就いて學び、其の後、更にヒエロニマイナーに屬するヨハン・シントハイムに就いて學んだ。十三歳の時に、母を失つたので、デヴェンテルを去つて、ヘルツォゲンブーフの僧庵に入り、こゝに三年間を暮し、更にスタインの僧庵に入つて仙僧生活をして居たが、法王ユリウス二世に放逐せられて、英・佛・伊等の諸國を放浪し、フライブルグに客死した。彼は、幼少の時から、其の才能を發揮した。學問の進歩が著るしく、アグリコラから大に望を囑されたこともあつた。僧庵の生活によつて、當時の宗教界の墮落を目撃し、憤慨のあまり屢々これを痛撃した。ルーテルの宗教改革は、彼の言論に刺激せられたところが少なくなかつた。彼は、放浪生活中に多くの著書を公にした。「幼少より兒童に自由教育を施す必要」「研究の方法に就いて」「兒童に必要な作法」「對話篇シセロ學徒」等は、教育に關する著書として知られて居る。

エラスムスは、教育の意見を組織的に述べて居ない。モンロー教授は、彼の教育説を評して、教育的信念の發表であると云つた。

**教育の必要** エラスムスは、基督教會の腐敗墮落を慨し、これを靈的に復活せしめることの必要を痛感した。而して、それはたゞ精神教育の力によつてのみ行はれるものと信じた。エラスムスの説によれば、基督教徒の腐敗墮落は、

彼等の無知が招いた結果であつた。人間の罪惡は、多く其の無知に原因する。故に、大にこれを教育することが必要である。特に聖書を熟知せしめなければならぬ。彼は、精神教育を重んじ、自然の研究を蔑視した。自然科学の如きものは、たゞ古典の研究に役立つ限りに於てのみ其の必要を認めた。此の點に於ては、頗る偏狹な教育意見を有して居た。

**教育上の根本思想** エラスムスは、教育の目的として、**第一** 敬虔の念を養ふこと、**第二** 自由學科を愛して徹底的に學習する習慣を養ふこと、**第三** 人生の本務に對する準備をなさしめること、**第四** 善良なる作法に慣れしめること等を擧げた。敬虔・學習・本務・作法等の觀念は、エラスムスの教育觀の根本的信條を形成するものであつた。

エラスムスは、教育の機會均等を主張した。教育の種類と程度とは、其の人の能力に應じて決すべきものである。貧富の懸隔や男女の性別によつて定むべきものではない。故に、人間は、貧富を問はず、男女を論ぜず、一般的の教育を受けなければならない——と云つて居る。卓見と云はなければならぬ。

**幼兒の教育** エラスムスは、教育の始期を出生以前にあるものとして、胎教の必要を認めた。また幼兒の教育に就いては、養護及び體育を重んじた。學科の教授は、七歳から始めるのを適當と考へた。七歳以前の兒童には、専ら遊戯を利用して、文字を教へたり、宗教上の儀式に馴れしめる位の程度に止めて置くのを可とした。教育上の責任は、父母がこれを負はなければならぬものとして、家庭教育を尊重した。七歳以前の教育は、主として母が其の責任者となり、七歳以後に至つて、父がこれに代はるものとした。公共教育に於ては、教師の注意が十分に行き届かず、惡風の傳播し易い虞れがあるから、なるべく私教育を施すがよい。即ち、は其の子のために私教師を聘して、個人的に注



意の行き届く教育をしなければならぬ。教師の選擇は、最も肝要な問題である。度々教師を變更するのは、教育上に種々の弊害がある。故に、豫め選擇に意を用ひ、一度び定めた以上、容易にこれを變更してはならない。學科目としては、(一)聖書及び教父の著、(二)希臘・羅馬の古典を主とし、神話・地理・農業・建築・兵學・博物學・天文學・音樂等をも授けなければならないと言つて居る。

**教授の方法** エラスムスは、教授の任務として、(一)言語に關する知識を授けること、(二)事物に關する知識を授けることの二つを挙げた。言語に關する知識は、事物に關する知識よりも先に教授するのが自然の順序である。併しながら、事物に關する知識は、最も重んずべきものである。言語の教授にのみ拘泥して、事物の知識を輕視するやうなことがあつてはならない。言語教授に就いて注意すべきことは次の通りである。言語は、先づ希臘及び羅甸の二語を先きとしなければならぬ。併し、最初から複雑な文法上の規則等を教へず、興味ある書物を講讀せしめ、自然これを模倣させるがよい。蜂は、蜜の材料を一種の草木から集めず、多くの花から求める。故に、蜂蜜から一定の香味を感じることはない。古代語の模倣も亦かくの如き方法によるを可とする。次に、事物の知識として、特に價值あるものは、地理・歴史・博物等の知識である。これ等の知識を授けるには、希臘の學者の著書によらなければならぬ。宗教的陶冶は、十四歳以後から始むべきものである。基督や其の他の聖賢の生活を説き、教育者自身が模範を示し、神の偉力と其の慈愛とを悟らしめるやうにしなければならぬ。

### ウインペリグの教育説

エラスムスの外にも、獨逸からは多くの人文主義者を出した。ウインペリグ、ウエッセル、ヘギュース、ロイヒリン等は、其の著名な者である。就中、ウインペリグは、教育思想史上に於て、

特に傳ふべきものであつた。ウインペリグ (Jakob Wimpfeling. 1450—1528) は、エルザスに生れ、後にハイデルベルヒ大學の總長となつた人である。「讀書入門」「青年期」等の著書の中に教育上の意見を述べた。

ウインペリグの教育意見も他の人文主義者のそれと大同小異である。修學の順序としては、先づ羅甸語から始めることを可とした。併し、其の基礎的學習とも云ふべき文法等に長く止まることなく、早くから文學者・歴史家及び雄辯家等の著作を讀ましめ、其の間に於て自然に語學の力を高めるやうにしなければならぬと言つて居る。詳しいことはこれを述べるまでもあるまい。

ウインペリグは、教育を最も尊重して、これを宗教の基礎とし、國家自衛の要素と考へた。如何なる地位、如何なる職業にある者にもみな教育を必要とした。

### ヴィヴスの教育説

ヴィヴス (Juan Luis Vives. 1492—1540) は、イスパニヤの人文主義を代表する者である。ヴァレンシヤに生れ、十七歳までは、嚴重なる中世期風の基督教的教育を受けたが、其の後、巴里大學に入學してから、古典の研究に心を傾けた。巴里大學卒業後、リュージの大學教授になつた。「偽學者に對して」「賢人問答」「基督教婦人の教育」「知識入門」「教授科目論」等の著書を公刊して教育意見を發表した。彼は、當時の世の中に行はれて居た中世期風の教育を猛烈に攻撃して、人文主義の爲めに氣を吐いた。

ヴィヴスは、中世期の教育を大に攻撃したが、中世期の思想から全然脱して居なかつた。彼は、現實社會の活動に堪え得る人物の養成を教育の目的としたが、また一面に於て、宗教的人格の陶冶を重んじた。彼も亦教育の始期を生以前に求め、男女の結婚等に關する注意を述べた。教育の責任者として父母を挙げ、家庭教育を重んじた點も、



ラスムスとよく似て居る。家庭は教育の場所として公立學校よりもよい。故に、事情の許す限りは、家庭教師に就いて教育せしめなければならない。併し、これには實行の困難が伴ふ。よつて、茲に學校の必要を生ずる。學校に於ては、宗教・道德に關するものと、實際生活上に役立つものとを教へるのみでよい。中世期の教科には、あまり瑣末な註釋や無用の討論が多過ぎた。これ等の教科には大に改正を加へなければならぬ。教授上注意すべきことは、(一)個性を十分に尊重すること、(二)興味を惹起し、自由に學習せしむること、(三)直觀及び歸納法を重んずること、(四)個々の場合より全體に進むこと、(五)既知より未知に進むこと、(六)易より難に進むこと、(七)練習・反覆・綜合を重んずること等である。ヴィヴスの教授論は、頗る詳細に亘つて居る。

ヴィヴスは、女子教育に關してもまた種々の意見を述べた。彼の説によれば、女子教育の目的は、宗教的・道德的基礎の上に、妻としての本務を十分に盡し得る者を養成するにあつた。明瞭な賢母良妻主義である。女子の教育に就いては、特に家庭教育を重んじた。女子は、家庭に於て母の嚴肅な監督の下に教育せられなければならない、教育の程度は、男子よりも低くてよい。専ら家事に關することを授け、讀物としては新約全書の如きものを解するやうにするだけでよいと言つて居る。

**アスカムの教育説** アスカム (Roger Ascham, 1515-1568) は、英國に於ける人文主義の代表者である。エラスムスが英國に渡つて、オックスフォード大學及びケンブリッジ大學に於て、人文主義を講義した爲めに、英國からも多くの人文主義者が出た。アスカムも其の一人である。外にもトーマス・モーア及びジョン・コレット等の如き有名な人々がある。モーアは、ユートピアの名著によつて知られて居る。アスカムは、ヨークシヤに生れ、後にエリサ

ベス女王の家庭教師となつた。教育上の意見を述べた著書には、「學校教育」と題するものがある。

アスカムは、人道を體認した善良な紳士の養成を以て教育の目的とした。其の教科としては、希臘・羅馬の古典を挙げ、其の方法としては、二重翻譯法を唱へた。二重翻譯法と云ふのは、希臘・羅典語を教授する時、教師が先づ其の原文を解説して、生徒をしてこれを英文に翻譯せしめ、更に檢閲して誤謬を訂正した後、再び生徒をして原文に翻譯せしめることである。

アスカムは、體育を重んじ、訓練に注意を拂つた。當時行はれて居た苛酷な體罰を排し、愛を本とする莫大な訓練を高唱した。

### 。第三節 宗教改革と教育

**宗教改革の由來と其の影響** 宗教改革 (Reformation) は、中世期の教會本位の宗教を排斥し、基督教の根本

精神を研究し、眞の信仰に立ち歸らうとする運動である。中世期の基督教は、教會萬能となり、それが爲めに、眞の信仰と云ふものが全く没却されるやうになつてしまつた。宗教改革は、かくの如き教會本位の宗教に對する反抗の叫びに外ならぬ。宗教改革の運動の起れる原因は、これを内外二方面に分けて見ることが出来る。

**宗教改革の内的原因** 宗教改革の起れる内的原因は、基督教會の腐敗墮落である。スコラ哲學が起つて、基督教の教義を合理的に組織してから、基督教の信仰は、歐洲全土の民心を征服するに至つた。それが爲めに、羅馬教會の勢力は、益々高まつた。さうして、遂に、羅馬法王は、たゞ宗教上の權力のみならず、政治上の權力をも有するやうになつ



た。かくの如く、羅馬教會の勢力の擴大するにつれ、神權を濫用し教會の蔭にかくれて悪事を働く者が多くなつた。殊に第十五・六世紀頃に至つては、僧侶の腐敗墮落が其の極に達した。羅馬法王をはじめ、多くの僧侶は、豪華な生活をして財力の窮乏を來した。それが爲めに、遂には贖罪符を發行して信者から資金を集めるやうになつた。教會に對する反抗の聲が起らざるを得ないのであつた。

宗教改革の外的原因。外的原因の中、最も力強きものは、云ふまでもなく、文藝復興であつた。文藝復興は、中世期に於ける教權の壓迫を脱し、希臘・羅馬當時の自由な社會に復歸しようとする精神的の運動である。宗教改革は、此の文藝復興の精神を信仰の方面に徹底せしめたものに外ならぬ。故に、宗教改革は、文藝復興の繼續運動と見ることも出来る。何れも個人の自由を重んじ、教權の束縛を離れようとする主觀主義・個人主義の運動である。併し、文藝復興が基督教の文化を棄て、希臘・羅馬の文化に復歸しようとしたのに反し、宗教改革は、基督教の信仰を棄てず、其の信仰の本義に徹底しようとした。此の點が文藝復興と宗教改革との相違するところである。

其の外にも尙ほ外部から宗教改革を促したものがあつた。十字軍の失敗の如きもそれであつた。從來、基督教徒は、神の萬能を信じて疑はなかつた。十字軍に従つた基督教徒は、神の爲めに戦ふ神聖な軍であると思つて居た。従つて、神は、必ず我等を守護し、我等に幸福を與へるものと信じて居た。然るに、其の戦争の結果は、悉く此の期待を裏切つた。神の萬能に對する信念がこゝに自ら動搖して來た。それはやがて教會の信用の失墜となり、宗教改革の氣運を進めることになつたのである。

宗教改革の功績者。宗教改革は、獨逸のマルチン・ルーテルによつてはじめて成功したものである。ルーテルは、

宗教改革の運動史上に於ける第一の功績者と云はなければならない。併しながら、宗教改革は、必ずしもルーテル一人の力によつて成れるものでもなく、またルーテルの時にはじまつた事でもなかつた。羅馬教會の改革は、既に第十三・四世紀の頃から屢々唱へられて居る。第十三世紀の頃、佛國に起つたワルデンセスの徒の如きは、最も古い宗教改革運動者であつた。これは、リヨンのペートル・ワルドー (Peter Waldo of Lyons) と云ふ人の教を奉ずるものである。羅馬法王の教權を脱して、一切の宗教的階級を撤發し、基督教の本義に立ち歸らうとした。後の宗教改革論者と殆ど同じ思想の上に立つて居る。また第十四世紀の中頃には、ジョン・ウイクリフ (John Wycliff. 1320—1364) と云ふ者が、これまた同じ理想を抱いて、信仰の獨立を叫び、アヴィニオンに一撥を起した。ウイクリフの思想を祖述したボヘミヤのフス (Huss) も亦大に教會改革の急務を痛論した。併しながら、これ等の者は、何れもみな異端者と見做されて、苛酷な教會の壓迫を蒙り、自ら滅びてしまつたのである。然るに、其の後、文藝復興によつて自由の精神が高まつて來たところへ、基督教會は、益々墮落して社會の信用を全く失つてしまつたから、ルーテルの宣告がはしなくも此の一大事を成し遂げしめる導火線となつたのであつた。

ルーテルが宗教改革を叫んだ直接の動機は、羅馬法王の贖罪符に對する反感であつた。第十六世紀の初めに、羅馬法王レオ第十世は、羅馬のセント・ペートル寺を改築するため、其の信者に贖罪符なるものを賣りつけた。これは、諸國の信者に向つて、罪障贖宥のために淨財を寄附せしめようとするものである。法王の命令を受けた各地の僧侶は、少しでも多くの寄附金を集めようとして、種々の卑劣な運動をした。當時、ウィッテンベルヒ大學の神學教授をして居たマルチン・ルーテルは、これを見て大に憤慨し、九十五箇條の意見書を公表して、羅馬教會を攻撃した。法王は



ルuterに説諭を加へたが、聞き入れないので、遂に彼を破門した。これが宗教改革の發端であつた。ルuterの言は、獨逸國內にも多くの共鳴者を出した。諸侯の中にも賛成者が少なくなかつた。併し、獨逸の國會は、ルuterの説を非難し、彼を邪教者と認め、法律の保護を加へざることを決議した。ルuterの身邊が危険になつたので、サクソニア侯は、彼をワルトブルグの居城に隠して保護を加へた。



圖九十第

圖の宥贖罪

ルuterが獨逸に於て宗教改革の烽火を擧げた時に、瑞西人ツウイングリは、更に一層激烈な革新論を唱へ、ツウイングリにや、後れて、佛國人カルヴィンも別派の新説を唱へた。これ等の宗教改革論者は、何れもみな其の政府並に教會から種々の迫害を受けた。

かくして、宗教改革を標榜して起つた新教は、三派に分れて、次第に舊教の領域を侵し、牢固として抜くことの出来ない勢力を扶植した。三派の中、ルuter派は、主として獨逸・

丁抹・瑞典・那威に、ツウイングリ派は、主として瑞西に、カルヴィン派は、佛國及び英國に普及した。

新教の勃興に伴ひ、羅馬教會も亦大に覺醒して、種々の恢復運動を起した。一四四五年から一四五六年に亘る、トリエントの宗教會議の如きは、其の最も顯著な一例である。また羅馬教會に於ては、イエス會を公認して、これを諸國に傳導せしめた。此の會は、イスパニア人イグナチオ・ロヨラ (Ignatio Loyola. 1491-1556) が同志と共に、舊教

擁護の目的を以て創立したものであつた。かくして、舊教の勢力も次第に振興し兩教徒の軋轢が到る處に起つた。

宗教改革と教育思想

宗教改革は、文藝復興と同じく、教育思想上にも種々の影響を及ぼした。宗教改革は、

もと文藝復興の精神を宗教の方面に徹底せしめたもので、文藝復興の繼續運動に外ならぬ。従つて、宗教改革者の教育思想は、人文主義教育者の主張と類似した點も少なくない。例へば、理性主義・主知主義・主觀主義の上に立脚せる教育説を唱へたことなどである。伊太利の人文主義者も、北歐の人



圖十二第

ンイヅルカ

文主義者も、みな理性を尊重した。教權に對する盲目的信仰から離れて、自由な世界に復歸しようとするには、理性の力によつて因襲的なる舊慣を打破して行かなければならなかつたからである。宗教改革も亦同じことであつた。羅馬教會の束縛を脱して眞の信仰に立ち歸らうとするには、理性の力によつて聖書を解釋し、其の中に含まれた基督教の精神に觸れなければならなかつた。聖書解釋の關鍵は、たゞ理性の

力のみにあつた。ルuterの如きは、理性に反對することこれ即ち神に反對するものであると極言して居る。理性主義は、自ら主知主義に歸着する。宗教改革論者は、何れもみな知育を重んじた。次に、宗教改革は、主觀主義の教育思想と結びついた。一切の外的束縛を斥け、信仰心の上に立つ宗教を是認するものであるから、これを教育思想上に推及すれば、自ら主觀主義となるのである。宗教改革は、中世期の階級主義を排斥し、原始基督教の精神に復り、人間の平等を主張した。従つて、宗教改革論者は、一般民衆の教育を重んじた。宗教改革は、また宗教教育の必要を教



へた。此の點は人文主義の教育とや、其の趣を異にして居る。北歐の人文主義者は、伊太利のそれの如く宗教を輕視しなかつた。併しながら、人文主義其のものの精神から云へば、基督教を斥けて、希臘・羅馬の學術や文藝を復活せしめようと云ふのであるから、宗教教育を特に重んずると云ふやうなことはない。

### 宗教改革と實際教育

宗教改革論者の中には、教育を重んじて、これに關する種々の意見を發表した者が多かつた。加之、彼等の中には、自ら實際教育に従事し、教育家として後に傳へられて居る者も少なくない。故に、宗教改革は、實際教育に對しても亦頗る著しい影響を及ぼしたのである。

### 宗教改革と初等教育

人類平等觀の上に立てる宗教改革論者は、何れもみな教育の機會均等を唱へ、特に初等教育を重んじた。宗教改革論者によれば、神の道を吾人に教へるものは、たと聖書のみであつた。聖書に含まれた天啓を自己の理性によつて解決すること、これ即ち神の國に生れ、永久の福祉を受ける唯一の道であつた。従つて、何人にもみな此の聖書を讀解し得るだけの教養を與へることを必要とした。如何なる階級にある者も、如何なる職業に従事する者も、自ら聖書を讀んで、其の中に含まれた天啓を悟らなければならぬ。さもなければ、眞の信仰は求められないのであつた。宗教改革論者が最も熱心に初等教育を奨励したのは、新教の思想から生じて來る當然の結論であつた。史家コンペレーは曰ふ。「小學校は、新教の生める兒童にして、宗教改革は、其の搖籃なり。」——と。ルーテルは、最も初等教育の普及に力を注いだ。一五二四年には、「獨逸各市の市長及び市會議員に告げて、基督教學校を設立・維持すべきことを論ず。」と題する公開狀を發して、初等教育の必要を力説した。彼はまた屢々著書を公にして、兒童の教育に就いて、一般市民及び父兄の注意を促した。これ等のことが其の原因となり、獨逸の各市には、次第に

小學校が普及して來た。全く小學校を設けることの出來ない村落に於ては、其の地方の牧師が寺の番人等を助手として、初歩の教育を授けた。これを寺僕學校 (Küsterschule) と名づけた。一五五九年のウイテンベルヒ教會法によれば、教會の番人を置ける村落には必ず學校を設け、習字・讀書・宗教問答・讚美歌等を教授すべきことを規定して居る。

英國に於ても亦新教徒の力によつて大に初等教育が進歩した。カルヴィンの影響を受けたジョン・ノックスの努力により、スコットランドに於ては、寺領監督の下に無月謝小學校が設立せられるやうになつた。また一六一六年には、樞密院が各寺領に小學校を設立すべきことを命ずるに至つた。かくして、英國の小學校は、第十九世紀の中頃まで、専ら宗教團體に屬して發達したのである。

宗教改革と中等教育 宗教改革論者は、中等教育の發達にも大に力を盡した。人文主義者の中には、新教主義の精神に反するものとして、宗教改革に反對した者もあつた。併しながら、新教徒は、人文主義と握手しようとした。

故に、新教の教會が増加するやうになつてから、中等學校に於て、次第に人文主義が採用せられるに至つた。

ルーテルも中等教育の必要を説き、且つ其の教科に對して種々の意見を發表したが、獨逸の中等教育に最も大なる貢獻をしたのはメラニヒトンであつた。彼は、サクソニヤ選帝侯の求めに應じて、中等學校の學制を定めた。其の學制によれば、中等學校の生徒は、これを三級に分けられて居た。而して、其の第一級に於ては、主として、宗教改革團體に於て編纂した「宗教入門」を讀ませ、第二級に於ては、主として、イソップ及び獨逸の古典學者モゼラヌスの著書を讀ませ、且つエラスムスの文章等を翻譯させ、第三級に於ては、主として、ヴァーヂル、オヴィヂゥス、シ



セロ等の文章を讀ませ、且つ其の文法を學ばせることになつて居た。南方獨逸の中等學校の中には、希臘語を課したところもあつた。

カルヴィン派の新教徒は、コレヂを設けて、大に新教主義の中等教育を普及せしめた。コレヂの目的は、學問のある信仰者を養成することにあつた。コレヂの教科目には、人文主義的のものと宗教に關するものが含まれて居た。七級に分れ、最初は國語の書き方及び綴方よりはじまり、次第に羅甸語や希臘語によつて古典の譯讀をなさしめるやうになつて居たのである。コレヂの教育は、先づ佛蘭西の新教徒の間に広まり、和蘭・英國・北米合衆國等の各地に傳はつた。

また英國に於ては、エラスムス及びヨハネス・スツルムの盡力によつて公衆學校の改革が行はれた。而して、其の公衆學校の制度は、第十九世紀に至るまで續いた。

宗教改革と大學教育 宗教改革の結果、多數の僧院は、其の財産を沒收せられた。而して、其の沒收せられた財産は、大學に寄附せられた。かくして、僧院の沒落は、自ら大學の發展を促すに至つた。また從來は羅馬法王の權力の下にあつた大學が、其の支配を脱して國王の監督に歸した。それが爲めに、大學の内容が次第に人文主義的に改革せられて行つた。

獨逸の大學の中に於て、最も早く且つ多く宗教改革の影響を受けたのは、ルーテルを出したウィッテンベルヒ大學であつた。ウィッテンベルヒ大學に於ては、一五三六年に大改革を行ひ、人文的教科目を非常に擴大し、文法・辯證法・修辭學・物理學・倫理學・詩學・希臘語・ヘブライ語等に各一人づゝの正教授を置き、外に數學に二人の正教

授を置いた。即ち哲學科の正教授が十人上つたのである。ライプツッヒ大學に於ても、一五三九年に學科を改正して、哲學科に七人の正教授を置いた。其の學科別は、ウィッテンベルヒ大學とほぼ同様であつた。各大學は、學科の改革と共に教授法等にも改善を加へ、中世期の大學に於て盛んに行はれた問答的討論を廢し、それに代へるに朗讀法を以てした。また第十六世紀中には、新教主義によつて新設せられた大學もあつた。一五二七年に開校したマールブルグ大學、一五四四年に開校したケーニヒスベルヒ大學、一五五六年に開校したイェナ大學等がそれである。

英國に於ては、ケンブリッジ大學が改革運動の中心となつた。其の主動者は、チンダル(John Tyndall, 1488-1536)及びラチマー(William Latimer, 1485-1535)等である。ケンブリッジ大學に於ては、文科の學科目を改めて論理學・修辭學・數學・地理・音樂・哲學とした。講義は、主として教科書によつた。アリストテレス、アグリコラ、メラニヒトン等の著書を多く用ひた。學生は、講義を聽く外に、討論や講演等をしなければならぬことになつて居た。

#### 第四節 宗教改革時代の教育思想

概説 宗教改革は、教育思想及び實際教育に種々の影響を及ぼした。近世の教育が宗教改革によつて其の發達を促されたことは少なくない。宗教改革は、同時に教育の改革であつた。宗教改革論者の多くは、最も熱心に教育上の意見を發表した。ルーテルが獨逸市民に向つて普通教育の必要を叫び、且つ屢々教育に關する著書を公にして、民衆の覺醒を促したことは前に述べた。またメラニヒトンが獨逸の學制に參與したことや、カルヴィン派の新教徒がコレヂを創立して、中等教育に多大の貢獻をしたことも既に述べた通りである。宗教改革論者には、教育思想家であり、且



つ實際教育家である者が多かつた。こゝに其の人々の教育思想を詳細に漏れなく紹介することは出来ない。最も著名なもののみを簡単に概説することにした。

### ルータールの教育説

宗教改革の中心人物マルチン・ルータール (Martin Luther, 1483—1566) は、アイズレーベ

ンに生れた。父は鑛夫であつた。マクデブルヒ及びアイゼナハ等の學校を経て、ニルフルト大學に學び、卒業後、エルフルト大學の教授となり、またウィッテンベルヒ大學の教授となつた。一五一七年に、羅馬法王の贖罪符を難じて

九十五箇條に亘る檄文を發表し、宗教改革の烽火を擧げたことは、既にこれを述べて置いた。一五二五年には、中世期に於ける宗教家の無妻主義を破棄して

カタリーナと結婚した。多くの著書の中、教育に關係のあるものを擧ぐれば、

「結婚者に就いての説教」「兒童を學校に送るべきことの説教」「翻譯聖書」「宗教問答」「讚美歌」等である。



第二十一圖

ルータール

ルータールは、最も熱心な教育の奨励者であつた。彼は、宗教家であり、學者であり、而して、教育者であつた。單に言論及び文章によつて教育の必要を鼓吹したのみならず、教育者として最も適當な性格の所有者であつた。また彼の家庭は、教育上より見て理想的なものであると稱せられて居つた。

教育の根本思想 ルータールの教育思想は、嚴肅な宗教觀の上に成り立つて居た。ルータールの説に従へば、子どもは、神の賜物であつた。従つて、両親は、子どもをして神を信する者にまで育て上げる義務を有するものとした。ルーター

ルは、教育を以て両親たる者の最大の義務としたのである。加之、ルータールは、一國の基礎が個々の家庭に存することを認め、國民の教育に對する國家の責任を論じて、強制的教育の必要を唱へた。「一國の主權者は、其の臣民をして子女を學校に入學せしめるように強制しなければならない。彼は、牧師・法律家・書記・醫師・教員等の職務に適する者を養成する務を有するが故に、また教育を強制する權利をも有するのである。彼は、戰爭の際、其の臣民に對して弓矢を取つて立つことを強制し得るならば、これに其の子女を學校に送るべきことを、一層強く命令することが出来る。何となれば、都市及び王侯の領地を荒し、有爲の人を掃蕩しようとする惡魔に對して、困難な戰を開く必要があるからである。」と言つて居る。要するに、ルータールは、眞の信仰に徹せる基督教徒を養成することを教育の目的と考へたのであつた。人間は、すべてみな神の子である。神を信することによつて救はれる。信仰は、人間のために最も大切なものである。人の子をして誠の信仰に徹せしめることは、人の子の親たるもの、人の子の支配者たるもの、何れにとつても極めて重大な責任である。誠の信仰に徹する唯一の道は、聖書に示されて居る天啓に觸れること、換言すれば、聖書を読み、自己の理性によつて其の精神を體認することにある。教會の命令に服従すること、即ち教權に盲従することは、誠の信仰に反して居る。故に、人の子をして誠の信仰に達せしめようとするには、先づこれを教育して聖書を読む力をつけなければならぬ。従つて、教育は、眞の基督教徒を養ふ根本問題である。これがルータールの教育思想の基礎であつた。

家庭教育論 ルータールの教育意見は、各方面に亘つて居る。彼は、先づ家庭教育に就いて次のやうな意見を述べた。

両親は、神の賜物たる兒童を教育して、眞の基督教徒たらしめる責任をもつて居る。従つて、家庭は、兒童教育上、



最も大切な場所である。此の家庭に於ては、先づ第一に兒童の身體を健全に育て上げなければならない。それに就いて、最も注意すべきは、悪しき遊戯を禁じ、善き遊戯を奨励することである。第二には、神に對する敬虔の念を養はなければならない。それには、神に關する物語を聞かせることや、神に祈禱することや、讚美歌を捧げることや、教會其他に於て宗教上の儀式に列せしめることが必要である。ルーテルは、家庭教育の本領を、保健と宗教心の養成の二點に置いたのである。而して、ルーテルは、家庭に於ける訓練を論じて、中世期の僧院的教育に反對した。兒童の訓練は、なるべく寛大にしなければならない。體罰の如きは、絶対に排斥すべきものであると言つて居る。

**普通教育論** ルーテルが學校教育特に普通教育の必要を力説したことは、前に述べた通りである。ルーテルの教育思想は、當然、普通教育の尊重と云ふ結論に到着せざるを得なかつた。而して、彼は、宗教的の立場から普通教育の必要を認めたのみならず、また市の發展と云ふ方面からも、極力普通教育振興の必要を叫んだ。彼は、一五二四年に於て、獨逸の市民及び市會に宛てた公開狀の中に、「たゞ其の富を増加し、堅固な城壁を築き、美しい家屋を建て、武器其他の軍備を整へるのみによつて、市の繁榮を期することは出来ない。市の繁榮は、鋭敏にして正直の徳を具へ且つ訓練の十分に行き届いた市民によつて、はじめてこれを期することが出来る。かくの如き市民は、よく其の財寶を集積保存して、其の用法を誤まらない。」と言つて居る。ルーテルが普通教育の職能を如何に解したかは、以上の言によつて明かである。ルーテルは、敬虔的な宗教的人物の養成と同時に、實際生活上に有能な市民の訓陶を、普通教育の職能と考へたのであつた。従つて、教科を選択するにも、宗教的な方面にのみ偏せず、實科的教材をも大に重んじた。

**大學教育論** ルーテルは、大學教育に關しても種々の意見をもつて居る。彼は、中世期のスコラ哲學が、アリストテレス等の哲學によつて基督教を解釋した其の態度を非難した。アリストテレスの哲學を研究することは必要である。然し、アリストテレスの哲學によつて基督教を解決しようとするのはよくない。基督教の研究は、アリストテレスの



圖二十二第

ルテールのてしと師教

哲學から獨立しなければならないといふのが其の意見であつた。理性による聖書其のものの解釋を重んずる、ルーテルの立場から云へば、當然さうならなければならない。大學に於ける教授法の改良をも主張した。中世期の如き訓詁的な研究法は、徒らに時間を空費するのみである。尙ほ一層早く適確な意義を把握し得る有効な方法によらなければならないと言つて居る。ルーテルはまた從來の大學教育に於ける準備教育の不十分であつたことを指摘した。從來の大學教育は、主要教科たる古典に關する基礎的研究が足りないと言つて居る。

**教師論** ルーテルは、教育を非常に尊重した。従つて、此の教育に従事する教師の職責の重大なことを説いた。教師にとつて最も大切な要件は、宗教心に富めること、其の職務に對して勤勉忠實なることである。勤勉にして宗教心に富める教師は、言葉を以て述べることも出来ず、金錢を以て酬ゆることも出来ないと言つて居る。かくの如き見地から、ルーテルは、教師の養成の必要を説き、其の施設を實現するために種々の盡力をした。教育上に於ける教師の地位をルーテルの如く明白に説いた者は少ない。卓見と云はなければならない。



ル・テ・ル・の・事・業・と・思・想・に・對・す・る・批・評　ル・テ・ル・は、近世文化の大恩人である。ル・テ・ル・が近世の文化に與へた貢獻は頗る大きなものである。彼の事業は、種々の方面に互つて居るが、其の中に於て、特筆すべきものは、第一、宗教の改革を實現したること、第二、教育制度の確立に參與したること、第三、著述によつて民衆の知識を啓發したることである。これ等の事業に就いては、既に述べ盡した。宗教改革が人類の歴史上に於て罕に見る大事業であることは、喋々するまでもない。其の他の事業に至つても、みなこれル・テ・ル・の名を永遠不朽ならしめるものばかりである。彼が多忙な實際運動に携はり、身邊の危険をさへ感じながら、多くの著書を遺した精力には驚嘆せざるを得ない。殊に、エラスムスの希臘語譯聖書から、聖書の全部を標準獨逸語に譯した功績の如きは、彼にしてはじめて成遂げられた大事業である。

ル・テ・ル・の思想は、其の事業の背景をなしたものであつた。事業の上に於ける功績は、同時に思想の上に於ける功績である。ル・テ・ル・は、眞の信仰を民衆の精神に復活せしめ、中世期の束縛から總べての教育を解放せしめた。宗教思想上及び教育思想上に及ぼしたル・テ・ル・の功績は、これまた實に偉大なるものと云はなければならぬ。

**メランヒトンの教育説**　メランヒトン(Philip Melancthon. 1497—1560)は、有名な人文主義者にして、同時にまた宗教改革者である。バーデン州のブレッテンに生れた。父は、信仰心の深い武器の製業者であつた。彼は、夙に人文主義の學者として聞えたロイヒリンから希臘語や羅旬語やヘブライ語を學び、大に其の感化を受けた。長じてハイドルベルヒ大學及びチュービンゲン大學等に學び、卒業後、チュービンゲン大學の講師となり、更に轉じてウィッテンベルヒ大學の教授となつた。此の學校に於てル・テ・ル・と交はり、神學に興味をもつやうになり、ル・テ・ル・の事業

を助けて、聖書の翻譯等に從事し、且つ大學に於ても神學を講じた。ル・テ・ル・の宗教改革を援助した最も大なる功勞者の一人である。ル・テ・ル・の歿後は、獨逸に於ける新教徒の首領となり、宗教改革の精神を徹底せしめる爲めに全力を傾けた。彼が獨逸の學制確立に少なからぬ貢獻をしたことは既に述べた通りである。彼は、實際教育上にも大に力を盡した。殊に「希臘語文法」「羅旬語文法」「辯證法教科書」「修辭學教科書」「物理學教科書」「倫理學教科書」等多くの中等學校教科書を編纂したことは、實際教育上に於ける彼の功績中、特筆すべきものであつた。

**其の人物と思想**　メランヒトンは、ル・テ・ル・の爲めに最もよき援助者であつた。彼とル・テ・ル・との交はり、非常に親しく、ル・テ・ル・から常に深き信頼を受けた。併しながら、其の性質は、ル・テ・ル・と全く相反して居た。ル・テ・ル・は、燃えるやうな熱情と、鐵のやうな意志を有する闘士であつた。メランヒトンには、ル・テ・ル・の如き熱情も實行力もなかつた。併しながら、彼は、深遠なる思慮や非凡の學才を有して居た。ル・テ・ル・の性格は、急進的であり、メランヒトンの性格は、漸進的であつた。前者は創業の將たるに適し、後者は守成の士たるに適して居た。ル・テ・ル・は、まことによい援助者を得たものと云はなければならぬ。ル・テ・ル・が宗教改革の大業に成功したのは、メランヒトンの後援が與つて力あるものである。かくの如く、其の性格を異にした二人は、互に足らざる所を補ふて、同じ事業のために努力した。故に、思想上から見れば、メランヒトンは、ル・テ・ル・と殆ど變はらなかつた。

メランヒトンも亦教育問題に就いて種々の意見を述べ、且つ其の意見通りにこれを實行した。

**大學教育論**　メランヒトンは、ウィッテンベルヒ大學に四十有餘年の長い間教授の地位を占めて居た。彼の講義には、非常に多くの學生が集まつた。獨逸人のみならず、英・佛・伊其の他の諸國から留學した聽講生も少なくなかつ



た。彼は、これ等の學生から多大の信頼を受けた。大學教授として彼の如く成功したものは少ない。大學教授に關する彼の意見は、此のウィッテンベルヒ大學に於て遺憾なく實現せられたのである。彼は、中期の大學に於て專制的の勢力を有して居たスコラ哲學を斥け、人文主義的の學科を重んじた。併しながら、彼は、偏狹な人文主義者のやうに宗教を斥けなかつた。彼は、非宗教的傾向を有する人文主義と、非學術的傾向を取つた信仰との調和的立場に立つよい意味の人文主義者であつた。彼は、大學の教科を改良したのみならず、其の教授法の改善にも大に意を用ひた。殊に、規定を設けて學校内に於ける演說會や討論會の開催を奨励したことなどは、顯著な事實であつた。

**中等教育論** 中等教育に關するメラnhitonの意見は、其の依頼を受けて制定に參與せるサクソニアの學制が具體的にこれを示して居る。サクソニアの學制のことは、中等教育の實際の中に述べて置いたから、こゝにこれを反覆しない。彼は、大學教育の振否が中學校に於ける豫備教育の如何によつて分れるものと考へた。さうして、中等教育改善の必要を唱へ、屢々其の意見を發表して、實際教育者に刺戟を與へた。彼が自ら中等學校の教科書に力を注いだことは、既に述べた通りである。彼の意見は、思想上に於ても、實際上に於ても、獨逸の中等教育界に多大の影響を及ぼした。

中等學校の教師の養成に就いても、彼は、多くの優れた意見を有して居た。彼は、大學に於て、中等學校の教師を養成する道を拓いた。さうして、これを自ら實行した。彼の指導を受けて、有名な教育家となつた者は少なくない。トロツェンドルフ、ネアンデル等は、何れもみな其の門下生である。

#### トロツェンドルフの教育說

トロツェンドルフ (Trockendorf. 1490—1556) は、本名をヴァレンチン・フ

リードランド (Valentin Friedland) と云ふ。サクソニアのトロツェンドルフに生れたので、其の地名が名になつたのである。信仰深い農民を父として生れ、十六歳の時、僧院學校に送られた。後に、ライプチヒ大學を卒業して、ゲーリッツの學校に奉職したが、ルーテルの宗教改革宣言を聞いて、ウィッテンベルヒにルーテルを訪ね、其の教を受けた。其の地に止まること五年、大にメラnhitonの感化を蒙つた。其の後、ゴールドベルヒの學校長となり、二十五年間其の地位に在つて、噴々たる名聲を博した。

トロツェンドルフは、ルーテル及びメラnhitonと同じく、敬虔的な基督教徒の養成を以て教育の目的とした。さうして、宗教と言語の教授を重んじ、訓練に力を注いだ。これ等のことは、あらゆる宗教改革論者に共通して居る。トロツェンドルフの教育意見は、彼が多年經營して居たゴールドベルヒの學校で實施せられた。此の學校に於て行はれた實際の教育は、トロツェンドルフの教育意見を具體的に表示したものであつた。此の學校は、今日の中等學校に相當するもので、六學級に分れて居た。宗教的陶冶と大學入學の準備教育とを其の目的とした。就中、宗教的陶冶を特に重んじた。従つて、此の學校では、宗教教授が教育の中心になつて居た。其の方法として、「宗教問答」を最も熱心に精讀せしめた。次にまた言語の教授にも力を注いだ。殊に羅語や希臘語の教授には、多くの時間を割いた。蓋し、羅語句及び希臘語は、大學教育の準備として最も必要であつたからである。

訓練に特別の注意を拂つたのも、トロツェンドルフの教育意見の特色の一つであつた。彼の說によれば、學校に於ては、最善の國家の形式を以て訓練をしなければならぬと云ふのであつた。其の方法として、彼は、先づ校内の秩序を保つ爲めに、生徒の中から學校管理者と云ふものを選出せしめた。これは國家の官吏に相當する者であつた。起床、



食事の作法、室内の整頓、その他一切のことに就いて、生徒は、此の學校管理者の監督を受けなければならなかつた。従つて、學校管理者は、教師以上の勢力をもつやうになつた。また學校制裁の制を設けて、校長が中心となり、生徒の中から選出した委員によつて、生徒の失行を裁判せしめた。其の裁判には、檢事が告發し、被告がこれを辯解する。多數の生徒は、傍聽席に就くことになつて居た。校長は、中央に座し、被告の申開き如何によつて賞罰を決した。其の外にも種々の役員を設けて、生徒の自治的訓練を奨励した。

### スツルムの教育説

スツルム (Johannes Sturm, 1507-1589) も亦新教主義・新人文主義の教育家中に數ふべき一人である。直接メランヒトンに師事したことはなかつたが、書簡によつて屢々其の教を受けた。ストラスブルヒ

市からの招聘に應じて、一五三七年、同市に一中學校を設立し、四十餘年間、其の學校の經營に従事した。其の學校は、一五七八年頃から非常に盛大になり、東方のゴルドベルヒの學校に對し、西部に於ける中等教育の中心となつた。

スツルムは、信仰心厚く、學識があつて、辯論に長じた人物の養成を教育の目的とした。即ち信仰・知識・言語の三者を發達せしむることが教育の目的であつた。而して、其の目的を建する方法として自由教育の必要を認め、自由教育の原則として、(一)觀察より理解に、(二)舊觀念より新觀念に、(三)教科教材の統合の三點を擧げて居る。彼の最も尊重した學科は、羅句語であつた。而して、彼は當時の教育家が羅句語を寺院のために必要として居たのに反對し、羅句語其のものの價値を認め、これを活語として取扱つた。それが爲めに、彼は、却つて國語を輕視し、其の使用を抑止すると云ふやうな極端な態度に出た。

### ネアンデルの教育説

ネアンデル (Michael Neander, 1521-1595) は、ブランデンブルグのソーランの商家に

生れた。最初、父は、彼を僧庵に送つたが、其の後、彼の學才を認めて學問をさせた。一五四三年、ウィッテンベルヒ大學に入り、ルーテル及びメランヒトンの教を受けた。一五五〇年、エルフルトの僧庵學校長となり、四十五年間其の學校の教授全體をたゞ一人で受持つた。彼は、終生を實際教育の爲めに捧げたのである。

ネアンデルは、他の新教主義の教育者と同じやうに、宗教的信仰の涵養を重んじ、且つ言語教授にも力を盡した。併しながら、また大に實科的教材の價値を認めて、地理・歴史及び自然科学的教科の教授に時間を割いた。メランヒトンの門人中、最も實科的方面に注意した一人であつた。

## 第五節 實學主義教育説の先驅

第十七世紀に至つて、教育思想界の主潮となつた實學主義の教育説は、既に此の第十六世紀中に、其の萌芽を現はして居る。メランヒトンの門人のネアンデルが新教主義の教育家でありながら、實學的の教科を重んじたことは、前節に述べた通りである。ラブレ、モンテーニュ、マルカスター等には、此の傾向が尙ほ一層明かに現はれて居る。これ等の人々を實學主義教育説の先驅者として、ここに擧げることにした。

### ラブレの教育説

ラブレ (Francis Rabelais, 1483-1533) は佛蘭西の人、醫師にして且つ文學者である。

教育者ではない。併しながら、彼は、教育小説を著して、其の中に自分の意見を述べて居る。故に、教育思想家としては、度外することが出来ないのである。彼は、シノンと云ふところに生れ、はじめベネチクト派の僧庵に於て教育を受けた。父は、彼を牧師たらしめようとした。然るに、彼は、夙にヒポクラテスやガレヌスの著書を読み、更に



モンペリエーの大學に入りて醫學を研究した。而して、卒業後は、文藝に興味を感じるやうになり、リヨンに赴いて印刷の校正等をした。一五三三年に、匿名を以て一篇の諷刺小説を著したが、非常に好評を博したので、其の中からガルカンツア (Gargantua) 及びパンタグルヘル (Pantagruel) の傳を抄出して別に出版した。此の書によりて筆禍を蒙り、諸國に放浪するに至つた。

**教育説** ラブレーの教育説は、カルガンツアの生ひ立ちを述べるところに現はれて居る。カルガンツアの父は、ポノクラテス (Ponocrates) と云ふ者に、愛子の教育を托した。ポノクラテスはラブレーが理想的教育者として描き出した人物である。彼は、人文主義者であつた。ガルガンツアを教育するに當り、先づ其の生活に注意した。彼は、最も體育を重んじ、教授した事柄を一々實際生活に適用せしめた。教授の實際に關するラブレーの説は、非常に詳細に亘つて居る。早朝四時に起床してから、夜になるまでの教授事項や、其の方法等が前記の著書の中に詳しく述べてある。またパンタグルヘルの中にも教授科目のことを論じて居る。彼が教科として挙げたものは、**第一に希臘語・羅旬語・ヘブライ語等の語學である。希臘語を最初に教へ、其次に羅旬語、其次にヘブライ語と云ふ順序に従ふべきものとした。教科書としては、クインチリアヌス、シセロ、プラトーン等の著書を重んじた。第二に、宗教的教科を擧げて居る。これには聖書を讀むことを奨励した。第三には、地理學・天文學・理化學・幾何學・算術等の實學的教科の必要を認め、其の外に音樂・遊戲等をも課した。**

**ラブレーの教育主義** ラブレーの教育主義は、教科の内容を一瞥しても明かなるが如く、人文主義・宗教主義・實學主義の調和的見地に立つものである。彼の思想は、人文主義の系統に屬して居る。併しながら、彼は、偏狹な人文

主義に陥らずして、宗教を重んじ、且の實學的知識の必要を認めた。彼は、當時の人文主義者が言語の形式的練習を偏重せるを攻撃し、書物の内容を重んずることの必要を唱へた。言語は、たゞ思想を發表する方便に過ぎない。方便たる言語よりも重んずべきものは、其の言語によつて書かれた内容である。書物を學ぶのは、其の書物の内容を理解し、これを社會生活に應用する爲めに外ならぬ。言語の形式的練習を偏重するが如きは、謬れること甚だしい。かくの如く、ラブレーは、人文主義者の中から出て、實學主義に接近した思想を有して居た。彼の教育思想は、人文主義と實學主義の橋梁をなして居る。これ即ち彼が人文的實學主義と稱せられる所以である。

### モンテーニュの教育説

モンテーニュ (Michel Eyquem de Montaigne, 1533—1592) は、佛國の中等貴族の家に生れた。ボルドーの人である。モンテーニュと云ふところに城を持つて居たので、かく呼ばれるやうになつた。彼の父は、道徳的情操に富み、武藝に秀でた武士であつた。伊大の戦争から歸るときに、數多の學者を伴つて來て、教育上の顧問とした。モンテーニュは、幼少の頃から、これ等の學者を師として、人文主義的な教育を受けた。七歳の時、ボルドーのコレヂに入學したが、家庭教育が十分に出來て居たので、直ちに上級に置かれた。成人後、しばらく軍隊生活に入つたが、一五五七年に選ばれて、ボルドーの市會議員となり、更に市長に推された。市長として俗事を處理する才能を有して居たので、一五八三年にも亦市長に再選した。其の間に彼は多くの論文を書いた。

**教育の目的** モンテーニュは、社會生活の準備を以て教育の目的とした。彼は、當時の學校教育が社會生活上に無價値であることを大に非難した。教育の目的は、文法家を作ることでもなければ、論理學者を作ることでもない。實際生活のために活動の出来る有能な人間を養成することにある。これがモンテーニュの教育目的觀であつた。



かくの如き教育観の下に、モンテーニユは、早教育を主張した。児童の精神は、極めて薄弱にして頼りとするに足らぬものである。習慣と教育の力に支配せられることが多い。故に、幼少の頃、放任して置けば、種々の悪影響を受け、不良な性質の人間となる。従つて、幼時から教育をはじめなければならない——と云つて居る。

**家庭教育論** モンテーニユは、善良なる家庭教育を受けた人である。故に、彼は、家庭教育を重んじ、家庭教師の資格に關する詳しい意見を述べて居る。モンテーニユは、學校教育と家庭教育の長短を論じて、次の如き斷案を下した。児童には、それぞれみな個性と云ふものがある。此の個性に應じた教育をしなければ、教育の効果はあがらない。然るに、學校教育の如く、種々の精神能力を有する者を同時に教育しようとする集合教育では、個性に適應した教育を施すことが出来ない。學校よりも家庭教育の優れる點はこゝにある。彼は、家庭教師に就いて次の如く述べて居る。家庭教師には、知識よりも道徳を重しとする。學殖よりも明瞭な理解力を必要とする。モンテーニユの家庭教育論には、今日でも尙ほ傾向に値するものが少なくない。

**教材選擇論** モンテーニユは、現實社會に於て有能な活動をなし得る人物の養成を教育の目的とした。かくの如き教育目的論を根據として教材選擇の標準を定めた。児童に教授すべき材料は、人間の社會生活上に必要なものでなければならぬ。人間の社會生活上に最も必要な教科は、先づ第一に哲學である。哲學は、人倫道徳の何たるかを教へ、人間の生活を向上せしめる。故に、哲學は、如何なる階級の人々にも必要である。第二に、彼は、國語を擧げた。國語は、古語よりも先きに授けなければならないと云つて居る。其の他に必要な學科として、彼は、論理學・物理學・幾何學・修辭學を擧げた。

**教授及び訓練論** モンテーニユは、中世期の辯證法を排斥した。知識の價值を知識其のものに認めず、實行を助け、實際生活に役立つところに知識の價值を認めた。單なる知識は、決して人を賢くしない。單なる知識よりも重んずべきものは、理解力と判斷力であると言つて居る。知識を同化して、これを實行に現はすことを、モンテーニユは教授訓練の根本主義としたのである。

モンテーニユは、新らしい語學教授法を唱へた。それは、第十九世紀に於て最も盛んに行はれた直接教授法である。モンテーニユが第十六世紀の昔に於て既にこれを唱へ出した卓見を没してはならない。

モンテーニユは、體育を重んじ、これによつて道徳を涵養しやうとした。訓練の如きは、最も寛大なることを理想とした。

**マルカスター教育説** マルカスター (Richard Malcaster. 1830—1911) は、英國の教育家である。イートンを出て、ケンブリッジのキングス・コレヂに學び、更にオックスフォードに移つた。後にマーチャント・テイラーズ・スクール及びセント・ポールズ等の校長となり、實際教育のために少なからぬ貢獻をした。著書には「兒童教育論」と云ふのがある。

マルカスターは、天性の完成を以て教育の目的とし、天性の力に機智・記憶・思慮の三つあることを認めた。此の三つの力を調和的に助成するのが教育の目的であつた。幼時の教育には國語を重んじ、古語を斥け、實際的教育に力を注ぎ思辨的教育を避けなければならないと言つて居る。彼は、女子教育の必要を認め、初等學校に於ても、高等學校に於ても、男女共學を可とした。學校教育よりも家庭教育を重んじた點は、モンテーニユと似て居る。其の他、教



員の養成に就いても傾向すべき種々の意見を述べた。大學では、法律學や醫師を養成すると同じやうに、教員をも養成しなければならぬと云つて居る。

マルカスターは、感覺的實學主義の先驅者である。其の思想は、コメニウスによつて後に傳へられた。加之、實際教育に關する彼の意見は、近世の教育に與へる種々の暗示を含んで居たが、ペーコンの如く文名が高くなかつたから、後世に及ぼした影響は比較的微弱であつた。

### 第三章 第十七世紀の教育

#### 第一節 實學主義の勃興

第十七世紀に入りて、實學主義の教育が勃興して來た。第十七世紀の教育を回顧して、先づ腦裡に浮んで來るものは、此の實學主義である。依つて、茲に實學主義の意義と其の由來とを述べて、第十七世紀の教育及び教育思想の特色を明かにしたいと思ふ。

**實學主義の意義** 實學主義の語は、人文主義に相對立するものである。人文主義の教育は、古典並に古語を重んじた。これに反して、實學主義の教育は、自然科學を最も尊重するものである。かくの如き傾向は、必ずしも第十七世紀に至つて、はじめて現はれたものでない。既に第十七世紀以前にも、自然科學的知識の必要を認めた者は少なくなかつた。例へば、エラスムスの如きは、幾何・算術及び自然の研究の必要を明言して居る。メランヒトンも亦同じ

意見を有し、學生時代には、言語の外に、物理學・數學・天文學・醫學及び歴史等を修めた。併し、これ等の人々は、何れもみな實學其のものを言語研究の要件として尊重したのである。實學の知識がなければ、古典や古語を了解することが出来ないから、實學を修めなければならぬと云ふのであつた。實學其のものの價値を認めてこれを研究しようとしたのではなかつた。第十七世紀に至つて起つた實學主義は、それと全く其の意味を異にして居る。第十七世紀の實學主義は、自然科學其のものに独自の價値を認め、古典や古語の研究に對立しようとしたものである。

#### 實學主義の由來

第十七世紀に至つて、かくの如き實學主義が勃興したことに就いては、種々の原因を擧げることが出来る。これを思想上の原因と社會上の原因とに分けて次に概説して見よう。

**思想上の原因** 思想上の原因は、第一、舊思想に對する反動、第二、新思想の影響である。舊思想とは、スコラ哲學や人文主義を意味して居る。スコラ哲學は、基督教の教義を希臘の哲學によつて基礎づけようとしたものである。従つて、概念の分析と云ふことを非常に重んじ、何の根據もない空論のみを事とするやうになり、煩瑣哲學の稱をさへ生ずるに至つた。かくの如き舊思想に對しては、自ら反動が起らざるを得ないのである。また人文主義其のものは、本來希臘・羅馬の精神を現代に活かさうとして起つた新思想であつた。其の目的とするところは、古典や古語を通じて古代に於ける自由な精神を復活せしめることであつた。古典や古語の研究は、たゞ其の方便に過ぎなかつた。然るに、此の人文主義は、第十六世紀に入つて、其の目的と手段とを取違へ、只管古典及び古語の研究のみに没頭するやうになつた。其の結果は、徒らに希臘・羅馬の古典の註解や、または古語の記憶が、學問研究の全部となつてしまつた。かくの如き傾向も亦實學主義を勃興せしむる最も有力な原因の一つであつた。



次に新思想とは何であるかを明かにしたい。新思想の一つは、英國に起つた經驗論であつた。經驗論は、前にも述べて置いた通り、フランシス・ベーコンを其の先驅者とする近世思想史上の一大潮流である。經驗論は、先天的觀念論を排し、經驗を以て知識の基礎とする學說であるから、此の學說によれば、知覺による直接の經驗より外に、眞理と云ふものを認めないことになる。こゝに自ら實學主義の勃興を促すに至つたのである。次に自然科学思想の發達も亦思想上の新傾向の一つに數へなければならぬ。文藝復興によつて生じた自由研究の精神と、經驗哲學の影響を受けて促進された自然科学研究熱は、第十七世紀に至つて著るしい高潮に達した。教育上の實學主義が自然科学研究熱に伴つて勃興したことは云ふまでもない。

**社會上の原因** 第十七世紀に於ては、實社會の大勢も亦實學主義の勃興を促した。其の一つは、地理上の發見が各國の國民を刺戟して、實學の方面に眼を轉せしめたことである。コロンブスの亞米利加大陸發見、マゼランの世界一週等により、地理上の壯舉を夢みる者が、當時の世の中には非常に多かつた。それに伴つて地球儀の製作や地圖の製作が盛んになつた。これ等の事實は、何れもみな實學主義の勃興に直接・間接の力を添へたのである。次に尙ほ一つの原因として、自然科学上の發明發見と云ふことを挙げなければならない。自然科学の研究熱が高まつた結果として、自然科学其のものが長足の進歩發達を遂げ、自然科学上の發明や發見が相次いで世人の耳目を驚ろかした。これまた實學主義の發達を促す最も有力な原因であつた。

**實學主義の先驅者** 實學主義は、第十七世紀の歐洲全土を支配した教育上の新思想であつた。かくの如き新教育思想の先驅者は、既に第十六世紀に現はれた。教育上の實學主義は、佛蘭西から生じた。其の最初の代表者と見るべ

き者は、ラブレールである。ラブレールに次いで此の思想を發展せしめた者は、モンテーニュであつた。ラブレール及びモンテーニュの教育思想に就いては、前にこれを述べた。英國に於ける實學主義の先驅者は、經驗主義哲學の祖たるフランシス・ベーコンである。ベーコンの思想は、當時の實際教育界に種々の暗示を與へた。ベーコンに次いで經驗主義の哲學を大成せしめたロックは、最も組織的な教育意見を發表した。近世の教育思想家として其の名を逸することの出来ない者である。ロックの教育說に就いては、後にこれを述べる。獨逸の實學主義教育家としては、ラトケを挙げなければならない。ラトケに一步を進めた者は、コメニウスである。コメニウスも亦近世の教育思想家として不朽の名を傳へられて居る。ラトケ及びコメニウス等の教育說に就いても、同じくこれを後に述べる。

**實學主義の特質** 第十七世紀の實學主義もこれを仔細に吟味すれば、其の中に種々の異説が含まれて居る。ラブレールの如く、人文主義に結合せる實學主義もあり、モンテーニュの如き社會的思想を背景とする實學主義もあり、ベーコン、ラトケ、コメニウス等の如き感覺・知覺を根柢とする實學主義もある。併し、これ等の實學主義に共通した特質を擧げて見れば、第一、實際生活を本位に教育の目的及び教科を定めて居ることである。實學主義は、宗教主義の教育家の如く、現實の世界を超越せる神の國を目標として教育の理想を描かない。實際社會に於て積極的に活動し得る人物の養成を教育の目的として居る。従つて、其の教科の如きも、専ら實際社會の生活を標準として定めた。人文主義者が古典・古語を重んじ、宗教主義者が宗教的教科を重んじたるに反し、實學主義者は、専ら自然科学的教科を選び、其の言語の如きも日常生活に縁遠き古代語を避けて現代語を採用した。第二、教授の方法を改め、中世期以來の誦讀と記憶とを排し、直觀と理解とを重んじた。自然科学の研究上には、實物を直接に觀察することが最も必要



である。ペーコンが學問の新研究法として叫んだのは、個々の事物を正確に観察して眞の知識を求めようとする歸納法であつた。自然科学を主要教科とした實學主義の教育に於て、直觀が特に尊重せられるのは當然のことである。第三、身體の養護に注意し、寛和な訓練を主張した。中世の教育に於ては、身體を卑しみて精神の牢獄とし、且つ厳格な訓練を行つた。實學主義の教育思想は、かくの如き中世期の教育思想と全く反して居る。

第十九世紀初頭の教育家フォン・ラウメルは、第十七世紀の實科主義新教育思想の特徴を詳細に述べた。其の要點を抄出して見ると、(一)新教育は、言文を弄する教授法を進路なく目的なき盲目的行動としてこれに反對した。(二)新教育は、從來の方法を全然否定した。單にこれを改めようとしたのみではなく、全く新しいものを以てこれに代へようとした。(三)新教育は、記憶のみを重んじた從來の教授法を排斥し、記憶の練習に代へるに理解力の練習を以てした。(四)新教育は、兒童の受動的態度を不當とし、創造的・自發的活動を奨励した。(五)新教育は、懲罰の必要を認めなかつた。新教育の教授法によれば、兒童は、自ら進んで愉快に學習するから、懲罰等の必要がないと云ふのである。(六)新教育は、國語を尊重して、羅旬語等に力を注いだ從來の教育に反對した。(七)新教育は、實科を重んじ、且つ實科と言語科との結合を企圖した。(八)新教育は、體育を奨励し、且つ學校設備の改善等にも注意した。(九)新教育は、直觀の發達を重視した。従つて、直觀の練習に最も力を注いだ。直觀を重んじ、理解を重んじた新教育は、記憶に反對すると共に、想像にも反對した。ラウメルは、其の他にも尙ほ種々の點を擧げて居る。

## 第二節 宗教界の新傾向

教育界に於ける實學主義の勅興と前後して、宗教界にも新傾向が現はれた。舊教界に於けるジャンセン主義、新教界に於ける敬虔主義の發生がそれである。而して、これ等の新傾向は、教育上にも種々の影響を及ぼした。故に、此の新傾向の由來と教育上に及ぼした影響を簡単に述べて置かなければならない。

**ジャンセン主義の起原** ジャンセン主義は、エスイット派と同じく、基督教界の革新を目的として起れるものである。同じく舊教に屬して居るが、其の宗教觀や教育觀には、エスイット派と反對する所が多かつた。従つた、エスイット派からは、激しい反對を受けた。ジャンセン派とエスイット派の教育說の相違は後に述べる。

ジャンセン主義の創唱者は、ジャンセン (Jansen, 1585—1638) である。ジャンセンは、和蘭に生れ、リヨン大學の教授となり、ベルギーに於て逝去した。彼は、當時の羅馬に於ける寺院の腐敗墮落を憤慨し、宗教界の革新を當面の一大急務と認めた。其の方法として、彼は、(一)種々の宗教團體をして、其の設立の精神に立ち歸らしめること。(二)國語によつて記された聖書や其の他の宗教關係書を普及せしめること、(三)儀式よりも信仰を重んじ、敬虔的な感情を養ひ潔白な心を保たしめること等を擧げ、自ら厳格な禁欲的生活を實行して、其の主義の實現をはかつた。

**ジャンセン主義の教育に及ぼせる影響** ジャンセン主義を教育上に活用した功績は、これを先づポール・ロワヤールに於ける同主義者の活動に歸すべきものである。ポール・ロワヤールは、第十三世紀の頃から巴里市の近郊に起れる僧庵であつた。第十七世紀に至り、此處に學識のあるジャンセン派の僧侶が集まつて、宗教的修養をなすと同時に、學術の研究及び教育の改良等に努力した。こゝに於て、ポール・ロワヤールの學風並に教育を生じて來たのである。ポール・ロワヤールに集會せる教育家は、其の事業を外部に宣傳することを好まず、着實に教育をして行か